

国士馆大学文学部

創設五十周年記念誌



国士館大学文学部

創設五十周年記念誌



世田谷キャンパス（2013年4月撮影）



町田キャンパス（2012年5月撮影）



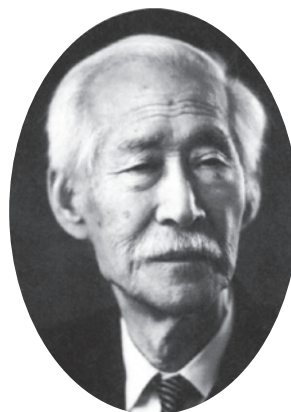
平成28年度文学部専任委員（平成28年7月撮影）



第2代学部長
峯村三郎 教授



初代学部長
尾形裕康 教授



学部代表教授
宇野哲人 教授



第6・7・8代学部長
大類 純 教授



第5代学部長
西尾邦夫 教授



第3・4代学部長
春名好重 教授



第13・14代学部長
長島弘道 教授



第12代学部長
山本昌一 教授



第9・10・11代学部長
廣野行甫 教授



第18代学部長
磯辺武雄 教授



第16・17代学部長
阿部 昭 教授



第15代学部長
奥野中彦 教授



第22代学部長
石橋崇雄 教授



第20・21代学部長
枝村亮一 教授



第19代学部長
藤田 忠 教授



第23代学部長
長谷川均 教授

序

文学部創設五十周年を祝して

学校法人国士館理事長 大澤 英雄



「国士館大学文学部創設五十周年記念誌」が刊行されますことは、平成二十八（二〇一六）年に五十周年を迎える文学部が、これまで遂げてきた発展の足跡を顧み、これからの進展を見通すうえで、また、平成二十九（二〇一七）年に百周年を迎える本学園のさらなる飛躍を展望する観点からも、たいへん意味のある企画であると思われます。

文学部は、昭和四十一年（一九六六）年四月に創設されました。法学部とともに出された「設置認可申請書」には、「社会・人文科学の分野において深遠な学術を教授研究し、豊かな教養、高潔な人格を備えた有為な人材の育成を目的」として、「設置を申請」する、そして、「名実ともに総合大学としての体制をととのえ、文化の創造発展、国家社会の福祉に一層貢献することを期するものである。」とされていますが、ここには、いわゆる総合大学構想のもと、文学部に大いなる期待が寄せられていたことが示されていると言えます。以後、文学部は、こうした趣意に基づき、半世紀にわたって、着実に発展してきました。多くの卒業生が、社会における多様な方面で活躍していることは、その一つの証であるといえます。

文学部にとって、創設五十周年を迎える本年ですが、ここ十年をみても、大きな変革の動きの中にあるといえましょう。例えば、平成二十（二〇〇八）年に、本学園創立百周年記念事業の一環として建設された梅ヶ丘校舎は、それまで世田谷と鶴川（現町田）キャンパスとに別れて学んでいた文学部学生に、全員が世田谷キャンパスで学ぶことを可能としました。これによって、二年から三年の進級条件や諸資格の取得、学部学生の活動において、さらなる充実への見直しがなされ、文学部学生の学生生活に新たな拡充がもたらされました。また、平成二十七（二〇一五）年には、学科入試が導入されるなど、かねてより検討を進めてきた学部改革が具体的に動き始め、学科制の導入がなされています。

国士舘大学は、世田谷・町田・多摩の三キャンパスに、文学部のほか、政経・体育・理工・法・二十一世紀アジア・経営の七学部を擁する、全国有数の総合大学の一つとして、発展を遂げつつあります。平成二十五（二〇一三）年には、やはり創立百周年事業の一環として、心と体を育てる複合施設であるメイプルセンチュリーホールも完成しました。本学は、ハード・ソフトのあらゆる面において、学生本位の大学づくりに向かって、一層の努力を行っていると看做します。その中で、いま、文学部に新たな意義が求められていると言えます。

本学園が今後、百五十年、二百年と続くなかで、文学部が、その発展の中核の一翼を担うことをおいに期待し、創設五十周年のお祝いの御挨拶いたします。

文学部創設五十周年を祝して

国士館大学学長 佐藤 圭一



国士館大学文学部が開設されたのは昭和四十一年（一九六六）年四月のことでした。爾来、この平成二十八（二〇一六）年四月で五十周年を迎えることになりました。これを記念して「文学部創設五十周年記念誌」が刊行されますことは、在籍する先生方の日々の研鑽を世に問うことだけに留まらず、学部発展の足跡を後世に残すと共に、文学部に求められている将来を展望する意味からも価値ある企画と考えます。

二十一世紀を十数年経過した今日、世界情勢は羅針盤の針を失ったかのように迷走し、世相は漂流しています。先が見えないことに多くの人々は不安に駆られています。混沌の現代社会にあって、大が担うべき使命とは問題解決能力を持った教養豊かな人材の育成です。なぜならば、人の生き方に示唆を与えるのは究極には哲学や思想であり、多様な価値観を持った人々と共存するには相手側の営みを知るための歴史や宗教などへの理解が不可欠からです。また、グローバル化が進展する程に求められるのは歴史や文化への深い造詣であって、これらは専門知識だけでは決して解決することはできません。教養の豊かさにより、人間は「心身ともに逆境に耐え、真贋を見抜き、自分と思考形態が違う相手を受け入れ、妥協点を見出す能力」を身につけることができるのです。文学部の必要性は益

々高まっているといえます。

文学部へのこうした期待と要請に応えるために、国士舘大学文学部は創設五十周年を迎えて従前の三学科八専攻制から、三学科コース制に改組することになりました。文学部は、コース間の垣根を可能な限り低くすることにより、専門性の他に、過去から現在まで多様に展開されてきた人間の営みを総合的・多角的に考察する機会を提供し、視野の広い教養人を養成するという社会的責務を果たしていくことになります。国士舘大学文学部のさらなる発展を祈念し、お祝いの言葉とさせて頂きます。

文学部五十周年にあたり若い先生方へ

国士舘大学文学部長 長谷川 均



二十年前に発刊された「文学部創設三十周年記念論集」の巻頭言で、当時の長島弘道学部長は、文学部の特徴のひとつを専門分野の多様性であると言った。「こんなものは改革ではない！」と一部の教員から揶揄されながら、二〇一六（平成二十八）年五月教授会で、私たちは文学部改革案を可決した。多様性は、文学部改革に臨む執行部が学内各所で説明する折々に強調した文言であった。偶然にも、長島元学部長のことばかりちょうど二十年後に、再び文学部の多様性を学部長は訴えることになったのである。

いろいろなものが混在しているだけの状態を多様性とは言わない。多様性とは、すなわち、強く豊かな個性を持ちながら、一方で周辺の領域との類似性を認め、柔軟に関わりや繋がりを持つとうとする人々のみが生み出しうるものであり、それこそがわが文学部の最大の魅力である。私たち文学部の教員は、学内で最も優秀な学生を集め、魅力ある多様な学問領域を持つと自負している。ところが、学部長に就いてからの短い期間のうちに、「専攻というタコソバ」「自浄能力の無い集団」との文学部への評言が、学内に根強く存在することを知った。もちろん私たちにも責任はあるだろう、だが「文学部との対話」を重ねることに腐心された歴代学部長の努力は、いまだ道半ばと思いい知らされた。

この二十年間で、文学部創設三十周年当時の方々の多くは去ってしまった。いま、三役席から会議場を見渡すと、学生と見紛うような若さに満ちた方々が連なっている。教授陣のネガティブなご託宣を、微笑みながら聞く余裕のある人たちである。しかし、あと二十年も経てば、若い先生方も説教臭いことを言うようになるのだろうか？

歳は重ねても、多様なものを理解する姿勢は保ち続けてほしい。ポジティブな姿勢で攻めてほしい。文学部はいま、これからのグランドビジョンをまとめなければならない時期にあると思う。そのビジョンを実現してこそ、真の文学部改革になる。それを担うのは若い先生方である。この方々がベテランと呼ばれるようになった時、後に続く同僚や学生たちに胸を張って誇れる文学部でありますように、力みすぎずグランドビジョンをまとめてほしいと願う。

文学部五十周年は、「これまで」と「これから」を繋ぐ大切な節目になるのだと思いたい。

目次

序

文学部創設五十周年を祝して	学校法人国士館理事長	大澤 英雄
文学部創設五十周年を祝して	国士館大学学長	佐藤 圭一
文学部五十周年にあたり若い先生方へ	国士館大学文学部長	長谷川 均

第一部 文学部四十周年からの十年

一 創設期の文学部	3
二 四十周年からの十年	4

第二部 学部・学科・専攻・研究科の現状

文学部	9
第一項 教育学科	11
一 教育学専攻	12
二 倫理学専攻	19
三 初等教育専攻	28

第二項 史学地理学科	36
一 考古・日本史学専攻	37
二 東洋史学専攻	43
三 地理・環境専攻	48
第三項 文学科	59
一 中国語・中国文学専攻	60
二 日本文学・文化専攻	69
大学院 人文科学研究科	75
第一項 修士課程	76
一 人文科学専攻	77
二 教育学専攻	78
第二項 博士課程	79
一 人文科学専攻	80
二 教育学専攻	81
第三部 統計・現況	
(一) 歴代三役と事務長	85

(二)	歴代専攻主任と学科主任……………	86
(三)	現職教員一覧(平成二十八年五月現在)……………	89
(四)	現職職員一覧……………	93
(五)	担当学生係一覧(平成十九年～)……………	94
(六)	学生数……………	96
(七)	教員資格取得者数……………	104
(八)	諸資格取得者数……………	106
(九)	紀要目次……………	107
(十)	文学部年表……………	132
(十一)	大学院年表……………	136

五十周年記念行事実行委員一覧
編集後記

第一部

文学部四十周年からの十年

一 創設期の文学部

文学部は一九六六年（昭和四十一年）四月、国士館創立五十周年記念事業の一環として、総合大学への転化を図る目的をもって法学部と同時に創設された。設立の意図については、文部省への「設置認可申請書」（一九六五年（昭和四十一年）に、次のように記されている。

本大学は創立以来四十八年、日本精神にもとづき、心理の探求と学理の応用につとめ、深く専門の学芸を教授し、その普及をはかるとともに、心身ともに健全な人材の育成に努力を傾注してきた。今回、本大学は社会・人文科学の分野において深遠な学術を教授研究し、豊かな教養、高潔な人格を備えた有為な人材の育成を目的として、法学部・文学部の設置を申請する。当大学は既設の大学院政治学研究科／経済学研究科・政経学部一部・政経学部二部・工学部・体育学部と相俟つて、名実ともに総合大学としての体制をととのえ、文化の創造発展、国家社会の福祉に一層貢献することを期するものである。

創設当初の文学部は、三学科七専攻で構成された。「教育学科」には教育学専攻・倫理学専攻、「史学地理学科」には国史

学専攻・東洋史学専攻・地理学専攻、「文学科」には漢学専攻・国語国文学専攻が設置された。これは、旧制大学の文学部における哲学・史学・文学という基本構成に倣ったものであった。史学地理学科と文学科では、日本及び東洋の文化を基本に見据えて歴史・地理・言語・文学に限定した編成に特色があり、欧米系の学問に関する専攻を置かなかったのは、国士館の「建学の精神」に関わる教育理念に基づくものであった。学生定員は、漢学専攻が二十名で、他の専攻は全て三十名であった。

また、各学科の教育目標は次の通りであった。「教育学科」は、有能な教育者や社会の広い分野で活躍できる実力者の養成を使命とし、各種思想体系の分析的認識、理論的思考力を養うとともに、諸資格の取得を目指すことをねらいとする。「史学地理学科」は、各分野の実証的研究を行い、事物の意義を把握し、歴史と地理の正確な理解の上に、日本の伝統と国土を愛し得る人物を育成するとともに、実力ある教員の養成にも重点を置く。「文学科」は、漢文・国文学の古典の研究を通して、東洋と日本の伝統的精神を理解し、人間の英知の最高峰の一つである東洋の格調高い詩文と道徳観を現代に再生、現代文学にも研究視野を置く。（「国士館大学新聞」48号）

創設期の文学部の特色として、中学校及び高等学校の教諭免許状（社会・保健体育・国語・書道）や図書館司書、学校図書館司書教諭、博物館学芸員などの資格取得に配慮した点があ

る。

その後、一九六七年（昭和四十二）四月、国史学専攻に考古学コースが、一九六九年（昭和四十四）四月、教育学科に幼稚園及び小学校教諭養成を目的とする初等教育専攻が、定員二十名で設けられた。これに併せて、「初等教育特別講座」（小学校二級免許状取得可。夜間実施）を設けて、国士館大学及び短期大学に在籍する二年生以上の希望者に便宜を図っていた。但し、この講座は一九八二年（昭和五十七）に文部省の指導により廃止された。この他、社会教育主事、測量士補の資格も取得できるようになった。なお、一九七五年（昭和五十）、初等教育専攻は鶴川キャンパスに全課程を移転した。

こうした経過の中で、多くの碩学を教授陣に迎えて船出した文学部であったが、その実態は必ずしも順風満帆ではなかった。むしろ、随所に腐心した時代と表した方がよいかもしれない。

まず、「定員割れ問題」である。この淵源は、大学運営のありかたに端を発した悪世評、国士館人気の低迷である。受験生勧誘に教職員はもとより、学生まで動員された。

次に「低学力問題」である。これは、一九五五年（昭和三十）以降の高度経済成長の展開を受けて、中学校・高等学校で英語と理数を特化したことにある。理数系優位の時代思潮、この煽りを受けて、人文学系は低迷を続けることになる。学生の学力、特に、学習の基礎となる国語力の低さには閉口頓首し

た。それでも四年間での卒業を適えさせる為に、学部をあげて取り組んだ。毎週行われる学長訓話の所感文を必ず手書きで提出させ、それを添削指導したのも、こうした狙いを含んでのことであった。

二 四十周年からの十年

（二〇〇六年（平成十八）四月以降）

一九九一年（平成三）、大学設置基準等が大綱化・自由化の方向へ改定され、各大学がそれぞれの個性を生かしながら、独自の判断によって研究教育組織・教育課程の編成を行うようになった。国士館大学では、教養課程・教育課程の廃止・再編、昼夜開講制・科目履修制度・セメスター制・単位互換制度の導入などが行われた。さらに、二〇〇四年（平成十六）、国立大学の法人化を背景にした国の政策のなかで、大学の社会的役割が教育・研究の二本柱から、教育・研究・社会還元の本三本柱へ転換された。他に、専門職大学院の設置、第三者評価制度の確立、私立学校法の改正など様々な改革が行われた。

このように、文学部が創設四十周年を迎えるあたりから今日に至る間は、終戦直後以来の大学制度大改革の時代となった。

以下に、二〇〇六年（平成十八）四月以降二〇一六年（平成二十八）三月までの主な出来事について、その概略を記すこと

とする。

二〇〇六年（平成十八）

・十一月七日。「文学部創設四十周年記念式典・祝賀会」を挙行。「国士館大学文学部創設四十周年記念誌」を刊行。

二〇〇七年（平成十九）

・九月。「樹人」（平成十九年度版）を刊行。平成三年、同四年、同六年、同十一年に継いでの刊行。専攻の紹介・教員の紹介・諸資格取得・他で構成。

二〇〇八年（平成二十）

・二〇三月。創立百周年記念事業の一環として、梅ヶ丘校地に新教育棟（34号館）を建設し、そこに、鶴川キャンパスで学ぶ、政経学部・法学部・文学部の一年・二年及び初等教育専攻の三年・四年をまとめ、教育・研究の充実を図るという法人の方針を受けて、世田谷・梅ヶ丘キャンパスに移転した。これにより、キャンパス間にあった教育上の諸問題が解消されることになった。異なるキャンパスでの学習であったために厳しくせざるを得なかった二年から三年への進級条件が緩和されたこと。諸資格の取得が容易になったこと。特定専攻の学生のみで構成されていたクラブ活動が構成員の範疇拡大により、新たな活躍がみられるようになったこと。各専攻の行事が学年間の隔たりがなくなり、ますます活性化されたこと、等々。他方、この移転により苦汁を嘗めた専攻があった。一つは、教育学専攻であ

る。保健体育教諭免許状取得希望者の実技科目教場の確保ができないために、夏期・冬期の休暇中に町田や多摩キャンパスでの集中講義を強いられた。この状態は二〇一三年（平成二十五）のメイプル・センチュリー・ホール開設まで続いた。もう一つは、初等教育専攻である。新たな教場の面積が前教場の半分にも満たない狭さに閉口した。殊に、家庭科準備室・音楽担当専任教員研究室・体育館・屋外運動場の不設置は、学習効果の低迷を招くこととなった。

二〇〇九年（平成二十一）

・大学設置基準の改正で各大学でのファカルティ・ディベロップメント（FD）実施が義務づけられた。本学では学長主導で、授業内容・方法の改善を図るための組織的な研修・研究を教員の集合研修の機会をもったり、教員間で公開講座を行い相互評価の機会をつくったり等の活動が始まった。

二〇一一年（平成二十三）

・三月。一九八八年（昭和六十三）度より採用した推薦入試中の指定校推薦制度。効果が希薄のため文学部は二〇一二年（平成二十四）度を以て廃止する。但し、史学地理学科・文学科の専攻単位採用は継続となる。

二〇一二年（平成二十四）

・二月。一九八七年（昭和六十二）度より採用の九月卒業制

度の適用変更。従来は卒論のみ対象であったが、セメスター制導入に伴って卒論以外にも対象とすることとなった。

二〇一四年（平成二十六）

- ・六月。学校教育法の改正により、学長の権限が強化され（トップダウン方式）、教授会は意見を述べる機関として位置付けられた。

- ・六月。文学部改革（専攻の廃止・学科制の確立）は、三年後の実施を目的に進める旨、学長より通達あり。

二〇一五年（平成二十七）

- ・学部改革に伴い、専攻入試を学科入試に改める（平成二十八年度入学生より適用）。

- ・学部改革に伴い、学科長に関する規定を設置する。初代学科長を三名（教育学科、史学地理学科、文学科）選出した。

- ・大学制度改革の動きの中で、大学の活動を活性化させることを目標にして、教育理念・目標、教育・研究活動、教員組織、施設設備等の項目についての自己点検・評価を実施した（学部関係については、教務主任・学生主任が担当）。二〇一六年（平成二十八）六月に法人が一括して文部科学省に提出。これと関連して、シラバスの作成、課題図書の設定（リーディング・アサインメント）、学生の個別指導のための時間（オフィス・アワー）の設定などによる教育方法の改善に努めた。

- ・同窓会の援助を得て時間限定であるが、百円朝食を実施した。学生が朝食を取らないで登校し、朝からの講義に身が入らないことを改善するため、学生食堂で百円の値段でフランスのとれた朝食メニューを用意提供するもの。

- ・法人より教務事務組織の改編が示される。学部所属職員が大幅減となる予定。

以上のように、四十周年以降の十年は、終戦直後以来の大学制度大改革の真只中であつた。特に、終盤の二年はその集約期にあり、文学部の将来を占う最大の山場であつた。

あらゆる価値観が根本から変革している今日。その中で、取り残された大学制度によりやくメスが入り将来に希望を託せる大学への改革が始まつた。

（中野 紀明）

第二部

学部・学科・専攻・研究科の現状

文学部

教育研究上の目的

文学部の理念と目的は「人文科学を中心に深遠な学術を教授研究し、豊かな教養と高潔な人格を養い、文化の創造力をつけ、社会福祉の増進や国際社会の進展に寄与できる人材を養成する」ことにあります。これは単に専門的な知識や技術の伝授にとどまることなく、リベラル・アーツの伝統を踏まえて「心の教育」と「人間形成」を根幹として「人を育成する」ものです。その理念・目的を達成するために学部内に「教育学科」「史学地理学科」「文学科」の三学科を置き、「教育学科」には教育学専攻、倫理学専攻、初等教育専攻の三専攻を、「史学地理学科」には考古・日本史学専攻、東洋史学専攻、地理・環境専攻の三専攻を、「文学科」には中国語・中国文学専攻、日本文学・文化専攻の二専攻を置いています。専攻・学科間でそれぞれ有機的・発展的に広く基礎を学び、深く専門領域を極め、現代社会に寄与すべく徳と叡智を涵養すべく、綿密なカリキュラムを編成しています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミSSION・ポリシー）

文学部では、国士舘大学の「建学の精神」と教育目標を理解し、人文科学、なかでも教育学、史学地理学、文学の諸分野を通じて人格の向上と完成を目指し、豊かな想像力と幅広い知識、表現力を持って、広く社会に貢献する気概ある学生を求めています。

具体的には、大学での学習・研究に必要な基礎力を有する学生を受け入れ、大学で習得した幅広い教養と各専門分野の知識技能をいかして社会で活躍できる「人づくり」に努めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

文学部の理念と目的は、「人文科学を中心に深遠な学術を教授研究し、豊かな教養と高潔な人格を養い、文化の創造力をつけ、社会福祉の増進や国際社会の進展に寄与できる人材を養成する」ことにあります。これは単に専門的な知識や技術の伝授にとどまることなく、教養科目を必須とする大学の伝統を踏まえて「心の教育」と「人間形成」を根幹として「人を育成する」ものです。その理念・目的を達成するために学部内に「教育学科」「史学地理学科」「文学科」の三学科を置き、「教育

学科」には教育学専攻、倫理学専攻、初等教育専攻の三専攻を、「史学地理学科」には考古・日本史学専攻、東洋史学専攻、地理・環境専攻の三専攻を、「文学科」には中国語・中国文学専攻、日本文学・文化専攻の2専攻を置いています。学科・専攻間でそれぞれ有機的・発展的に広く基礎を学び、深く専門領域を極め、現代社会に寄与する徳と英知を涵養できるよう、綿密なカリキュラムを編成しています。即ち、(1)総合教育科目、(2)外国語科目、(3)専門科目(学科・専攻ごとの専門課程の科目群であるとともに、各自の必要に応じて専門課程以外で履修できる科目群を編成)、(4)自由選択枠(①、②、③の科目区分にとらわれることなく自由に履修できる選択枠)の区分科目を配置し、系統的履修を指導します。

③ 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

文学部は「人文科学を中心に深遠な学術を教授研究し、豊かな教養と高潔な人格を養い、文化の創造力をつけ、社会福祉の増進や国際社会の進展に寄与できる人材を養成する」ことを目的とし、卒業時点において各学科各専攻でのディプロマ・ポリシーを達成し、所定の単位(総合教育科目18単位以上、外国語科目8単位以上、専門科目90単位以上、自由選択枠8単位以上、合計124単位以上)を修めた学生に卒業を認定し学位を授与しています。なお、文学部では、卒業論文(初等教育専攻では卒業研究)を学位授与の重要な要件に位置づけています。

第一項 教育学科

教育研究上の目的

教育学科は、教育学専攻、倫理学専攻、初等教育専攻の三専攻によって構成されています。本学科では、本大学の建学の理念や文学部における研究・教育理念を共通の目的として、それぞれの専門性を「人を育成する」ということがらに直結させ、教育学専攻では「人間形成」の学としての教育学の追求、倫理学専攻では「哲学・思想的教養を基盤とする問題発見能力とその自覚的解決能力の育成」、初等教育専攻では「教員として豊かな人間性、社会性や実践的能力を備えた人材の養成」を目的としています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）
 国士館大学文学部教育学科各専攻の教育目標を理解し、各専攻の求めるアドミッション・ポリシーに合う、積極的學生を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
 教育学科では、人間形成に関する洞察を総合的に深めるために、教育学、哲学・思想、初等教員養成の三分野のカリキュラムを中心に構成されており、さらに教職と教育に関連する科目を学科内において有機的に配置している。教職は、幼稚園・小・中・高校から養護教諭まで、また、資格としては、社会教育主事、図書館司書、司書教諭などが取得できます。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
 大学所定の単位を修め、各専攻のディプロマ・ポリシーを達成した學生に、卒業を認定し学位を授与しています。なお、卒業論文（初等教育専攻では卒業研究）を学位授与の重要な要件に位置づけています。

一 教育学専攻

1 教育学専攻の教育理念

教育研究上の目的

人間形成に関する洞察を総合的に深め、それをもとに社会に貢献できる人材の育成を目的とします。そのために、

1. 社会や時代の動きをとらえながら、教育の本質とは何かについてじっくりと考え、
2. 人間の心と身体 of のしくみおよびその発達について科学的に知り、
3. 少人数制演習での発表や討論によってコミュニケーションの感性を養い、
4. 各種の実習や社会的活動への参加を通して行動力と責任感を身につけること、を重視します。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

1. 教育とは何か、人はなぜ学ぶのかについて、もつと深く知りたいと思ったり、考えたことがある人を求めます。また、人間の心や身体、あるいは社会のしくみについて、深

く学びたいと考える人を求めます。

2. スポーツあるいは文化・芸術活動において一定の活躍をして、その経験を将来教育者として活かすことができる人を求めます。

3. 生徒会活動やボランティア活動で一定の活躍をして、そこで身につけたリーダーシップや協調性を将来教育者として活かすことができる人を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

教育学を中心としてそれに関連する教育を視野に入れた科目と、教員免許状や教育に関連する諸資格の取得に関連する科目を柱に、カリキュラムが編成されています。

1. 教育学領域では、教育の原理的・思想的分野、教育史的分野、教育課程・方法的分野、教育行財政的分野、社会科教育学や教育保健学の分野、それに加えて社会学的分野、心理学的分野、体育・スポーツ教育学的分野があり、これを系統的・専門的に学ぶことができます。

2. 前記の(1)と合わせて、中学・高校教諭（社会科・保健体育科）や養護教諭と、社会教育主事、図書館司書、司書教諭の資格のうち、1つまたは複数の資格を取得することができます。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

所定の単位を修め、4年間の学習やその結果としての「卒業論文」を作成し、次の能力を身につけた学生に卒業を認定して学位を授与しています。

1. 人間形成と教育に関する基本的な知識、さらに自ら選んだ専門領域に関する研究上の視点や方法についての基礎的な知識・技能を身につけた人。
2. 人間形成と教育に関して学んだ知識を活用して、状況を的確に判断し、問題を適切に解決するための行動を、他者と協調して取る力を身につけた人。
3. 社会の一員としての自覚を持ち、教育に携わる人間に求められる責任感と倫理観を身につけた人。

2 二十十年の専任教員

金子真人教授（教育心理学）
 栗栖 淳教授（道徳・市民教育・教育思想）
 後藤貴浩教授（スポーツ社会学・地域社会学）
 桜井美加教授（臨床心理学）
 助川晃洋教授（教育方法学）
 西野泰広教授（発達心理学）
 細越淳二教授（体育科教育学・スポーツ教育学）
 村上純一教授（教育社会学）

江川陽介准教授（スポーツ医学）

鈴木裕子准教授（養護教諭教育学・教育保健学）

堀井雅道准教授（教育法学・教育経営学）

武藤拓也准教授（社会科教育学・日本教育史）

郡司菜津美講師（教育心理学・生徒指導・教師教育）

羽山裕子講師（教育方法学・特別支援教育）

（異動）

平成十八年度 和井田清司教授着任

平成十九年度 栗栖淳教授昇格・鈴木康明教授・和井田清司教授退職

平成二十年度 臼井嘉一教授・武藤拓也准教授・鈴木裕子講師着任

平成二十一年度 橋本太郎教授定年退職

平成二十二年 江川陽介講師着任

平成二十三年 片山紀子准教授着任

平成二十四年度 桜井美加准教授着任

鈴木裕子准教授昇格

佐藤義雄教授退職

堀井雅道講師着任

細越淳二教授昇格

江川陽介准教授昇格

磯辺武雄教授定年退職・折原茂樹教授退職

（逝去）・臼井嘉一教授退職（逝去）・片山

紀子准教授退職

平成二六年度 羽山裕子講師着任

枝村亮一教授退職

平成二七年度 金子真人教授・後藤貴浩教授・

助川晃洋教授・佐野泉講師着任

桜井美加教授・堀井雅道准教授昇格

佐野 泉講師退職

平成二八年度 郡司菜津美講師着任

堀井雅道准教授昇格

3 専攻行事

○新入生ミーティング（毎年四月）

新入生と専任教員との顔合わせを目的として、春期ガイダンス期間中に、新入生ミーティングを行っている。

○ゼミ旅行（毎年九月～十月）

三年生を対象に、各ゼミでゼミ旅行を計画し、研修旅行を行っている。

○スポーツ大会（毎年十月）

学生同士の親睦及び行事企画・運営能力の育成を意図して、メイプル・センチュリー・ホール等の施設を使用してスポーツ大会を行っている。

○教育学会総会（毎年十二月）

学生及び教員の研究交流や学生のキャリア形成等を目的として、教育学会総会を開催している。

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種（社会、保健体育）

高等学校教諭免許一種（地理歴史、公民、保健体育）

養護教諭免許一種

社会教育主事

図書館司書資格

学校図書館司書教諭資格

5 発行紀要目次

『教育学論叢』（国士舘大学教育学会）

平成十八年十二月 第二十四号

磯辺武雄 松江藩儒桃節山『公私要記2』について(4)

― 解題・本文史料 ―

西野泰広・松田浩平・寺門正顕・小森愛子・雨森雅哉

PDS機能から見た良いスポーツチームの心理的特性Ⅱ

渋谷キミエ・西野泰広

PDS機能から見た戸外遊びの母子・仲間相互交渉のマイクロ分析

B.ヒシグデルゲル

変動期におけるモンゴルの教育の現状と課題

―初等・中等教育を中心として―

平成二十年二月 第二十五号

磯辺武雄 松江藩儒桃節山『公私要記3』について(1)

―解題・本文史料―

山崎真之 「剣道科」及び「柔道科」における中等教員

無試験検定取扱いの認定過程について

―国士館専門学校を事例として―

西野泰広・松田浩平・寺門正顕・小森愛子・雨森雅哉

PDS機能から見た良いスポーツチームの心理的特性Ⅱ

細越淳二

体育授業中の学習者行動についての研究

―特に、授業中に生起する「もめごと」に着目して―

目して―

平成二十一年二月 第二十六号

磯辺武雄 松江藩儒桃節山『公私要記3』について(2)

―解題・本文史料―

山崎真之 無試験検定許可学校における教育実習に関する

る基礎的研究

渋谷キミエ PDS機能から見た戸外遊びの母子・仲間の

相互交渉のマイクロ分析Ⅱ

―四歳児を中心にして―

西野泰広・松田浩平・寺門正顕・市川優一郎・雨森雅哉・

小森愛子

構成的グループエンカウンターによる「教育

相談」の授業効果の検討

西野泰広・松田浩平・寺門正顕・小森愛子・雨森雅哉

PDS機能から見た良いスポーツチームの心理的特性Ⅲ

折原茂樹・白井清太郎・大野高志

予想時間に関する基礎的研究

―歩行課題を用いて―

平成二十二年二月 第二十七号

磯辺武雄 橋本太郎教授の定年ご退職にあたって

橋本太郎教授業績一覧

明治初期府県の教員養成と「中学」

橋本太郎 埼玉県の事例を中心として―

磯辺武雄 松江藩儒桃節山『公私要記3』について(3)

―解題・本文史料―

西野泰広・雨森雅哉・深澤太陽・北川大輔

ユングの8タイプの幼児画に対する学生のイメージ

渋谷キミエ
PDS機能から見た戸外遊びの相互交渉過程のマイクロ分析Ⅲ

折原茂樹
―五・六歳児を中心に―
時間的展望・健康意識変容への自記式「時間的展望熟慮質問表」の効果

村上純一
英国・西ヨークシャー・ハダースフィールド滞在記

平成二十三年二月 第二十八号

磯辺武雄
松江藩儒桃節山『公私要記3』について(4)

―解題・本文史料―

臼井嘉一
戦後日本におけるシテイズンシップ教育と社会科教育

(書評)

栗栖 淳
臼井嘉一 著

『開放制目的教員養成論の探求』

細越淳二
臼井嘉一 著

『教育実践学と教育方法論 カリキュラム・教科指導・学力を教育実践から問い直す』

平成二十四年二月 第二十九号

磯辺武雄
松江藩儒桃節山『公私要記4』について(1)

―解題・本文史料―

西野泰広・雨森雅哉
幼児画は何を物語っているか？

大塚亮介・細越淳二

運動技能水準下位児の学習行動についての検討
―学習行動と意識および技能成果の分析を通して―

細越淳二・前橋 力・鯉永慎太郎・佐野祐太・岡田晋平

小学校低・中学年の「多様な動きをつくる運動(遊び)」の授業モデル

細越淳二・石田智久・高橋 剛

小学校六年生における「ボール運動(ネット型)」の授業づくり

(翻訳論文)

臼井嘉一・周長蘭

顧明遠「師範教育論」の思想と構造

(研究ノート)

栗栖 淳

日本における株式会社立大学にかんする一考察
―新たな学習形態の導入などを手がかりとして―

(書評)

鈴木裕子

片山紀子 著

『入門 生徒指導「生徒指導堤要」をふまえた新しい生徒指導のあり方』

平成二十五年二月 第三十号

磯辺武雄

松江藩儒桃節山『公私要記4』について(2)

― 解題・本文史料 ―

角張友哉・細越淳二

子どもの動きづくりに関する実践研究

― T小学校の二年間の取り組みの結果から ―

阿部泰尚・中島大輔・細越淳二

小学校におけるゴール型ゲームのゲームパフ

オーマンズの分析

― 小学校三年生から六年生を対象に ―

折原茂樹

時間管理能力の個人差に関する研究

― 時間と慣用的時間について ―

平成二十六年二月 第三十一号

折原茂樹

磯辺武雄先生の定年退職にあたって

折原茂樹

磯辺武雄先生業績一覽

磯辺武雄

松江藩儒桃節山『公私要記4』について(3)

― 解題・本文史料 ―

西野泰広・雨森雅哉

幼児用PDSテストの開発

桜井美加

Development the Program of Anger Response in Smart and Positive ways-Youth in School Settings.

江川陽介

柔道選手の短期間における主観的コンディショニング評価の有用性の検討

折原茂樹

時間評価とmental imageについて

平成二十七年二月 第三十二号

西野泰広

折原茂樹先生のご逝去を悼む

武藤拓也

白井嘉一先生のご逝去を悼む

細越淳二

枝村亮一先生のご退職にあたって

西野泰広・雨森雅哉

複線型発達モデルからみた身体・運動発達の

諸相

江川陽介

「神経・筋統合不全」症例への対処事例の観察

察

桜井美加

子育て支援におけるアウトリーチの効用と課題

題

鈴木裕子

養護教諭の職務を表す用語の検討(第一報)

(書評)

村上純一

白井嘉一 著

『シテイズンシップ教育の展望 ラッグの思想とコア・カリキュラム』

平成二十八年二月 第三十三号

江川陽介・石塚慎也

震動波エネルギーを転写した水（波動水）は
身体の生理機能に影響を与えるか？

桜井美加

大学生メンターによる中学生との人間関係構築に関する研究

助川晃洋

教育学的概念としての“Erfahrung”の独自性

助川晃洋

―“Erfahrung”との相違に着目して―
精神科学的教育学派における「教育的関係」論の発展的継承

―「第一世代／師」ノールから「第二世代／弟」フリットナーとボルノウへのみちすじで―

助川晃洋

「小中一貫教育ならではの」の学習指導実践による「確かな学力」の育成（その1）

―兵庫県神戸市立港島小・中学校（港島学園）の取り組みに関する事例的考察―

助川晃洋

教員免許状更新講習必修領域「教育の最新事情」の授業実践

鈴木裕子

―第一領域「教職についての省察」の教材と受講者による授業評価の結果の公開―
養護教諭養成における臨床実習からの学生の学び

（研究ノート）

助川晃洋

教師のためのリサーチ・リテラシー演習
―子どもの「主観的な幸福」にかかわるユニセフの国際調査データの解説をめぐって―

助川晃洋

六・三・三制の理念とその成立経緯
―為政者の戦後教育史認識を乗り越えるために―

（書評）

羽山裕子

白井嘉一・金井香里編
『学生と教師のための現代教育過程論とカリキュラム研究』

成文堂、二〇一二年

二 倫理学専攻

1 倫理学専攻の教育理念

教育研究上の目的

倫理学専攻は、大学における哲学・思想の教育に対して一般社会が求めていることに対応して、専門の研究者を育成することよりも、むしろ哲学・思想的教養を基盤とする問題発見能力と、その自覚的解決能力を育成することを目的として教育・研究活動を行っています。現実世界に対する問題意識を深め、知的追求による問題解決と、自覚的な自己実現を果たしうる人格を養成することを目的として、それを東洋と西洋の哲学・思想全般を広範に研究教授することによって実現することを期しています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

倫理あるいは国語の成績が優秀で、特に語学に関する資格を取得しており、また、人格が円満で良識を持ち、他者との協調性のある学生を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

1. 主要学科目（必修科目）…西洋哲学史（1年次）、仏教学概論（2年次）、現代哲学特殊研究（4年次）東西思想と現代哲学等の基本的事項を学びます。下記2のように、本専攻のほとんどの専門科目は選択必修科目であり、東西一〇系統の諸思想を系統的に学ぶようにカリキュラムを編成しています。

2. 関連学科目（選択科目）…上記必修科目と思想研究法（選択科目）以外はすべて、各分類ごと（概論、思想史、研究、特殊研究、原典講読、演習）の中で選択必修科目であり、各系統の諸思想を不足なく学ぶように構成しています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

哲学・思想的教養はあらゆる教養の基盤であり、実社会に生きる成熟した人間として有するべき判断力をこの基盤の上に育成します。本専攻における教育の成果は、古典的なテキストについて、そのテキストから自力で思想の核心をとり出す卒業論文を中心に評価しています。

2 二十十年の専任教員

眞柴弘宗教授（密教思想）

原田 覺教授（チベット仏教史）

塩谷正憲教授（社会学）

木阪貴行教授（ドイツ哲学）

野津 悌教授（ギリシア哲学）

吉原裕一専任講師（日本倫理思想史）

（異動）

平成二四年度 眞柴弘宗教教授退職

平成二五年度 吉原裕一専任講師着任

3 専攻行事

○二年生主催による新入生歓迎行事（四月開催）

平成一八年度～二四年度 立川市の昭和記念公園にてバーベキューとスポーツレクリエーションを実施（日帰り）。

平成二五年度～二八年度 お台場の「PumBスポーツ文化館」にて立食パーティとスポーツレクリエーションを実施（一泊二日）。

○四年生対象卒業論文指導会（四月・一〇月開催）

○三年生対象卒業論文指導会（六月開催）

○三年生対象卒業論文研修旅行（五月開催）

平成十八年度 富士五湖方面（一泊二日）

平成十九年度 草津方面（一泊二日）

平成二〇年度 日光方面（一泊二日）

平成二一年度 伊豆方面（一泊二日）

平成二二年度 草津方面（一泊二日）

平成二三年度 箱根方面（一泊二日）

平成二四年度 伊豆方面（一泊二日）

平成二五年度 箱根方面（一泊二日）

平成二六年度 山梨方面（一泊二日）

平成二七年度 伊豆方面（一泊二日）

○卒業論文研修旅行（四年生対象、五月開催）

平成十八年度 横浜方面（日帰り）

平成十九年度 上野・浅草方面（日帰り）

平成二〇年度 横浜方面（日帰り）

平成二一年度 上野・浅草方面（日帰り）

平成二二年度 お台場方面（日帰り）

平成二三年度 上野・浅草方面（日帰り）

平成二四年度 横浜方面（日帰り）

平成二五年度 浅草方面（日帰り）

平成二六年度 鎌倉方面（日帰り）

平成二七年度 鎌倉方面（日帰り）

○倫理学専攻講演

平成十八年度

朴倍暎（東京大学助手）「儒教思想における普遍と特殊」

伊藤仁斎と李退溪との比較を中心に――

平成二〇年度

村石恵照（武蔵野大学教授）「やまと言葉の哲学」

平成二一年度

島蘭 進（東京大学大学院教授）

「近代日本人の死生観―その歴史的展望―」

平成二二年度

森 一郎（東京女子大学教授） 「Q体への愛 もしくは世

界への愛のために―ニーチェの建築論を中心に―

平成二三年度

津田眞一（国際仏教学大学院大学教授） 「「人間的自由」

の本質とその現実、シェリングにおける、そして仏教学に

おける…」

平成二四年度

納富信留（慶應義塾大学教授） 「「理想」とは何か―プラ

トンと近代日本―」

平成二五年度

吉田真樹（静岡県立大学准教授） 「日本思想における霊魂

の問題」

平成二六年度

中村圭志（宗教学者） 「信じない人のための〈宗教〉講義」

平成二七年度

長沼 淳（順天堂大学准教授） 「現代医療と倫理」

○倫理学専攻シンポジウム

平成十九年度

共通テーマ「超越と死」

提題者 木阪貴行（国士舘大学教授） 「西洋近代哲学にお

ける「超越」

提題者 齋藤元紀（国士舘大学非常勤講師） 「死者として

の私たち」

提題者 吉原裕一（国士舘大学非常勤講師） 「死線を越え

てなお生きる思想」

平成二一年度

共通テーマ「徳福不一致に対する思想的応答」

提題者 野津悌（国士舘大学准教授）

「徳福不一致との戦いとしてのギリシャ哲学」

提題者 坂本頼之（国士舘大学非常勤講師）

「徳福不一致に対する中国思想の応答」

提題者 藤井隆道（国士舘大学非常勤講師）

「徳福不一致の問題とインド思想―苦に与えられた説明

―」

平成二二年度

共通テーマ「利害と信頼」

提題者 御子柴善之（早稲田大学教授） 「利害関心と信頼」

提題者 勝西良典（国士舘大学非常勤講師）

「利害の誕生と正しさ―信頼という基盤―」

提題者 大谷弘（国士舘大学非常勤講師） 「倫理学を学ぶ

ことの意味」

平成二三年度

共通テーマ「ヨーロッパの理性の境界へ」

提題者 中川雅博（国士館大学非常勤講師）

「辺境からの応答―ロシアの戦争論を手がかりに―」

提題者 加藤瑞絵（国士館大学非常勤講師）

「イスラームの宗教思想における理性の役割」

提題者 村上龍（国士館大学非常勤講師）

「ヨーロッパの理性はいかにして越境するか―世紀転換期の「心霊現象研究」の事例にそくして―」

平成二四年度

共通テーマ「価値の「真正性」をめぐる諸問題」

提題者 福岡 聡（国士館大学非常勤講師）

「「真正な」善・悪はどこにあるのか？」

―道徳を教育するという視点から―」

提題者 太田峰夫（国士館大学非常勤講師）

「「真正性」の構造―「古楽運動」において

「過去への忠実さ」が果たす役割について―」

提題者 杉本隆久（国士館大学非常勤講師）

「創造的表現と真正性の条件としての身体の本性―現象学の〈本物〉と〈本物〉の現象学―」

平成二五年度

共通テーマ「偶然性と必然性」

提題者 西山晃生（国士館大学非常勤講師） 「二系列の邂逅としての偶然」

提題者 阿部善彦（国士館大学非常勤講師）

「西欧キリスト教思想における「偶然」と「必然」―「告白」的文学における「回心」、「出会い」の物語り性の視点から―」

提題者 桑原俊介（国士館大学非常勤講師） 「芸術における必然と偶然」

平成二六年度

共通テーマ「殺生」

提題者 加藤隆宏（国士館大学非常勤講師） 「古代インドにおける殺生」

提題者 山本剛史（国士館大学非常勤講師）

「生命倫理の視点から考える殺生」

提題者 木澤 景（国士館大学非常勤講師）

「武士と狩り―殺生の罪の背後にあるもの」

平成二七年度

共通テーマ「人間の尊厳について」

提題者 相原 博（国士館大学非常勤講師）

「人間の尊厳とは何か―看護倫理の領域から考える―」

提題者 木阪貴行（国士館大学教授） 「尊厳と虚偽」

提題者 中畑邦夫（国士館大学非常勤講師）

「どうか、私の言葉が、書き留められるように」

―太宰 治『人間失格』について―」

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種（社会）
 高等学校教諭免許一種（地理歴史、公民）
 社会教育主事
 博物館学芸員
 図書館司書資格
 学校図書館司書教諭資格

5 発行紀要目次

『国士館哲学』（国士館大学哲学学会）

平成十八年度 第一一号

（倫理学専攻講演会講演要旨）

朴倍暎 儒教思想における普遍と特殊

―伊藤仁斎と李退溪との比較を中心に―

（論文）

齋藤元紀

ハイデガーとニーチェ―『存在と時間』における《思考の経験》をめぐる―

（研究ノート）

原田 覺

シャークヤチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（Ⅱ）

（翻訳）

野津 悌

ヒュペレイデース断片『追悼演説』（訳）

（教材研究）

木阪貴行

『倫理学』編集作業へ向けて（1）

（卒業論文要旨）

（平成一八年度）岡田聖 植松崇

（総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目（平成一八年度））

（度）

（執筆者紹介）

平成十九年度 第二二号

（倫理学専攻シンポジウム提題要旨）

共通テーマ 超越と死

木阪貴行 西洋近代哲学における「超越」

齋藤元紀 死者としての私たち

吉原裕一 死線を越えてなお生きる思想

（論文）

大谷 弘

メタ倫理におけるパトナムの立場

吉原裕一

倫理思想としての「時間」をめぐる考察

（研究ノート）

原田 覺

シャークヤチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（Ⅲ）

（研究書翻訳）

野津 悌

F・ブラス著『アッティカの雄弁』（部分）

（訳）

（卒業論文要旨（平成一九年度） 山上隆志）

（総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目（平成一九年度））

（執筆者紹介）

平成二〇年度 第一三号

（倫理学専攻講演会講演要旨）

村石恵照 やまと言葉の哲学

（論文）

大谷 弘 『論理哲学論考』と規則の問題

（研究ノート）

野津 悌 「みかけ上のエンテュメーマのトポス」考

原田 覺 シャーキヤチョクデン著『了義を一つに成就

すべき論書の詳細な注釈』考（Ⅳ）

坂本頼之 青陵自画賛訳注稿

（講義用教科書）

木阪貴行 カント倫理学を介する哲学入門（5）

（卒業論文要旨（平成二〇年度） 富澤みどり 中村勇輝）

（総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目（平成二〇年度））

（執筆者紹介）

平成二一年度 第一四号

（倫理学専攻講演会講演要旨）

島 蘭 進 近代日本人の死生観―その歴史的展望―

（倫理学専攻シンポジウム提題要旨）

共通テーマ 徳福不一致に対する思想的応答

野津 悌 徳福不一致との戦いとしてのギリシャ哲学

坂本頼之 徳福不一致に対する中国思想の応答

藤井隆道 徳福不一致の問題とインド思想―苦に与えら

れた説明―

（論文）

Takayuki Kisaka Etwas Äusseres und Aufmerksamkeit

吉原裕一 自己実現の「物語」をめぐる―心中という

倫理思想―

（研究ノート）

原田 覺 シャーキヤチョクデン著『了義を一つに成就

すべき論書の詳細な注釈』考（Ⅴ）

（総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目（平成二一年

度））

（執筆者紹介）

平成二二年度 第一五号

（倫理学専攻講演会講演要旨）

森 一郎 Q 体への愛 もしくは世界への愛のために

―ニーチェの建築論を中心に―

(倫理学専攻シンポジウム提題要旨)

共通テーマ 利害と信頼

御子柴善之 利害関心と信頼

勝西良典 利害の誕生と正しさ——信頼という基盤——

大谷 弘 倫理学を学ぶことの意味

(研究ノート)

加藤瑞絵 「神の威厳」のイメージ——クルアーンと神名注釈より——

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅵ)

原田 覺 シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅵ)

卒業論文要旨(平成二二年度) 小川桃子 糟屋悦子

(総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目(平成二二年度))

(執筆者紹介)

平成二二年度 第一六号

(倫理学専攻シンポジウム提題要旨)

共通テーマ ヨーロッパの理性の境界へ

中川雅博 辺境からの応答——ロシアの戦争論を手がかりに——

加藤瑞絵 イスラームの宗教思想における理性の役割

村上 龍 ヨーロッパの理性はいかにして越境するか

——世紀転換期の「心霊現象研究」の事例にそ

くして——

(論文)

Yasushi Notsu Der Toposbegriff in der aristotelischen Rhetorik

國領佳樹 「ドゥサンティにおける〈問題〉概念と多元主義

木澤 景 日本思想における「観ること」の問題の一面——『愚管抄』の摂家将軍の捉えかた——

(研究ノート)

原田 覺 シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅶ)

(論文)

Yasushi Notsu Der Toposbegriff in der aristotelischen Rhetorik

國領佳樹 「ドゥサンティにおける〈問題〉概念と多元主義

木澤 景 日本思想における「観ること」の問題の一面——『愚管抄』の摂家将軍の捉えかた——

(研究ノート)

原田 覺 シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅶ)

坂本頼之 海保青陵「娼説」訳注稿

(講義用教科書)

木阪貴行 カント倫理学を介する哲学入門(6)

(卒業論文要旨(平成二三年度) 安積玲奈 古内里美)

(総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目(平成二三年度))

(執筆者紹介)

平成二四年度 第一七号

(倫理学専攻講演会講演要旨)

納富信留 「理想」とは何か——プラトンと近代日本——

(倫理学専攻シンポジウム提題要旨)

共通テーマ 価値の「真正性」をめぐる諸問題

福岡 聡 「真正な」善・悪はどこにあるのか？

―道徳を教育するという視座から―

太田峰夫 「真正性」の構造―「古楽運動」において

「過去への忠実さ」が果たす役割について―

杉本隆久 創造的表現と真正性の条件としての身体の本

性―現象学の〈本物〉と〈本物〉の現象学―

（研究ノート）

原田 覺 シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就

すべき論書の詳細な注釈』考（Ⅷ）

（総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目（平成二四年

度）

（執筆者紹介）

平成二五年度 第一八号

（倫理学専攻講演会講演講演要旨）

吉田真樹 日本思想における靈魂の問題

（倫理学専攻シンポジウム提題要旨）

共通テーマ 偶然性と必然性

西山晁生 二系列の邂逅としての偶然

阿部善彦 西欧キリスト教思想における「偶然」と「必

然」

―「告白」的文学における「回心」、「出会

桑原俊介

い」の物語り性の視点から―
芸術における必然と偶然

（論文）

西山晁生

ベルクソンにおける自由の諸条件

―『意識に直接与えられたものについての試
論』第三章を中心に―

（研究ノート）

原田 覺

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就
すべき論書の詳細な注釈』考（Ⅸ）

（原典翻訳）

阿部善彦

フライベルクのデイトリッヒ『知性と可知
的なものについて』（第一部）

（論文翻訳）

木阪貴行

トーマス・ブッフハイム…カント『宗教論』に
おける悪の普遍性

（卒業論文要旨（平成二五年度）大谷駿）

（総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目（平成二五年

度）

（執筆者紹介）

平成二六年度 第一九号

（倫理学専攻講演会講演要旨）

中村圭志 信じない人のための〈宗教〉講義

(倫理学専攻シンポジウム提題要旨)

共通テーマ 殺生

加藤隆宏 古代インドにおける殺生

山本剛史 生命倫理の視点から考える殺生

木澤 景 武士と狩り―殺生の罪の背後にあるもの

(論文)

西山晃生 ベルクソンにおける身体と感覚

木澤 景 『俊頼髓脳』における「心」

―個別の実体的「心」のゆくえ

(研究ノート)

原田 覺 シャーキヤチョクデン著『了義を一つに成就

すべき論書の詳細な注釈』考(X)

坂本頼之 海保青陵「談五行」訳注稿(1)

(講義用教科書)

木阪貴行 カント倫理学を介する哲学入門(7)

(卒業論文要旨(平成二六年度) 河合良樹)

(総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目(平成二六年度))

度)

(執筆者紹介)

平成二七年度 第二〇号

(倫理学専攻講演会講演要旨)

長沼 淳 現代医療と倫理

(倫理学専攻シンポジウム提題要旨)

共通テーマ 人間の尊厳について

相原 博 人間の尊厳とは何か―看護倫理の領域から考

える―

木阪貴行 尊厳と虚偽

中畑邦夫 どうか、私の言葉が、書き留められるように

―太宰治『人間失格』について―

(論文)

阿部善彦 知恵の探究が愚者によって始まるのはなぜか

―クザーヌスのIdiota de sapientiaから考える―

(研究ノート)

原田 覺 シャーキヤチョクデン著『了義を一つに成就

すべき論書の詳細な注釈』考(XI)

坂本頼之 海保青陵「談五行」訳注稿(2)

(講義用教科書)

木阪貴行 カント倫理学を介する哲学入門(8)

(卒業論文要旨(平成二七年度) 木村柚稀 山田麻子 後藤彩

里

(総会報告、彙報、倫理学専攻卒業生卒業論文題目(平成二七年度))

度)

(執筆者紹介)

三 初等教育専攻

1 初等教育専攻の教育理念

教育研究上の目的

初等教育専攻は人間性や社会性など、初等教員としての資質を教科と教職の科目において段階的に身に付け、理論とその応用的かつ実践的な教育研究、教育者としての責任、人間育成の理解、教科に関する専門的知識と教養、それらを基盤とした実践的指導力を具備した人材の育成を目的としています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

小学校や幼稚園の教員養成を目的とする初等教育専攻では、

1. 教職への強い情熱を持つ
2. 小学校全科や幼稚園科目の指導ができるよう学ぶ姿勢を持つ

3. 心身ともに健全である

4. 幼児童への理解を持つ

5. 積極的に行事運営に取り組む

という五つの条件を備えた人間を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

教職科目は、教育全般に関する科目、小学校全科の各教科教育法、幼児教育関連科目、教育実習関連科目で構成されています。教科科目は小学校全科の教養に関する科目と実技・実習科目とで構成されています。教職と教科の科目は教育実践を基盤に、各科目の性質に適正となるよう計画し関連付け、授業実践や児童指導、学級運営など教育現場にて教育者として携われるような教育課程を編成しています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本専攻の教育研究上の目的を達成し、所定の単位を修め、次の能力を有していることにより卒業を認定します。

1. 初等教育における基礎研究と応用研究、理論と実践の相互性、課題解決力を、講義と演習により培った者。
2. 卒業研究にて教育実践への論理的思考力や表現力を卒業論文作成の中で習得した者。
3. 教育実践力を高めるための、授業構成力と授業実践力、組織協働としてのコミュニケーション能力等、総合的な指導力を習得した者。

2 一二十年の専任教員

小野瀬倫也教授（理科教育学）	正田 良 教授（数学教育）	鈴木江理子教授（労働社会学・国際人口移動）	菱刈 晃夫教授（教育学）	松田 俊哉教授（絵画制作・絵画造形論）	山室 和也教授（国語科教育・文法教育）	河野 寛 准教授（運動生理学・応用健康科学）	佐々木 浩准教授（体育科教育学）	志澤 彰 准教授（合唱指導）	千葉 昇 准教授（総合学習・社会科教育）	青木 聡子 講師（幼児教育学・発達心理学）	（異動）	平成十九年度	山室和也准教授着任	正田良教授昇格	志澤彰准教授昇格	平成二十年度	岩間浩教授定年退職 梅原保教授定年退職	平成二十一年度	安藤秀俊准教授着任 千葉昇准教授着任	菱刈晃夫教授昇格
----------------	---------------	-----------------------	--------------	---------------------	---------------------	------------------------	------------------	----------------	----------------------	-----------------------	------	--------	-----------	---------	----------	--------	------------------------	---------	-----------------------	----------

3 専攻行事

岡田定雄教授定年退職	渡辺源樹教授定年退職	平成二二年度	鈴木江理子准教授着任	小野瀬倫也准教授着任	小宮山潔子教授退職	小幡勝彦准教授退職	青木聡子講師着任	平成二四年度	河野寛講師着任	山室和也教授昇格	馬場欽二教授定年退職	鈴木江理子教授昇格	平成二七年度	中野紀明教授定年退職	佐々木浩准教授着任	小野瀬倫也教授昇格	河野寛准教授昇格	平成二八年度
------------	------------	--------	------------	------------	-----------	-----------	----------	--------	---------	----------	------------	-----------	--------	------------	-----------	-----------	----------	--------

○初等教育対面式・初等教育学会総会（毎年四月）
 新入生と専任教員との顔合わせを目的として、春期ガイダンス期間中に、新入生ミーティングを行っている。

○初等運動会
 隔年開催。奇数年度の九月に実施。学生主体の行事企画・運

営を学ぶための三大事事の一つ。

委員長・副委員長以下、庶務、看板、救護・渉外、施設、広報、審判、体操、放送、召集、企画の各係に分かれて四月から準備を進める。競技も学生が実施。学年別対抗と平成二十七年
度からは色別対抗も実施。

平成十九年度の第二十八回から平成二十七年の第三十二回
がこの期間に開催された。

○初等音楽会

隔年開催。偶数年度の十月に実施。学生主体の行事企画・運
営を学ぶための三大事事の一つ。併せて、優れた音楽芸術に触
れるための招待演奏会も同時開催している。

委員長、副委員長以下練習、会場、企画、庶務、看板、広
報、会計の各係に分かれて四月から準備を進める。ステージも
学生が合唱（課題曲・自由曲）と合奏の演奏を行い、学年対抗
で実施。

平成十八年度の第二十八回から平成二十六年度の第三十二回
がこの期間に開催された。

○初等文集「すくすく」

毎年発行。学生主体の行事企画運営を学ぶための三大事事の
一つ。

編集委員長、副委員長と三部構成になっているので、それぞ
れ各部に一年から三年までの編集委員が、四年生も含めた全員
の原稿を集め編集している。

平成一八年度の三十二号から平成二十七年の四十一号まで
がこの期間に発刊された。

○卒業研究研修旅行（毎年八月～翌三月）

三、四年生を対象に、各卒業研究で研修旅行を計画し、実施
している。

○初等教育学会講演会（毎年十二月）

専攻の学生の資質向上のために、教育界に限らず他方面の分
野で活躍されている方の講演を聴く機会を提供している。平成
二十六年度からは、講演会終了後に講師の方との交流会も実施
している。各年度の講師は以下の通りである。

平成十八年度

明石寿々栄（落語協会）都々逸

平成十九年度

小柴昌俊（ノーベル物理学賞受賞・東京大学特別栄誉教
授）「やればできる」

平成二十年

* 人文学会講演会と共催で実施

戸倉 務（国分寺市教育委員会）「これからの教師に求め
られるもの」

平成二十一年度

岩村繁夫（町田市公立小教諭・町田算数サークル所属）
「町田算数サークルと私」

平成二十二年

コロラド・キャッチャラー (Cosmo Co. Ltd.ネイティブ事業室ヘッドトレーナー)

石井隆史 (東京学芸大附属大泉小) 「小学校の英語活動に向けてのワークショップ」

平成二十三年度

春山幸男 (JAXA衛星利用推進センター参与)

「宇宙へのチャレンジと宇宙科学技術の利用について」

平成二十四年度

町田健一 (国際基督教大学) 「小学校教員に求められる資質とは?—今、問われる「高度専門職化」と「即戦力」育成—」

平成二十五年度

池田 修 (京都橘大学) 「学級担任の仕事を考えてみる」

平成二十六年

池田 修 (京都橘大学) 「授業作りを考えてみる」

平成二十七年

田中保樹 (横浜市教育委員会) 「教職を希望する学生に身に付けておいてほしい資質・能力—全国学力・学習状況調査 (理科) に関連して—」

4 取得できる免許・資格

小学校教諭一種免許状

幼稚園教諭一種免許状

中学校教諭二種免許状 (社会、国語)

学校図書館司書教諭資格

社会教育主事

5 発行紀要目次

『初等教育論集』 (国士舘大学初等教育学会)

平成十九年三月 第八号

菱刈晃夫 からだで感じるモラリティに向けて—脳科学から見た道徳—

正田 良 算数に関する模擬授業評価表の作製

岩間 浩 (訳代表・調整) エドゥアルト・シュプラン

ガー著『教育における意図せざる服地作用の法則』 (3) (翻訳)

平成十八年度卒業論文

田口康大 ベーメにおける神秘的人間形成への限界と

可能性—超感性的生についての「対話」を中心に—

原万里子 文章代からの立式と割合としての量

平成二十年三月 第九号

正田 良

研究授業参観の授業実践志向性への影響―算数の公開授業研究会参加などをダミー変数とした重回帰分析―

菱刈晃夫

センス・オブ・ワンダーを育む道德教育に向けて―道德性の生物学的基礎づけから―

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン邦訳ノート(3)

岩間 浩

(訳代表・調整) エドゥアルト・シュプランガー著『教育における意図せざる服地作用の法則』(4)

平成十九年度卒業論文

松本輝明

優しさとしての教育とは―灰谷健次郎を手がかりに―

芝山祐輔

ことばの発達障害への国語科指導―ことばの発達の遅れのある子どもへの大人・教師による援助―

國場彩代

「伝え合う力」を高める国語指導―「話すこと・聞くこと」の指導を通して―

平成二十一年三月 第十号

(論文)

岩間 浩

学力問題と基礎・基本―初等教育の原点を求めて―

小宮山潔子

幼小の連携と合科的・関連的指導

正田 良

研究授業参観と授業実践志向性との関連の検討―算数の公開授業研究会での注目点による差異―

菱刈晃夫

メランヒトンにおける道德の基礎としての自然法―エキユメニカルな道德教育を求めて―

(翻訳)

岩間 浩

エドゥアルト・シュプランガー著『教育における意図せざる服地作用の法則』(5)

菱刈晃夫

メランヒトン『倫理学概要』翻訳と解説補遺―メランヒトン邦訳ノート(4)―

平成二十年度卒業論文

橋本絵美

5・2進法に注目した繰り上がりのある足し算の指導法

川橋歩美

学校給食における子どもの食意識の現状と課題

平成二十二年三月 第十一号

(論文)

小宮山潔子

学校教員の継続的質保証システム

正田 良

授業実践志向性を向上させる実践への接点の探求的検討―いくつかの説明変数による差異を手掛かりとして―

菱刈晃夫

メランヒトン以前・以後のリベラル・アーツ

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン『倫理学概要』翻訳と解説補遺

―メランヒトン邦訳ノート(5)―

平成二十一年度卒業論文

児玉悠里

小学校教育において「伝え合う力」を育成

する―活動事例と教師として取り組みたい

指導・実践―

佐々木成海

字源的な漢字学習と児童の思考力・想像力

―子どもたちを惹きつける漢字学習―

梅原未里

手遊び歌の使用法における一考察―幼児の

発達段階をふまえて―

平成二十三年三月 第十二号

(論文)

正田 良

模擬授業を中心とした教法算数が授業実践志

向性へもたらす効果―一年半に及ぶ縦断的調

査を手がかりとして―

菱刈晃夫

格差社会とルター

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン『倫理学概要』(Episteme

ethics,1532) 翻訳―メランヒトン邦訳ノート

(6)―

平成二十二年度卒業論文

西田美樹

学校教育におけることば遊び―ことば遊び

の実践と考察―

鈴木麻耶

世代間交流とは何か

元山拓也

工作の單元化についての研究

平成二十四年三月 第十三号

(論文)

正田 良

「数学的活動」のイメージの変容―連想法に

基づく「文系数学」の機能の調査

(研究ノート)

菱刈晃夫

「からだで感じるモラリティ」は教育できる

のか?―情念の教育思想史から見た習慣づけ

の問題―

(翻訳)

菱刈晃夫

アリストテレスのニコマコス倫理学・第一卷

について(一五四六年) フィリップ・メラン

ヒトンによる釈義 (In Primum Librum

Ethicorum Aristotelis Enarrationes Philippi

Melanthonis)―メランヒトン邦訳ノート(7)―

平成二十三年度卒業論文

小野亮二

カエル跳びゲームの授業試行―棋譜的表現

に注目して―

石山和之 フィンランドにおける教育の歴史と現状

平成二十五年三月 第十四号

(論文)

正田 良

算数の授業創り観に関する質問紙の作成

菱刈晃夫

特別活動と正統的周辺参加―「状況に埋め込まれた学習」としての特別活動の現代的意義―

(研究ノート)

山室和也

「国語の特質」をどう扱うか

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン 『神学要覧』(一五五九年)―
その1―

平成二十四年度卒業論文

畠山優佳里 伝統的な言語文化の授業づくり

平成二十六年三月 第十五号

(論文)

小野瀬倫也・村澤千晴 理科授業における効果的なICT

利活用の視点と実践

正田 良

算数の授業創り観に関する質問紙の改訂

菱刈晃夫

道徳の教科化について

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン 『神学要覧』(一五五九年)―

その2―

平成二十五年度卒業論文

関口友基

ブータンに「幸せ」を学ぶ異文化理解

高橋知華

小4分数の系統的な練習構成

平成二十七年三月 第十六号

(論文)

正田 良

算数の授業創り観に関する縦断的調査の試み(1)

菱刈晃夫

道徳教育と特別活動の協働―「徳目」を超える道徳とSEL―

小野瀬倫也

理科授業における教授学習の過程の可視化

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン 『神学要覧』(一五五九年)―
その3―

平成二十六年卒業論文

二ノ宮夏奈 働きの合成を援用した分数乗法

平成二十八年三月 第十七号

(論文)

菱刈晃夫

道徳授業方法の工夫と特別活動との連携

正田 良

算数の授業創り観に関する縦断的調査の試み(2)

松田俊哉・井上京太 小学校教員養成における図画工作の

教材研究(1)

加藤徹・三宅由利子・稲村敬子 初等教育におけるピアノ

奏法を通じた「器楽」授業について

志澤 彰

「音程」理解のための一考察―歌唱教材の演奏につなげる為に―

千葉 昇

板書什則―板書の基本と可能性―

(翻訳)

菱刈晃夫

メランヒトン『学習の規則について』(一五

三一年) (De ordine discendi.1531) 翻訳

平成二十七年卒業論文

齋藤彩乃

中学校英語へつなげるために小学校外国語活動でできること―円滑な接続のための取り組み―

田村美春

葛西用水今昔考

(特別エッセイ)

中野紀明

教育愚考

第二項 史学地理学科

教育研究上の目的

史学地理学科は、考古・日本史学専攻、東洋史学専攻、地理・環境専攻の三専攻によって構成されています。本学科では、本大学の建学の理念や文学部における研究・教育理念を共通の目的として、実証的な教育・研究を各専攻共通の柱とし、考古・日本史学専攻、東洋史学専攻では、これまで培われてきた研究・教育上の伝統に加え、考古学・文献史学の並立による新しい歴史学の試みも進めています。地理・環境専攻においても、現実社会の状況を判断、対処できる人材育成を念頭に置き「環境」という新しい課題に挑戦しています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

国士舘大学・文学部・史学地理学科各専攻の教育目標を理解し、各専攻の求めるアドミッションポリシーに適う、積極的な学生を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

史学地理学科では、歴史学と地理学研究の基礎科目から応用科目まで有機的連関性を持ったカリキュラムを編成し、さらに考古学・文献史学による歴史的空間の復元、自然環境と人間環境を地理的空間として理解させるそれぞれの工夫を行っています。教職は、中学・高校、資格は、博物館学芸員、考古調査士、測量士補、GIS学術士などが取得できます。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

大学所定の単位を修め、各専攻のディプロマポリシーを達成した学生に、卒業を認定し学位を授与しています。なお、卒業論文を学位授与の重要な要件に位置づけています。

一 考古・日本史学専攻

1 考古・日本史学専攻の教育理念

教育研究上の目的

本専攻の目的は、日本の歴史研究をとらえて日本文化の特色を把握し、国際社会との協調と発展に貢献しうる有為な人材を育成することにあります。この目的を実現するための教育方針として、以下の五点を立てています。①問題意識の涵養、②世界的視点の涵養、③文献史料・考古資料を調査・収集し、分析する能力の涵養、④研究史を把握し、批判する能力の涵養、⑤社会に通じる総合的な実務能力の涵養。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミSSION・ポリシー）

1. 日本史が好きで、日本史の成績が優秀である者。
2. 高校内外で郷土研究会などの日本史関係のクラブで活動したり、考古学の発掘に携わった者。
3. 生徒会活動・ボランティア活動・スポーツなどで一定の活躍をした者。
4. 日本の古典・文化に対し強い興味がある者。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

実践的な実習（考古学・史料学実習）を行い、具体的な歴史を実感しながら深く理解します。一年次には、概説的な知識や歴史学の基礎的な方法論を学び研究の土台を固め、幅広い世界的な視野を獲得して問題意識を高めます。二年次には、幅広く史・資料に触れる事によって、それらを分析し調査する基本的な能力を身につけます。三年次には、より専門的な研究に触れ、自ら史・資料を調査収集することによって、研究史を把握してそれらを批判する能力を身につけます。四年次には、総合的な視野に立つて卒業論文を執筆し、総合的な実務能力を養い、社会に通じる人材を育成します。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本専攻の教育研究上の目的である上記の五点を達成し、所定の単位を修得した人に対して卒業を認定します。なお、卒業論文を学士授与の重要な案件に位置づけています。

2 二十十年の専任教員

眞保昌弘准教授（考古学）

仁藤智子准教授（古代史）

秋山哲雄教授（中世史）

保坂 智教授（近世史）

勝田政治教授（近現代史）

佐々博雄教授（近現代史）

（異動）

平成一八年度 桑山浩然教授退職（逝去）

平成一九年度 秋山哲雄専任講師着任

平成二二年度 秋山哲雄准教授昇格

平成二五年度 阿部 昭教授退職

平成二六年度 仁藤智子准教授着任

平成二六年度 戸田有二教授退職（逝去）

平成二六年度 玉木教授退職（逝去）

平成二七年度 須田 勉教授退職

平成二八年度 眞保昌弘准教授着任

3 専攻行事

○フレッシュマンキャンプ（毎年四月開催）

新人生を対象に、履修指導などをおこなう

○卒業論文研修旅行（毎年五月～六月）

平成一八年度 （文献班） 福島・仙台方面、

（考古班） 京都・奈良方面

平成一九年度 （文献班） 山梨・西伊豆方面、

（考古班） 奈良・京都方面

平成二〇年度 大宰府・熊本・佐賀方面

（大宰府キャンパスを活用）

平成二二年度 大宰府・長崎・佐賀方面

（大宰府キャンパスを活用）

平成二二年度 大宰府・大分方面

（大宰府キャンパスを活用）

平成二三年度 大宰府・下関方面

（大宰府キャンパスを活用）

平成二四年度 大宰府・佐賀・長崎方面

（大宰府キャンパスを活用）

平成二五年度 福岡・佐賀・熊本方面

（大宰府キャンパスを活用）

平成二六年度 （文献班） 松本・長野方面

（考古班） 京都・奈良方面

平成二七年度 （文献班） 愛知・静岡方面

（考古班） 京都・奈良方面

平成二八年度 水戸・会津方面

○日本史講演会

平成一八年度

山極晃（元二松学舎大学教授）

「太平洋戦争と捕虜問題」

平成一九年度

阿部義平（国立歴史民俗博物館教授）

「東北の城柵研究と展望」

平成二〇年度

細川重男（東洋大学等非常勤講師）

「南北朝期守護軍勢催促状を読む」

平成二一年度

齊藤 純（近世史研究者）「黒船を見た人々」

平成二二年度

佐藤能丸（早稲田大学講師）「吉田東伍の歴史学」

平成二三年度

嵯峨 隆（静岡県立大学教授）

「日本と中国のアジア主義」

平成二四年度

江添誠（慶応大学助教）

「ローマ考古学の魅力」

平成二五年度

清水克行（明治大学准教授）

「分国法と中世社会」

平成二六年度

丸山康文（近世史研究者）

「長野県松本地方における史料採集と活用」

平成二七年度

岩壁義光（元宮内庁書陵部編修課長）

「近代日本の実録編纂」

平成二八年度

荒木敏夫（専修大学教授）

「斉明女帝論」

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種（社会）

高等学校教諭免許一種（地理歴史）

高等学校教諭免許（公民）

※中学校1種社会・高等学校1種両免許を取得予定のものに限り他学科履修で取得可能

社会教育主事

博物館学芸員

考古調査士

図書館司書

学校図書館司書教諭

学校図書館司書教諭

5 発行紀要目次

『国史館史学』（国史館大学日本史学会）

平成一九年度 第二号

佐々博雄 故桑山浩然教授を偲んで

（論文）

秋山哲雄
相川浩昭

移動する武士たち―田舎・京都・鎌倉―
草案と正文の間

―万里小路家における幕府御教書獲得の事例から―

長南伸治

文久期における「処士横議」と草莽

―薩摩藩誠忠組織派と清河八郎の關係を通じて―

堀内暢行

日本IPRの形成と外務省

―資金と構成員を中心に―

(研究ノート)

齊藤直美

古代の冥界観について―おもに『日本霊異記』をもとに―

林進一郎

近世後期信濃国の蔵書にみる「惣五郎物語」の読者たち

―長野県飯田市浜島家文書「本出入寄帳」から―

(書評)

大庭裕介

牧原憲夫『民権と憲法』

(修士論文要旨)

市尾光正

幕藩制国家成立期における国替の研究

―幕藩権力構造解明の視点から―

太田典子

近世前期における走り人と人返し
―東北諸藩に見られる人返し―

徳永 暁

地租改正事業における地主総代層の動向

高村昭秀

町村制前後における村会の動向

―村会議員の役割を中心に―

(考古・日本史学専攻研究室便り(平成一七～十九年度))

(卒業論文題目一覧(平成一七～十九年度))

平成二〇年度 第一三号

(論文)

戸田有二

百済瓦当蓮華文の国際性

―瓦当蓮華文の系譜をめぐって―

篠塚広海

東條内閣更迭工作をめぐる一考察

―重臣のブレーンを中心に―

市尾光正

幕藩制国家成立期における国替の研究

―寛永九年細川家の事例から―

大庭裕介

江藤新平の政治行動

(研究ノート)

漆畑真紀子

北海道移住と徳島

―移民の要因―

山口裕介

天草・島原日記

―最後の一揆としての天草・島原一揆―

(考古・日本史学専攻講演会) 参加記

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇〇八年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇〇八年度)

平成二二年度 第一四号

(論文)

阿部 昭

近世奥州道中における往還橋梁整備の進展

―下野国の大中河川の渡河方法を中心に―

澤柳 葉澄

幕末期の「切支丹」イメージについて

―大塩の乱関連史料における京坂切支丹一件

情報を中心に―

齊藤 伸郎

「明治十四年の政変」時退官者の基礎的研究

鈴木 紀子

衛生隊編成に向けた陸軍看護制度の第二次改
革

小野 隆満

「龍馬像」の創出、展開から見る「皇后瑞
夢」への新考察

斎藤 雄也

「日本史講演会に参加して」

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇〇九年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇〇八年度)

(執筆者紹介)

平成二二年度 第一五号

(論文)

勝田 政治

征韓論政変と大久保利通

鈴木 紀子

陸軍衛生要員の育成と一年志願兵制度の創設

(研究ノート)

堀内 暢行 一九二〇年代における「国民外交論」

―言説にみる論理と知識人の役割―

藤岡 志保 『藤岡屋日記』における記述変化の考察

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇一〇年度)

(卒業論文題目一覧) 二〇一〇年度

(執筆者紹介)

平成二三年度 第一六号

(論文)

阿部 昭

「報徳思想」の成立と「若林自脩作文集」に
ついて

※「若林自脩作文集の翻刻と補注」

(研究ノート)

木元 勇希

北海道議会開設運動に至る一考察

―函館海産商と日本昆布会社を中心として―

(日本史講演会参加記) 大庭 裕介

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇一一年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇一一年度)

(執筆者紹介)

平成二四年度 第一七号

(論文)

阿部 昭

不退堂聖純著「墾田報徳序」より見た成立期
の報徳思想

浪江健雄 江戸幕府法における改易について

五十嵐一郎 宝暦期詰衆の「詰日」と「外勤」

(研究ノート)

大庭裕介 明治初期の思想状況と旧刑法の意義

堀内暢行 日本IPRと日本国際協会の「合併」問題

(ニュース)

宮原正樹 日本史講演会参加記

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇一二年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇一二年度)

(執筆者紹介)

平成二五年度 第一八号 (阿部昭先生退職記念号)

(特集)

佐々博雄 阿部先生と国士館

(論文)

勝田政治 大久保政権の朝鮮政策

(研究ノート)

小池祐介 和親条約と孝明天皇

西村安奈 百姓一揆の変遷

―年表の比較を通じて―

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇一三年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇一三年度)

(執筆者紹介)

平成二六年度 第一九号

(論文)

仁藤智子 応天門の変と『伴大納言絵巻』

―記録と記憶の間―

大庭裕介 初期議會期の法典取調と司法省権限の形成

徳永 暁 教導職期における神社の活動

―大宮氷川神社と周辺神社の活動を中心に―

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇一四年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇一四年度)

(執筆者紹介)

平成二七年度 第二十号

勝田政治 須田勉教授の定年退職にあたって

(論文)

香川将慶 武蔵国分寺人名瓦の造瓦組織に関する研究

滝澤 誠 前期評衙院庁の構造と原型

宮原正樹 九世紀武蔵国における造瓦体制

―模骨文字瓦とその背景

皆川貴之 結城廃寺出土搏仏の再検討

岩井直人 東日本の横口式石槨

(考古・日本史学専攻研究室便り) (二〇一五年度)

(卒業論文題目一覧) (二〇一五年度)

(執筆者紹介)

二 東洋史学専攻

1 東洋史学専攻の教育理念

教育研究上の目的

科学としての歴史学は流動する現実を見据え、人類の歩みを分析・検討し、過去の流れを現在や未来に投影しようとする。基本にあるのはあなた自身による独自性あふれる問題意識なのです。大学院進学希望者をも視野に入れ、独自に史料を蒐集して分析する能力を有する人材の育成を重視していますが、同時に、広く社会一般の中で自分自身の問題を見出し、独自に客観的な手順を踏んで自らの解答を模索できる能力を有する人材の育成を目標としています。

三つのポリシー

① 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

自ら不断の「読書・体験・反省」を実践することを心がけると共に、そこから得られる知識を基盤にして自らすすんで繰り返し「思索」することを心がけている人材で、中国ならびにその周辺地域を中心に、広くアジアや世界の歴史に深い関心を持ち、漢文史料に自らすすんで積極的に取り組みながら、自分自

身の問いと答えを自主的に追い求めることを積み重ねながら「自分らしさ」を深めることのできる積極さと謙虚さとを兼ね備えている学生を求めています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

①問題意識を身につける、②世界史の視点を身につける、③国内外の研究史を理解し批判する能力を身につける、④多種多様な文献史料を読解する能力を身につける、⑤史跡・文物などの文化財を調査し研究する能力を身につける、⑥史料を調査し蒐集し分析する能力を身につける、という六つの方針を立て、流動する現実の問題を見すえ、過去における人類の歩みを分析・検討し、史料に基づく客観的な問題解明により、自分自身の問題を見出し、客観的な手順を踏んで自己を確立する態度を養うと共に、内容的レベルの高い卒業論文の達成できたから生まれる喜びにもつながる多様なカリキュラムを用意しています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

流動する現実のさまざまな問題を見すえ、過去における人類の歩みを分析・検討し、史料に基づきながら客観的に問題を解明することで、自分自身の問題を見出し、客観的な手順を踏んで自己を確立する態度を養うと共に、内容的レベルの高い卒業論文の達成できた、「自ら考え、自ら行動し、自ら世界に貢献できる」人材に対して学士（文学）の学位を授与することを方

針としています。

2 一二十年の専任教員

藤田 忠教授（中国古代史）

川又正智教授（中国考古学、ユーラシア考古学）

太田麻衣子講師（中国先秦・秦漢史）

津田資久教授（中国魏晋南北朝史）

奥山憲夫教授（中国明代史）

石橋崇雄教授（中国清朝史、北方ユーラシア史）

（異動）

平成二十年度 津田資久准教授昇格

平成二十四年度 藤田忠教授退職

平成二十五年度 太田麻衣子講師着任

平成二十八年度 津田資久教授昇格

平成二十八年度 太田麻衣子講師、教育学科

教育学専攻に人事異動

3 専攻行事

○一年次生学外研修（毎年四月上旬実施）

新入生同士の親睦をはかるため、学外の博物館や世田谷の景観を参観する。

○四年次生卒論中間報告会（毎年七月実施）

七月までに提出された卒論課題を見直させ、学生相互に卒業論文作成の現状を自覚させると共に、全専任教員及び非常勤教員による指導を通じて方向への軌道修正をはかる。同時にこれに参加する三年次生に十二月の指導会への意識を高めさせる。

○秋季学外研修（毎年九月中旬実施）

参加希望者を対象に、東洋史に関わりあいの深い施設や史跡を参観し、学年間の親睦と研究意欲の増進をはかる。

○三年次生卒論中間指導会（毎年十二月実施）

卒論への意識を深めるため、第一次計画以後に取り組んできた各自の研究成果の報告をしてもらうと共に、全専任教員及び非常勤教員による卒論作成に向けた具体的なアドバイスをを行う。

○四年次生卒論学外研修（毎年十二月中旬実施）

最終報告会を通じて口述試験に向けた準備を促すと共に、中国史に関係深い拓本研修を山梨・大門碑林公園で実施する。

平成十八年度 静岡県伊東市

平成十九年度 静岡県下田市

平成二十年度 神奈川県箱根町

平成二十一年度 静岡県伊豆市修善寺

平成二十二年度 群馬県草津町

平成二十三年度 山梨県笛吹市石和

平成二十四年度 山梨県笛吹市石和

平成二十五年 山梨県笛吹市石和
 平成二十六年 山梨県笛吹市石和
 平成二十七年 山梨県笛吹市石和
 ○東洋史学講演会

平成十八年度

石田 肇(群馬大学教授)「中国の墓誌」

平成十九年度

浅井 紀(東海大学教授)「明朝の支配体制と民間宗教」

平成二十年度

西谷 大(国立歴史民俗博物館准教授)「東アジアにおける多様な自然利用―ブタとコメ―」

平成二十一年度

実施せず

平成二十二年度

江川式部(明治大学非常勤講師)「中国史のなかの神と皇帝」

平成二十三年度

新宮 学(山形大学人文学部教授)「明朝による秀吉の「日本国王」冊封の顛末―上杉神社蔵の「兵部笥」と冠服を手がかりにして」

平成二十四年度

藤田 忠(国士館大学文学部教授)「東洋史で学ぶこと」

平成二十五年

北村誠一(東北大学名誉教授)「ラシードッディーン『集史』の世界」

平成二十六年

前田 徹(早稲田大学教授)「ウル第三王朝の滅亡」

平成二十七年

児玉智則(イラストレーター。本学卒業生)「求めるものと情報」

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種(社会)

高等学校教諭免許一種(地理歴史)

高等学校教諭免許(公民)

※右記の両免許取得予定の者に限り、科目履修で取得可能。また学内受講審査のち、副免許として小学校二種の科目履修も可能

博物館学芸員

図書館司書

社会教育主事

学校図書館司書教諭

5 発行紀要等目次

『国士館東洋史学』(国士館大学東洋史学会)

平成十八年度（二〇〇六年六月） 創刊号 小岩井弘光先生
追悼号

（小岩井弘光先生 略年譜）

藤田 忠 惜別の辞—小岩井先生 ゆっくりお休みくだ

さい

（論説）

藤田 忠 酒令籌についての試論—銀製鍍金亀負「論語

玉燭」酒籌筒の酒令籌

片野竜太郎 漢代羌族研究の現状と課題

津田資久 「曹真残碑」考釈

奥山憲夫 永楽朝の武臣処罰（二）

（研究ノート）

高井秀招 満漢合璧『jina efire be targabure Juwan

hacin（戒賭十條）』

（史料紹介）

石橋崇雄 満漢合璧『jakūn gūsai targabuny（八旗

箴）』

清史研究会 満文『欽定八旗則例』（乾隆7年版）I

（講演会要旨）

林 俊雄 突厥の歴史と文化

（彙報）

平成十九年度（二〇〇七年六月） 第二号
（論説）

大里健賢 秦末・漢初における「戦闘集団」—勢力基盤

の考察—

（研究動向）

片野竜太郎 最近10年間の中国における『後漢書』及び周

辺史料の研究動向

（史料紹介）

清史研究会 満文『欽定八旗則例』（乾隆7年版）II

（講演会要旨）

石田 肇 中国の墓誌

（彙報）

平成二十年度（二〇〇八年六月） 第三号

（論説）

藤田 忠 秦・漢時代の「不孝」の量刑について—文献

と簡牘の比較から—

「郭休碑」初探

津田資久

（研究ノート）

高井秀招

康熙二三年九月二四日付け明珠の誥封碑につ
いて—清初期の旗人官僚研究の一環として—

（講演会要旨）

浅井 紀 明朝の支配体制と民間宗教

(彙報)

平成二十二年度(二〇一一年二月) 第四・五号合併号

(資料集)

川又正智 江戸川柳にみる中国古代

(研究ノート)

高井秀招 満漢合璧『御製繙譯行軍紀律』

(史料紹介)

片野竜太郎 散見敦煌懸泉漢簡釈文集成―第一区域出土簡牘

(講演会要旨)

西谷 大 東アジアにおける多様な自然利用―ブタとコメ―

(彙報)

平成二十三年度(二〇一二年二月) 第六号

(論説)

高村武幸 敦煌・居延漢簡にみえる書信簡牘の分類―書

信簡牘試論―

(資料集)

高井秀招 『六部成語』(吏部成語) 満洲語索引―清代政

治構造分析の一環をなす旗人経済構造理解の

基礎研究として―

(史料紹介)

清史研究会 満文『欽定八旗則例』(乾隆七年版) Ⅲ

(講演会要旨)

江川式部 中国史のなかの神と皇帝

(彙報)

附

平成二十一年度(二〇一〇年三月)

『宋代史論考 小岩井弘光研究拾遺』

巻頭の辞

第一部 宋代の地方統治

宋代戸口数問題に関する私見

宋代銭塘江流域の交通について

北宋の耆長をめぐって

北宋の地方治安維持のあり方―仁宗・徽宗朝の反乱をめぐって―

南宋の地方治安維持策の一端―孝宗朝を中心として―

南宋潭州飛虎軍成立をめぐって

第二部 宋代の諸相

宋代急脚遞鋪兵について

北宋の使臣について

宋代の士大夫の一面について

『宋史』列女伝の記載について―朱娥伝を中心として―

附編 書評

佐伯富著『中国史研究 第一』

船越泰次『宋白統通典輯本附解題』

編集後記

三 地理・環境専攻

1 地理・環境専攻の教育理念

教育研究上の目的

本専攻では、「環境を構成する空間的広がりの中に見られる諸事象・諸現象の特徴について把握して、その成立要因や構造を検証する能力を養い、地理的・地理学的な見方・考え方を通して社会の理解と発展に資する人材を育成すること」を目的としています。そのために、「学生に地理的素養や環境問題に対する問題意識を身につけさせる」ことを第一の目標としています。そして、それより先の具体的目標については、個々の学生が四年間の学習を通して自ら決められるよう、専攻として斬新かつ充実したカリキュラムを準備して対応しています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

A O入試において私たちが求める学生は、下記の何れかの項目に当てはまる人です。

1. 地理や環境問題に関心があり、地理の成績が優秀である者

2. 地理、環境関係や語学関係の諸資格を持っている者

3. 生徒会活動・ボランティア活動・スポーツ等で一定の活躍をした者

4. 地域（郷土）や自然環境、環境問題、自らの見聞を広めるための旅行や野外活動に強い興味を持ち、自らもしくは自身を含むグループで企画した継続的な学習や旅行・野外活動などの経験を延べ7日以上有し、その成果を何らかのかたちで示すことのできる者。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

学生一人一人ができるだけ自由に履修計画を立てることができるよう、地理学の基礎を学ぶ科目と野外実習科目、演習科目、卒業論文のみが必修科目となっています。そして、その他の科目を含むすべての科目が半期制の選択科目となっています。カリキュラム体系としては五つの科目群から構成されています。「自然環境科目群」「地域環境科目群」「人間環境科目群」ではそれぞれの分野の地理学的素養の蓄積を得ることができ、「情報調査科目群」と「調査研究科目群」では地理学的方法を体得することができます。そして、それらによって地域・地球が抱えるさまざまな課題に迫ります。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

上記の必修・選択科目群を含めて所定の単位を修得した人に

対して卒業を認定します。中でもとくに卒業論文を学士授与の重要な案件に位置づけており、提出された卒業論文については複数の教員が査読するほか、卒論公開口頭試験の場を設けて厳正かつ公平な審査を行っています。

2 一二十年の専任教員

野口泰生教授 (自然地理学、気候学)
 長谷川均教授 (地形学、地理情報システム)
 磯谷達宏教授 (植生地理学、生態環境論)
 長島弘道教授 (農村地理学・農業地理学)
 内田順文教授 (地理的イメージ、文化地理学)
 岡島 建教授 (歴史地理学、交通地理学)
 加藤幸治教授 (経済地理学、サービス産業論)
 宮地忠幸准教授 (経済地理学、農業・農村地理学)

(異動)

平成十八年度 岡島建教授昇格
 平成十九年度 長島弘道教授退職
 平成二十年度 宮地忠幸専任講師着任
 平成二十四年度 内田順文・磯谷達宏教授昇格
 平成二十四年度 加藤幸治教授昇格
 平成二十四年度 宮地忠幸准教授昇格

平成二十七年 野口泰生教授退職

3 専攻行事

○地理学野外実習A

平成十八年度

神奈川県横浜市緑区十日市場・中山地区

平成十九年度

東京都町田市鶴川地区および神奈川県川崎市新百合ヶ丘地区・横浜市寺家ふるさと村等

平成二十年度

神奈川県川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村

平成二十一年度

神奈川県川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村

平成二十二年度

神奈川県川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村

平成二十三年度

神奈川県川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村

平成二十四年度

神奈川県川崎市麻生区黒川地区

平成二十五年

神奈川県川崎市麻生区黒川地区

平成二十六年

神奈川県川崎市麻生区黒川地区

平成二十七年 度

神奈川県川崎市麻生区黒川地区

○地理学野外実習B

平成十八年 度

千葉県流山市・柏市および茨城県みらい平地区・つくば市等（長谷川）、長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島城ヶ島とその周辺（長谷川）、神奈川県小田原市・箱根町（岡島）、神奈川県三浦市（内田）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都中央区（加藤）

平成十九年 度

千葉県流山市・柏市および茨城県つくばみらい市・つくば市（長谷川）、長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島城ヶ島とその周辺（長谷川）、埼玉県川越市（岡島）、群馬県草津町（内田）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都中央区（加藤）

平成二十年 度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島城ヶ島とその周辺（長谷川）、神奈川県鎌倉市（岡島）、千葉県南房総市とその周辺（内田）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都中央区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十一年 度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島城ヶ島とその周辺（長谷川）、静岡県金谷町・本川根町とその周辺（内田）、千葉県香取市佐原地区（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都中央区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十二 年度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島・江ノ島（長谷川）、群馬県富岡市・渋川市・伊香保町（内田）、千葉県佐倉市（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都品川区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十三 年度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県箱根町（長谷川）、栃木県日光市（内田）、埼玉県川越市（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都品川区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十四 年度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島・江ノ島（長谷川）、山梨県北杜市および長野県小諸市（内田）、栃木県栃木市・日光市今市地区（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都品川区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十五 年度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、栃木県那須塩原市および埼玉県久喜市（内田）、神奈川県小田原市・箱根町（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都品川区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十六年 度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島城ヶ島とその周辺（長谷川）、長野県須坂市・小布施町・山ノ内町（内田）、群馬県桐生市および栃木県日光市（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、東京都品川区（加藤）、群馬県川場村（宮地）

平成二十七年 度

長野県霧ヶ峰高原（野口）、神奈川県三浦半島城ヶ島とその周辺（長谷川）、長野県上田市・長野市（内田）、長野県東御市・軽井沢町および群馬県安中市（岡島）、長野県蓼科方面（磯谷）、群馬県川場村（宮地）

○地理学野外実習C

平成十八年 度

山梨県甲府市とその周辺（長島）、新潟県上越市高田地区（野口）、福島県南会津町とその周辺（長谷川）、岐阜県岐阜市とその周辺（岡島）、沖縄県沖縄本島（内田）、高知県須崎市（磯谷）、佐賀県伊万里市とその周辺（加藤）

平成十九年 度

宮城県仙台市とその周辺（長島）、栃木県宇都宮市・日光市（野口）、沖縄県久米島（長谷川）、岡山県岡山市とその周辺（岡島）、北海道札幌市とその周辺（内田）、宮崎県宮崎市とその周辺（磯谷）、福岡県大牟田市とその周辺（加

藤）

平成二十年 度

埼玉県熊谷市・秩父市・長瀨町（野口）、東京都大島町（長谷川）、群馬県前橋市とその周辺、大分県大分市とその周辺（内田）、静岡県南伊豆町・下田市（磯谷）、福井県敦賀市とその周辺（加藤）、福島県二本松市とその周辺（宮地）

平成二十一年 度

長野県長野市・須坂市・小布施町（野口）、東京都神津島村（長谷川）、沖縄県石垣市とその周辺（内田）、大阪府大阪市とその周辺（岡島）、広島県三次市（磯谷）、鹿児島県出水市（加藤）、岩手県二戸市とその周辺（宮地）

平成二十二年 度

千葉県銚子市（野口）、千葉県南房総市千倉地区とその周辺（長谷川）、北海道札幌市とその周辺（内田）、富山県富山市とその周辺（岡島）、高知県奈半利町とその周辺（磯谷）、長野県中野市（加藤）、北海道清水町（宮地）

平成二十三年 度

千葉県銚子市（野口）、東京都大島町（長谷川）、大阪府大阪市とその周辺（内田）、愛知県名古屋市中区とその周辺（岡島）、島根県大田市とその周辺（磯谷）、愛媛県八幡浜市とその周辺（加藤）、宮崎県綾町（宮地）

平成二十四年 度

群馬県前橋市・沼田市（野口）、福島県南会津町とその周辺（長谷川）、広島県広島市とその周辺（内田）、静岡県静岡市とその周辺（岡島）、愛媛県大洲市とその周辺（磯谷）、大分県臼杵市とその周辺（加藤）、愛媛県今治市とその周辺（宮地）

平成二十五年 度

新潟県新潟市・長岡市とその周辺（野口）、大阪府大阪市とその周辺（内田）、青森県青森市とその周辺（岡島）、鳥取県米子市とその周辺（磯谷）、北海道函館市とその周辺（加藤）、北海道帯広市とその周辺（宮地）

平成二十六年 度

富山県富山市とその周辺（野口）、千葉県南房総市千倉地区とその周辺（長谷川）、福岡県福岡市とその周辺（内田）、広島県福山とその周辺（岡島）、香川県さぬき市（磯谷）、北海道中標津町とその周辺（加藤）、北海道美瑛町（宮地）

平成二十七年 度

石川県金沢市とその周辺（野口）、千葉県南房総市千倉地区とその周辺（長谷川）、愛媛県松山市とその周辺（内田）、宮城県仙台市とその周辺（岡島）、徳島県阿南市とその周辺（磯谷）、長崎県島原半島（宮地）

○国土館大学地理学会講演会・研究発表会

平成十八年度

六月「フィリピン異文化体験」奥山友希乃（卒業生・JT B 勤務）

「ブラジルでの研修生活」飯田真仁（地理・環境専攻学生）

十二月「第二次世界大戦中に日本が作った地図」清水靖夫

（本学非常勤講師）

実習課題報告…松野隆明、山添啓介、森田梓・松島正信、野澤健大、中村直貴、小池友恵、呉亜鳴

平成十九年度

六月「山の景観を読む」佐々木明彦（本学非常勤講師）

十二月「持続可能な農村システムに関する研究の現状と課題」長島弘道

実習課題報告…池田雄斗、岩崎慶太、小林祐貴、菅原敏春、鈴木広樹、真分純也、竹内えり・熊倉謙・井澤雄人・塩谷貴文

平成二十年度

六月「低食料自給率の背景と日本農業の地域的課題」宮地忠幸

十二月「企業内地域間分業―経済活動の地域的差異―」末吉健治（本学非常勤講師）

実習課題報告…市川拓弘、数馬清宏・坂本雄太、向後知美、佐々木貴宏、高野淳一郎、福島清、柳沢康二

平成二十一年度

六月「サンゴ礁環境を探る―生物侵食とサンゴ礁地図の作成―」鈴木倫太郎（本学非常勤講師）

十二月「グリーンツーリズムによる地域活性化」関戸明子

（群馬大学准教授）

実習課題報告…高橋麻里亜、関谷祐介、関口直人、岡田翔子、古山晴香・門倉浩司・奈良場慎一、阿部智哉、中馬裕希・伊藤規貴

平成二十二年度

六月「歴史地理学からみた新潟県の油田開発」品田光春

（本学非常勤講師）

十二月「山に学ぶ」長谷川裕彦（本学非常勤講師）

実習課題報告…押切せかい、祐乗坊宏明、鈴木里枝、春山和彦、清水達人、一ノ瀬佳子、小出俊介・都野守貴裕・三浦大貴

平成二十三年度

六月「東京と関東の地形の成立…地震・火山・古環境とのかかわり」鈴木毅彦（本学非常勤講師）

十二月「地図学の応用」小堀昇（本学非常勤講師）

実習課題報告…青木 俊・志村 衛・坪内有沙、小川陽介、高橋孝介、塚木達彦、斎藤 肇・大塚洋二郎・江川祐樹、鈴木一明・古川雄太、渡辺基

平成二十四年度

六月「人口高齢化にともなう住宅地空間の変質と維持」

長沼佐枝（本学非常勤講師）

十二月「極地のフィールドワーク―第四紀の南極氷床変動の謎を解く―」三浦英樹（本学非常勤講師）

実習課題報告…正田一真・後野寛子・渡邊 智、丸田

洋樹、高橋幸平、川村尚子、浪床裕貴、添野真広、岩間太一

平成二十五年度

六月「自然地理」+「情報科学」中山大地（本学非常勤講師）

十二月「地域ブランドと地理的表示」高柳長直（東京農業大学）

実習課題報告…吉村美咲、西本修司、米長知里、田所正敏、川口拓也・吉田真

平成二十六年

六月「変わりゆく東京大都市圏の社会・空間構造―199

0年代以降を対象として―」小泉諒（本学非常勤講師）

十二月「地理学を地方行政の現場で生かす」石原肇（東京都庁）

「航空測量業界の仕事と今後の展望について」大伴真吾氏（朝日航洋（株））

実習課題報告…高中亮、高水紘、田口翼、中根敏江・

根本崇弘・高橋和人、中村周平、石黒敦志、小沼大

平成二十七年 度

六月「インダス文明と自然環境」前全英明（本学非常勤講師）

十二月「霧ヶ峰の気候景観」野口泰生

実習課題報告・佐藤宏昭、前原翔吾、大塚憲司、宇都

宮和彦・宮野涼太・諸橋夏海・吉岡大貴、菅原孝太、

鈴木岳美・清水駿悟・樋口達也

○社会科教員のための地理ワークショップ

平成十八年 度

「ヨーロッパ地誌をどう教えるか」

長谷川裕彦（本学非常勤講師）、長島弘道、野口泰生、内

田順文、加藤幸治

平成十九年 度

「BRICs 諸国の現在」（経済地理学会共催）

小俣 利男（東洋大学）、デニス・シャルピン（東洋大学・

院）、楢塚賢太郎（琉球大学）、上野和彦（東京学芸大

学）、磯谷達宏

平成二十年 度

「環境問題を『グローバル』にみる・考える」

山添謙（日本大学）、伊藤達也（法政大学）、内田順文、磯

谷達宏

平成二十一年 度

「北アメリカ多様な自然と社会」

東郷正美（法政大学）、高柳長直（東京農業大学）、山本大
策（Central Michigan Univ.）、野口泰生、長谷川均

平成二十二年 度

「ちり散歩―国士舘スタッフが案内する最近の地理学の話
題―」

野口泰生、長谷川均、内田順文、岡島建、磯谷達宏、加藤

幸治、宮地忠幸

平成二十三 年度

「アフリカ地誌の授業をどう創るか?―大陸規模の地誌の
事例として―」

嶋田義仁（名古屋大学）、野口泰生、長谷川均、磯谷達宏

平成二十四 年度

「アジアの地域区分を考える」

内田順文、岡島建、磯谷達宏、加藤幸治、宮地忠幸

平成二十五 年度

「私の大学授業紹介…大学教員の地理学教育の今」

野口泰生、内田順文、岡島建、磯谷達宏、加藤幸治、宮地

忠幸

平成二十六 年度

「地理の目で見る南の島・沖縄」

柴田健（元神奈川県立高校教諭）、中井達郎（本学非常勤

講師)、長谷川均

平成二十七年

「地図でみる・学ぶ世田谷」

野々村邦夫(日本地図センター)、長谷川均

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種(社会)

高等学校教諭免許一種(地理歴史)

高等学校教諭免許一種(公民)

※中学校一種・高等学校一種両免許を取得予定のものに限り他学科履修で取得可能

社会教育主事

博物館学芸員

測量士補

GIS学術士

地域調査士

図書館司書

学校図書館司書教諭

5 発行紀要目次

『国士館大学地理学報告』(国士館大学地理学会)

平成十八年度 No.15

磯谷達宏・樋口健太郎 ハケ岳西岳南西斜面における管理

放棄型カラマツ植林の組成と構造

本多奈美子 コンビニエンスストアの立地地点と取扱商品

―武蔵野市に立地するCVSと国道20号線沿いに立地するセブンイレブンを事例に―

藤田泰文 神奈川県丹沢山麓のスギ・ヒノキ人工林に侵

入した広葉樹林冠木を含む群落の組成と立地環境特性

後藤智哉 DSMおよびオルソフォト作成に空中写真の

スキャン条件が与える影響

2005年度 国士館大学大学院地理・地域論コース 修

士論文要旨

2005年度 国士館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成十九年度 No.16

野口泰生 長島先生を送ることは

長島弘道先生の研究業績

長島弘道 国際地理学連合 農業・農村関係委員会の会

議(1976―2006)に参加して

岡島 建・大矢康一 コミュニティバス運行の現状と課題

―東京都杉並区および西東京市の事例を中心として―

内田順文 風景としての武蔵野―国木田独歩『武蔵野』を読む

2000年の日本における職業別就業者の地域的展開・都道府県別データからの分析

加藤幸治

掘江克浩 高校地理授業における作業的・体験的学習の事例

小堀貴亮

相馬拓也 東北・九州地方における湯治場の機能変化

橋本紗代子

九州北部の歴史的町並みにおける観光客のイメージ

狩猟のエスノグラフィ

長島弘道・長谷川均 デラサール大学との国際交流セミナー報告

2006年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十年度 No.17

藤田泰文・長谷川均・後藤智哉 光源と測定環境が樹木単葉の分光反射特性に与える影響

原田 隼 東京都台東区におけるマンガ喫茶の立地展開

小池友恵 作家、三浦綾子が描いた北海道―故郷としての場所と信仰を深める場所―

保谷忠男 IPCCの主張する地球温暖化論の問題点に

ついて―気温変動と大気中のCO₂に焦点をあてて―

2007年度 国士舘大学大学院地理・地域論コース 修

士論文要旨

2007年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十一年度 No.18

岡島 建・宮下智宏 1920年代における局地鉄道の計画と建設―山形県村山地方を事例にして―

岩崎慶太・磯谷達宏 茨城県北部の照葉樹林分布限界における二次林の分布および組成と構造について

西潟秀平 秀吉系大名によるヨコ町型城下町の建設―池田輝政を事例に―

池田雄斗 奈良県明日香村における「ふるさと」演出と古都飛鳥観光の真正性

山口史枝 中部山岳亜高山帯における主要針葉樹分布域の温度領域

2008年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十二年度 No.19

宮地忠幸 中山間地域における特産品開発の地域的意義に関する一考察―阿武隈高地における桑の特産品開発を事例として―

福島 清

首都圏における鉄道利用客数の変化からみた都市構造変化

飯塚正樹

薩摩硫黄島におけるガリー侵食の経年変化
—1946年～2007年までのオルソ空中写真による解析—

内田順文・池田雄斗 2010年度海外巡検（国際大学交

流セミナー「中国遼寧省・河北省の都市と文化遺産」に関する報告

2009年度 国土館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十三年度 No.20

加藤幸治 立地係数からみた現在の日本における地域構

造の特徴—「農工業県」に関する分析を中心として—

小坂真耶 東限におけるイヌガシ (*Neolisea aciculata*)

個体群の分布とその生育環境

盧 娜 秋葉原におけるソフトウェア企業の立地と中

国系ソフトウェア企業の特徴

2010年度 国土館大学大学院地理・地域論コース 修

士論文要旨

2010年度 国土館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十四年度 No.21

加藤幸治・楯塚賢太郎・加藤和暢 ドクターヘリ導入によ

る「15分アクセス圏」の拡大—運航制約を考慮した効果把握のための覚書—

門田和也 埼玉県中央地域における銭湯とスーパー銭湯

の共存

梁 国響 賑わいのある商店街の現状—新小岩駅前ルミ

エール商店街の事例—

保谷忠男 海面水位の変動と地球温暖化論

宮地忠幸 大学生による体験を通じた農業・農村学習

—2009・2010年度の活動記録と事後

評価—

2011年度 国土館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十五年度 No.22

大野 勲・内田順文 大岡昇平『武蔵野夫人』の舞台に関

する地理学的考察—「はけ」の家の位置をめぐる—

長谷川 均 UAV(自律型飛行体)を使った高解像空中写

真の撮影と活用—サンゴ礁浅海域での事例—

長谷川裕彦・青山雅史・佐々木明彦・増沢武弘 南アルプ

ス、荒川三山南面圏谷群における最終氷期以降の氷河・周氷河地形発達史

川崎遼平 地方ローカル鉄道の上二分離に伴う変容と地

域住民―伊賀市・伊賀鉄道を事例に―

志村 衛

銚子市におけるキャベツ産地の存続メカニズム

2011年度

国土館大学大学院地理・地域論コース 修

士論文要旨

2012年度

国土館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十六年 度 No.23

加藤幸治

ドクターヘリ出動目的の地域的差違とその示唆

―道東ドクターヘリの運航実績に注目して―

佐々木明彦

蔵王火山の亜高山帯における気温の通年観測

古山晴香・加藤幸治

近年におけるファミリーレストラン

の立地展開―千葉県を中心に―

2013年度

国土館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

平成二十七年 度 No.24

長谷川 均

野口泰生先生と地理学教室

野口先生の略歴と研究業績

野口泰生

中信高原霧ヶ峰の南風

野口泰生

国土館大学地理・環境専攻学生の26年（19

90～2015）変わったものと変わらな

ったもの

鈴木柚里奈

青山通りにおけるネイルサロンの立地とその

料金の地域差

長谷川玲大

認知地図に基づく東京の山の手と下町の範囲

2014年度

国土館大学大学院地理・地域論コース 修

士論文要旨

2014年度

国土館大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第三項 文学科

教育研究上の目的

文学科は、中国語・中国文学専攻と日本文学・文化専攻の二専攻で構成されています。本学科では、本大学の建学の理念や文学部における研究・教育理念を共通の目的として、文学・文化・思想・語学・芸術等の理解と研究を通じて「心の教育」と「人間形成」をはかり、社会において活力をもたらす人材を育成することを目的にしています。そのために両専攻では、漢文や日本古典・言語・現代文学文化の研究を基礎とし、さらに幅広い文学・文化を学ぶことで、日本はもちろんのこと、海外からの視点を持ち、現代社会で活躍するための良識をそなえた人材の育成に努めています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）
 国士館大学・文学部・文学科各専攻の教育目標を理解し、各専攻の求めるアドミッションポリシーに適う、積極的學生を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
 文学科は、哲学・思想、文学、語学をカリキュラムの柱とする中国語・中国文学専攻、日本語学、日本文学・文化学をカリキュラムの柱とする日本文学・文化専攻の有機的連関性を持つカリキュラムによって構成されています。教職は、中学・高校、資格は、図書館司書、学校図書館司書教諭などが取得できます。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
 大学所定の単位を修め、各専攻のディプロマ・ポリシーを達成した學生に、卒業を認定し学位を授与しています。なお、卒業論文を学位授与の重要な要件に位置づけています。

一 中国語・中国文学専攻

3. 生徒会活動、ボランティア活動、スポーツ・文化・芸術等で一定の活躍をした人。

1 中国語・中国文学専攻の教育理念

教育研究上の目的

中国の文学・哲学・思想・言語文化研究を通じて、人間形成を目標としています。昨今、漢字離れやその延長線上の読書離れが、広く取り沙汰されています。私たちの専攻では、こうした現況に鑑み、漢字によって記録された文献や芸術を学習研究することにより、豊かな心の涵養を図り、礼儀を重視した真の人格形成を行っています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

学力重視は勿論のこと、学習意欲、学習の目的意識をも重視して、さらに、社会貢献に意欲的に取り込んでいこうとするなどの点を総合的に考量して、入学者を選抜します。本専攻では次のような学生を求めています。

1. 中国文学・思想・言語・芸術等の文化について、熱意をもって学びたい人。
2. 漢字検定・語学関係（中国語その他）の資格を持っている者、漢文に興味を持っている人。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

本専攻では3本の柱を立て、その教育・研究の充実を図っています。その柱とは、①哲学・思想、②文学、③語学です。いずれも中国の古代から現代に至るまでを対象とし、幅広い教養を身につけ、文献を収集・講読し、問題意識をもって事象を分析し、その過程で自己を確立し、古典から涵養される徳によって社会に有為な人材となるようカリキュラムが編成されています。特に古典は日本の思想や文学・芸術を培ってきたものであり、基礎から学ぶことによって日本文化の深奥に迫ることができます。作詩や書道によって情操を涵養し、表現力を身につける科目も設定され、海外との交流も視野に置いています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

所定の単位を修め、卒業論文は高い水準に達したものの、さらに次の能力を有している者に認定します。

1. 中国文学・思想・言語・芸術等の文化について、一定の見識、素養を身に付けていること。
2. 四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」を身に付けていること。
3. 高い人格を持っていること。

4. 社会に貢献する力量と意欲を持っていること。

2 二十十年の専任教員

廣野行甫教授
内村嘉秀教授
鷺野正明教授
藤森 馨教授
藤田梨那教授
松野敏之准教授

(異動)

平成二十二年度 廣野行甫退職
平成二十四年度 松野敏之着任
平成二十七年 度 内村嘉秀退職
平成二十七年 度 松野敏之准教授昇格

3 専攻行事

○学外研修

平成十八年度 千葉県 香取神宮・佐原方面
平成十九年度 千葉県 館山方面
平成二十年度 東京国立博物館 浅草 江戸東京博物館

平成二十一年度 三溪園 金澤文庫
平成二十二年度 山梨県立美術館 碑林公園
平成二十三年 度 鎌倉方面
平成二十四年度 鎌倉方面
平成二十五年度 佐倉国立歴史民俗博物館
平成二十六年 度 京劇鑑賞
平成二十七年 度 金沢文庫
平成二十八年度 山梨方面

○卒業論文研修合宿

平成十八年度 南房総方面
平成十九年度 南房総方面
平成二十年度 南房総方面
平成二十一年 度 南房総方面
平成二十二年度 南房総方面
平成二十三年度 伊豆方面
平成二十四年度 伊豆方面
平成二十五年度 新潟方面
平成二十六年度 新潟方面
平成二十七年 度 伊豆方面

○漢学会

平成十八年度 第四十一回漢学会

平成十九年度 第四十二回漢学会

平成二十年 第四十三回漢学会

平成二十一年度 第四十四回漢学会並びに総会

平成二十二年 第四十五回漢学会並びに総会

平成二十三年 第四十六回漢学会並びに三年生卒業論文指導会

平成二十四年度 第四十七回漢学会及び中国語コンテスト

平成二十五年度 第四十八回漢学会及び中国語コンテスト

平成二十六年 第四十九回漢学会及び中国語コンテスト

平成二十七年 第五十回漢学会及び中国語コンテスト

○国際交流セミナー

平成十八年度 日中文化交流作詩セミナー 中国蘇州大学

平成十九年度 日中文化交流作詩セミナー 中国蘇州大学

平成二十年 日中文化交流作詩セミナー 中国蘇州大学

平成二十一年度 日中文化交流作詩セミナー 中国蘇州大学

来訪

平成二十二年 日中文化交流作詩セミナー 中国蘇州大学

平成二十三年 日中文化交流作詩セミナー 中国山西大学

平成二十四年度 日中文化交流作詩セミナー 中国蘇州大学

平成二十五年 日中大学生交流週間 山西大学学生、教員

来訪

平成二十六年 日台文化交流セミナー 台湾中山大学

平成二十七年 日中文化交流セミナー 北京師範大学、天津外語大学

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種（国語）

高等学校教諭免許一種（国語）

高等学校教諭免許一種（書道）

図書館司書資格

学校図書館司書教諭資格

5 発行紀要目次

『漢学紀要』（国士舘大学漢学会）

平成十八年度 第九号

（論文）

村山吉廣 久保天隨—大正詩壇の雄—

鷺野正明 大沼枕山の房州への旅と『房山集』について

—青春の苦悩と自己確立の旅路—

重野宏一 朱熹の詩経学研究（1）—朱熹の詩経観—

（文苑）

荒井 禮 二〇〇六年蘇州作詩セミナー

―詩跡探訪・名勝紹介―

受講生

漢詩作品集（平成十八年度）

（報告）

齋藤 聡

北京留学 授業と宿舎―北京師範大学の場合―

（訳注）

荒井 禮

帯経堂詩話注釈（五）

（作詩交流セミナー報告）

鷺野正明

第四回蘇州大学作詩交流セミナー 報告

第四回蘇州大学作詩交流セミナー 漢詩作品集

集

第四回蘇州大学作詩交流セミナー 感想文集

（彙報）

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成十八年度授業科目別担当教員

表

中国語・中国文学専攻 平成十八年度教員別担当授業科目

表

卒業論文題目（平成十八年度）

漢学会の歩み（平成十八年度）

漢学会大会記録（平成十八年度第四十一回）

国士館大学漢学会会則

平成十九年度 第十号

（論文）

鷺野正明

明代の〈詩法書〉と〈詩法指南書〉について

荒井 禮

王漁洋の「悼亡詩三十五首」について

（文苑）

受講生

漢詩作品集（平成十九年度）

鷺野正明

伏姫桜―市川・真間漢詩紀行―

荒井 禮

二〇〇七年蘇州作詩セミナー―詩蹟探訪・名

跡探訪―

（報告）

齋藤 聡

留学通信―北京師範大学に留学して―

（訳注）

荒井 禮

帯経堂詩話注釈（六）

（作詩交流セミナー報告）

鷺野正明

第五回蘇州大学作詩交流セミナー 報告

第五回蘇州大学作詩交流セミナー 漢詩作品集

第五回蘇州大学作詩交流セミナー 感想文集

（彙報）

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成十九年度教員別担当授業科目表

卒業論文題目（平成十九年度）

漢学会の歩み（平成十九年度）

漢学会大会記録（平成十九年度第四十二回）

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十年度 第十一号

(論文)

鷺野正明

『房山集』にみる枕山の詩想と表現(一)――絶句を中心に――

齋藤 聡

「結客少年場行」について――漢から盛唐までの展開――

(文苑)

受講生

漢詩作品集(平成二十年度)

荒井 禮

二〇〇八年蘇州作詩セミナー 詩蹟・名跡探訪――

鷺野正明

漢詩創作紀行(二) 小見川・佐原吟行

鷺野正明

漢詩創作紀行(三) 船橋の巨木・名木を訪ねて

(訳注)

齋藤 聡

荒井 禮 帯経堂詩話注釈(七)

(報告)

藤田梨那

高等学校アンケート報告

(作詩交流セミナー報告)

鷺野正明

第六回蘇州大学作詩交流セミナー報告

第六回蘇州大学作詩交流セミナー漢詩作品集

第六回蘇州大学作詩交流セミナー感想文集

(彙報)

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十年度教員別担当授業科目表

表

修士論文・卒業論文題目(平成二十年度)

漢学会の歩み(平成二十年度)

漢学会大会記録(平成二十年度第四十三回)

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十一年度 第十二号

廣野行甫教授 近影

廣野行甫

大西貫也記

来し方を振り返って

廣野行甫教授略歴

(廣野行甫教授の思い出)

内山知也

村山吉廣

向嶋成美

中村俊也

宇野直人

河内利治

笹木英樹

大西貫也

杉山金夫

中田博士

稲場 貢

嶋田勝範

山田 斉

佐藤久雄

野中隆士

竹雅健介

菊地誠一

菊地友紀

川邊雄大

古城広恵

土屋明美

大日向真紀子

齋藤 聡

荒井 禮

重野宏一

内村嘉秀

藤田梨那

鷺野正明

(廣野教授に贈る 漢詩作品集)

鷺野正明

園田皓太

渡辺修斗

佐々木光昭

軸屋友喜

伊藤 鋼 小野辰徳 東 由貴 鈴木智美 大川雪乃

内山修平 吉田 諒 小川義之 佐々木理紗子

山川亜砂実 赤尾蘭子 長嶋直輝 増野竜巳 見代拓郎

塚原莉香 日野大輔 西村圭輔 白井由美 竹内 誠

(論攷)

藤田梨那 Taiwanese Author Sima Sangdun`s Novel

‘The Korean Wovf’

As a Text of the Post Colonial Literature

楊 赫 論中国年輕一代眼中的日本

(文苑)

鷺野正明 梁川星巖の『浪淘集』を詠む

(作詩交流セミナー)

鷺野正明 蘇州大学・国士舘大学作詩交流セミナー

——崑曲研究家・周秦教授初来日——

(彙報)

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十一年度教員別担当授業科目表

卒業論文題目 (平成二十一年度)

漢学会の歩み (平成二十一年度)

漢学会大会記録 (平成二十一年度第四十四回)

国士舘大学漢学会会則

編輯後記

平成二十二年度 第十三号

(記念講演)

廣野行甫 (菊地誠一 筆記・校注) 直方大

(論攷)

鷺野正明 徐禎卿の評価をめぐる

西郷南洲『南洲手抄言志録』について

菊地誠一 | 佐藤一齋「言志四録」との数値的対比を中

心として——

(文苑)

受講生 平成二十二年度 漢詩作品集

鷺野正明 梁川星巖の「浪淘集」をよむ (二)

鷺野正明 卒論口頭試問研修——南房絵の旅——

鷺野正明 佐倉吟行

蘇州吟行会

鷺野正明 ・ 漢詩創作の旅——蘇州——

佐々木理紗子 ・ 初めての海外旅行「蘇州」

増野竜巳 ・ 蘇州吟行の旅

園田 誠 ・ 蘇州紀行

荒井 禮 ・ 蘇州吟行の旅

(彙報)

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十二年度教員別担当授業科

目表

卒業論文題目（平成二十二年度）

漢学会の歩み（平成二十二年度）

漢学会大会記録（平成二十二年度第四十五回）

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十三年度 第十四号

（論攷）

鷺野正明 徐禎卿の生涯——『明史』徐禎卿伝から見る——

（文苑）

受講生 平成二十三年度 漢詩作品集

漢詩コンクール入賞作品

鷺野正明 梁川星巖の「浪淘集」をよむ（三）

鷺野正明 学外研修—鎌倉—

鷺野正明 卒論発表研修—伊豆—

鷺野正明 行徳吟行

（作詩セミナー報告）

鷺野正明 山西大学学術交流セミナー

（彙報）

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十三年度教員別担当授業科

目表

卒業論文題目（平成二十三年度）

漢学会の歩み（平成二十三年度）

漢学会大会記録（平成二十三年度第四十六回）

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十四年度 第十五号

（特別寄稿）

（翻訳）

追憶朱東潤先生 泰興 耿映雪 村山吉廣（訳・解題）

呉 格 跋村山先生譯耿映雪《追憶朱東潤先生》

村山吉廣 朱東潤と耿映雪女史と私

（論攷）

松野敏之 陸隴其「小学」説

（文苑）

受講生 平成二十四年度漢詩作品

（報告）

鷺野正明 蘇州大学作詩交流セミナー報告

同 参加者レポート

鈴木絢子 内村秀文 中玉利誠一 佐々木瞳

佐藤萌仁香 河野幸彦 矢澤絵里奈 園田誠

松野敏之 鷺野正明

平成二十四年度作詩コンクール

（彙報）

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十四年度教員別担当授業科目表

卒業論文題目（平成二十四年度）

漢学会の歩み（平成二十四年度）

漢学会大会記録（平成二十四年度第四十七回）

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十五年度 第十六号

（特別寄稿）

大場一央 学問ノススメ

（論攷）

鷺野正明 徐禎卿の「文章煙月」をめぐる

菊地誠一 本城問亭の人物と学問 ―『問亭遺文』を中心として―

（文苑）

受講生 平成二十五年度漢詩作品

（報告）

山西大学・国士館大学 文化交流報告

（彙報）

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十五年度教員別担当授業科

目表

卒業論文題目（平成二十五年度）

漢学会の歩み（平成二十五年度）

漢学会大会記録（平成二十五年度第四十八回）

第二回詩文朗読コンテスト

第三回国士館大学中国語・中国文学専攻教育研究セミナー

漢詩コンクール

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十六年 第十七号

（特別寄稿）

村山吉廣 中島綽軒の生涯と詩業

（論攷）

鷺野正明 徐禎卿の「於武昌懷獻吉五十韻」について

（文苑）

受講生 平成二十六年漢詩作品

（報告）

松野敏之 台湾国立中山大学交流セミナー 報告

同 参加者レポート

前原悠 武者智也 齊賀稜 館山寿希哉

永田諒乃 戸丸凌太

（彙報）

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表
中国語・中国文学専攻 平成二十六年教員別担当授業科目表

卒業論文題目 (平成二十六年)

漢学会の歩み (平成二十六年)

漢学会大会記録 (平成二十六年第四十九回)

第三回詩文朗読コンテスト

第四回国士館大学中国語・中国文学専攻教育研究セミナー

漢詩コンクール

国士館大学漢学会会則

編輯後記

平成二十七年 第十八号

(特別寄稿)

内村嘉秀

魚が楽しんでいるのが分からない？

—『莊子』の濠梁寓話について—

(論攷)

鷺野正明

徐禎卿の青春—唐寅との交遊—

(訳注)

荒井 禮

蘇曼殊「本事詩十章」訳注

(文苑)

受講生

平成二十七年漢詩作品

鷺野正明

臺灣の記憶

(報告)

松野敏之 北京師範大学交流セミナー 報告

同 参加者レポート

二年 山本理穂 三年 久保庭大輔

長屋めぐみ

河野健治 四年 森田梓 並木葵 鈴木絢子

戸丸凌太

(彙報)

中国語・中国文学専攻 専門教育科目配当表

中国語・中国文学専攻 平成二十七年教員別担当授業科目表

卒業論文題目 (平成二十七年)

漢学会の歩み (平成二十六年)

漢学会大会記録 (平成二十七年第五十回)

第四回詩文朗読コンテスト

卒業論文発表研修 (伊豆方面)

第一回書道作品展

国士館大学漢学会会則

編輯後記

二 日本文学・文化専攻

1 日本文学・文化専攻の教育理念

教育研究上の目的

文学部文学科日本文学・文化専攻では、上代から現代にいたる日本文学や文化および日本語について幅広い知識と教養を養いながら、同時に柔軟かつ論理的な思考力を身につけることによって、本大学の建学精神に則って広く社会に貢献できる人材を養成する教育を行うことを目的にしています。日本文学や日本語に関する専門的な授業だけではなく、書道・映像・思想・歴史など、関連する多角的な授業を用意しており、学生各々が興味や関心を持った日本の文学・文化を、より深く広い次元で理解することができます。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

1. 日本の文学や文化および日本語に対して、強い関心を持つ学生を求めます。
2. 日本文学を考える上で必須となる芸術や歴史に関心を持ち、また、広く日本文学・文化を理解するために欠かせない語学の学習に意欲を持つ学生を求めます。

3. 旺盛な読書欲を持ち、平素から論理的な思考方法に心がけ、同時に他人の意見を尊重するコミュニケーション能力に長けた学生を求めます。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

本専攻の教育研究上の目的を達成するため、下記の教育課程を実施しています。日本の上代から現代にいたる多様な文学・文学や日本語の内包する問題を整理し、論理的に分析する能力やコミュニケーション能力を養成することを目指しています。少人数で構成する演習科目で、読む・話す・書くといった能力を養成し、同時に問題解決能力を身につけます。また、中学校・高等学校の国語教諭や、学校図書館司書教諭、図書館司書など、社会で活用できる諸資格取得のための科目を設定しています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本専攻の研究教育上の目的を達成し、所定の単位をおさめ、次の能力を有していることによって卒業を認定します。すなわち、日本の上代から現代にいたるまでの文学・文化および日本語について幅広い知識と教養といった能力を習得していることと、上記の能力を習得する過程において、それらを広く歴史・社会・自然と関連づけて理解していることが求められます。本専攻において培った能力を卒業後に社会で活かしてもらいたい

と強く願うゆえんです。なお、そうした能力を鍛える実践の場として、卒業論文を学位授与の重要な要件に位置づけています。

2 二十十年の専任教員

山本昌一教授（日本近代文学）
 細貝宗弘教授（書道）
 濱中 修教授（日本中世文学）
 田代 真教授（比較文学）
 田代博司教授（西洋哲学）
 中島礼子教授（日本近代文学）
 村田裕司教授（日本近世文学）
 中村一夫教授（日本語学）
 鷺山茂雄教授（日本中古文学）
 平浩一准教授（日本近代文学）
 目野由希講師（日本近代文学）
 松野 彩講師（日本中古文学）

（異動）

平成一八年度 鷺山茂雄教授着任
 平成一九年度 山本昌一教授定年退職
 平成二二年度 田代真教授昇格

平浩一講師着任

目野由希講師体育学部へ異動

平成二三年度 中村一夫教授昇格

平成二六年度 平浩一准教授昇格

鷺山茂雄教授定年退職

平成二七年度 松野 彩講師着任

3 専攻行事

○新入生学外研修（毎年四月）

新入生同士および教員との交歓を目的として、春期オリエンテーション期間中に、貸切バスを利用して主に近郊の美術館等を巡る。

○三年生学外研修（毎年五月）

ゼミが始まる三年生を対象に、日本文学や文化に関わる美術館や展覧会を巡る。ゼミ生同士の交歓と教養を養うことを目的とする。

○国士館大学国文学会大会（毎年十月下旬、または十一月上旬）

教員と学生で組織される「国士館大学国文学会」の大会で、専攻のすべての学生が参加する。大会は、三・四年生から選ばれる国文学会実行委員会によって運営され、四年生各ゼミの代表者による研究発表と学外から招聘する研究者等の講演を行い、また、総会が開かれる。

○観劇会（毎年十二月中旬）

専攻の学生全員で、国立劇場において歌舞伎公演を鑑賞する。

○ゼミ旅行（毎年二月～三月）

四年生の各ゼミそれぞれで計画を練り、二年間のゼミのまとめとして研修旅行を実施している。

4 取得できる免許・資格

中学校教諭免許一種（国語）

高等学校教諭免許一種（国語）

高等学校教諭免許一種（書道）

学校図書館司書教諭

図書館司書

5 発行紀要目次

『国文学論輯』（国士舘大学国文学会）

平成二十年三月 第二九号

村田裕司 山本先生ありがとうございました

山本昌一教授略年譜・研究業績

（講演）

棚橋正博 江戸時代の戯作文学

（論文）

中村一夫

源氏物語別本の性格

―待遇表現から見た―

濱中 修

能「玄象」考

―須磨をめぐる伝承世界―

目野由希

昭和期における有島生馬試論

山本昌一

自然主義の移入

―ゾラ・ナチュラリズム・『維氏美学』―

（報告）

中村一夫ゼミ

歌謡曲における歌詞の史的変遷

（卒業論文）

小野朋生

「范の犯罪」事件考

平成二十一年三月 第三〇号

（講演）

飯倉史朗

日本映画と文学

―領域横断的な研究の可能性―

（論文）

濱中 修

浄瑠璃姫の物語

―在地の王権―

目野由希

奇妙な年

―一九三七年パリの有島生馬について―

(報告)

中村一夫ゼミ 現代日本マンガにおける役割語

―ステレオタイプを形成する表現をめぐって―

(卒業論文)

寺岡沙恵 『源氏物語』における女性のまなざし

平成二十二年三月 第三号

(講演)

井上理恵 新演劇の可能性を探る

―川上音二郎の「金色夜叉」の初演

そして伝説化と研究資料の使い方への一考察―

(報告)

中村一夫ゼミ 役割語から読む「サザエさん」(前)

―類型化とキャラクターを中心に―

(卒業論文)

畠山祐美 埴谷雄高『死霊』論

平成二十三年三月 第三号

(講演)

小嶋菜温子 幻の「源氏物語絵巻」

―『源氏物語』を楽しむ―

(論文)

大山ゆり 玉藻前の神話学

平 浩一

―文明二年写本『玉藻前物語』を中心に―
比喩の文学現象

―一九七〇年代以降の〈文芸復興〉観について―

(報告)

中村一夫ゼミ 役割語から読む「サザエさん」(後)

―類型化および作画との関連性―

(卒業論文)

網代 純 田山花袋「蒲団」について

平成二十四年三月 第三号

(講演)

日沖敦子 毛髪で縫った曼荼羅

―漂泊僧 空念の物語―

(論文)

濱中 修 厳島の女神信仰

―内侍・足引宮・竜女―

中島礼子 国木田独歩『欺かざるの記』「牛肉と馬鈴薯」

「空知川の岸辺」におけるアイヌ民族に関する記述の欠落について

(卒業論文)

菅谷ジャン・マリア・パトリック

差別用語―「外人」と「外国人」―

平成二十五年三月 第三四号

(講演)

上原作和 『源氏物語』の琴学史

―「一子相伝」の回路―

(論文)

大内英範 ベルリン国立図書館所蔵の源氏物語写本につ

いて

濱中 修 高野山と平家物語

中島礼子 国木田独歩「窮死」

―社会福祉政策の視点から―

(報告)

中村一夫・二〇一一年度、二〇一二年度日本語ゼミ生

歌謡曲の表現

―性差・役割語・類型―

(卒業論文)

田中智恵 「才覚を笠に着る大黒」考

―逆転劇の中の〈世の人心〉―

北條愛果 柳宗悦の仏教美学で読むウィリアム・ブレイ

ク『無垢と経験の歌』

―「毒の木」は美醜分別か美醜未分か―

平成二六年三月 第三五号

(講演)

山田俊治 書物出版の近代

(報告)

中村一夫・二〇一三年度日本語ゼミ生

現代日本語における外来語の量的推移と基本語化

(卒業論文)

中山新也 三島由紀夫「わが友ヒットラー」

―登場人物の機能と関係―

平沢友子 芥川文学にみる悪魔

―切支丹物を中心に―

平成二十七年三月 第三六号

田代 真 鷺山先生を送ることは

鷺山茂雄 世田谷キャンパス讃

(講演)

恋田知子 物語草子研究の現在

―在米絵入り本の調査・研究に携わって―

(論文)

細貝宗弘 古文書の背景が解る筆・墨・硯

(報告)

中村一夫・二〇一四年度日本語ゼミ生

近代日本語における外来語

―明治期の小説・翻訳を中心にして―

(卒業論文)

野呂実里

松本清張と『点と線』から見る「社会派推理小説」

平成二十八年三月 第三七号

(講演)

瀬川ゆき

”文学を体験する空間“をつくる

(論文)

濱中 修

七面天女その他

中村一夫

類義語と本文異同

―源氏物語における「にる」「かよふ」―

大学院 人文科学研究科

教育研究上の目的

人文科学研究科は、歴史、文学・文化、地理・地域、教育、心理を主軸とした人文諸科学の教育と研究の場として、人文科学専攻と教育学専攻の2専攻から構成され、ともに修士課程・博士課程が設置されている。人文諸科学は、専門性と学際的傾向の両面にわたり発展、深化が著しい。本研究科では、学問の専門性を深めるとともに、広い視野に立つて人文諸科学の精深な学識を授け、研究することにより、つぎのような人材を育成することを目的とする。

○専門分野における自立した研究者

○高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力を持った人材
○時代や社会の要請に応えることができる豊かな学識をもった人材
人文科学専攻は、日本史・東洋史学、文学・文化論、地理・地域論の3コースより構成される。

日本史・東洋史学コースは、日本史学・中国史学を軸として、その周辺のアジアの歴史を専門的に学ぶとともに、文献史学や考古学の手法を用いて、高度な研究能力や豊かな学識を養う。文学・文化論コースは、日本文学・中国文学を軸として、その周辺地域の文学・哲学・言語・言語芸術を学ぶとともに、書道なども対象とした高度な研究能力や豊かな学識を養う。地

理・地域論コースは、人文地理・自然地理・地誌学を軸として、地球環境や資源問題、都市開発など、現代社会・文化・自然問題にアプローチしうる知見・技能を深め、高度な研究能力や豊かな学識を養う。3コースは共通して、それぞれの研究を基盤とし、時代の要請である学際的研究を通じて、時代と社会の要請に対応できる研究者、専門性を有する職業人の育成を図る。

教育学専攻は、教育思想、教育史学、比較教育文化論、教育制度論、教育社会学からなる教育学と、各教科教育実践、教師論、教育臨床論からなる教職研究、および心理学の三つの研究分野から構成される。本専攻では、人間形成の学問としての教育学の研究能力および人間の意識と行動を科学的に理解する心理学の研究能力を高めることにより、つぎのような人材を育成することを目的とする。

○広い視野と高度な専門性を有し、時代と社会の要請や実践的な課題に応えうる研究者

○豊かな人間性を持ち、求められる資質の高度化に応えうる教員
○生涯を通じた幅広い学習機会の提供や学習環境づくりに貢献できる指導者

○新たな社会動向に対応する専門知識と能力を持つ高度な専門職業人

第一項 修士課程

教育研究上の目的

人文科学研究科修士課程は、国士館大学の建学の精神を基礎として、歴史、文学・文化、地理・地域、教育、心理を主軸とした人文諸科学における専門的な研究・教育を通じて、高度の研究能力を開発・育成するとともに、時代の要請に応えることができる、清新で高度な知識と能力を身につけている職業人を養成することを目的としています。こうした目的を達成するため、人文科学専攻と教育学専攻の2専攻を設けています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

国士館大学および人文科学研究科修士課程の教育研究上の目的を理解し、人文諸科学に対する旺盛なる研究心を有しているとともに、時代状況を適切に把握し、それに積極的に対応することによって、社会の進展に貢献できる豊かな学識を備えた職業人を目指す意欲を強く持った学生を求めています。また、リカレント教育や生涯学習の希望を持つ社会人も広く求めています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

人文科学研究科修士課程は、教育研究上の目的を達成するため、「主要科目」「関連科目」「共通関連科目」を設置しています。「主要科目」は、修士論文作成の指導を行う演習です。「関連科目」は、コース・研究分野別に設けている講義科目で、他のコースの学生も履修できます。「関連共通科目」は、コース・研究分野にとらわれず人文諸科学を広く対象とする講義科目で、全学生が履修できます。また、他の研究科の科目を履修できる単位互換制度を設け、さらに、人文科学専攻の日本史・東洋史コースと地理・地域論コースでは、他大学院との単位互換制度も設けています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人文科学研究科修士課程は、人文諸科学における高度な知識と能力を身につけている職業人を養成することを目的とし、所定の単位（30単位以上）を修得し、修士論文の審査および最終試験（口頭試問）の総合判定に合格した学生に「修士（人文科学）」の学位を授与しています。修士論文の審査基準は、人文諸科学のそれぞれの分野における学界の水準に達していることとしています。

一 人文科学専攻

教育研究上の目的

人文科学専攻修士課程は、国士館大学の建学の精神を基礎として、学問の母体としての人文科学を探索し、自由な発想を空理空論でない緻密な実証の手順によって研究する方法を身につけ、高度な専門知識と研究・実務能力を備えている職業人を養成することを目的としています。こうした目的を達成するため、日本史・東洋史学、文学・文化論、地理・地域論の3コース、日本史（考古学を含む）、東洋史、日本文学、東洋文学、人文地理、自然地理の6分野を設けています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

国士館大学および人文科学専攻修士課程の教育研究上の目的を理解し、3コースとも、それぞれの分野の研究を基盤としつつ学際的な研究を通じて、現代社会の要請に的確に 대응することができ、高度に専門的な業務に従事できる豊かな学識を備え、社会の発展に貢献する職業人を目指す意欲を強く持った学生をとくに求めています。また、生涯学習の希望を持つ社会人にも広く門戸を開いています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

人文科学専攻修士課程は、学界の水準に達する研究能力を身につけ、専門分野に関する実務をこなせるように配慮して、3コースごとに演習科目・講義科目を設けています。それとともに、広く学べるようにコースと分野を超えた「共通関連科目」を設置し、さらに、他研究科の授業も履修できるようにしています。日本史・東洋史コースと地理・地域論コースでは、学術提携・交流を進め、教育・研究の充実をめざして他大学院との単位互換制度を設けています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人文科学研究科修士課程のディプロマポリシーに従い、各コースでは次のような研究能力と豊かな学識を習得した学生に修士の学位を授与しています。日本史・東洋史コースでは、日本史学・中国史学を基軸として、その周辺のアジアの歴史を専門的に学んで、文献史学や考古学の手法を用いることのできる研究能力。文学・文化論コースでは、日本文学・中国文学を基軸として、その周辺地域の哲学・言語学・言語芸術学を分析できる研究能力。地理・地域論コースでは、人文地理学・自然地理学・地誌学を基軸として、現代社会・文化・自然問題にアプローチできる研究能力。

二 教育学専攻

教育研究上の目的

教育学専攻修士課程は、国士舘大学の建学の精神を基礎として、人格形成の学問としての教育学の研究能力、初等・中等教育の教員に求められる高度の専門性と実践的指導力、人間の意識と行動を科学的に理解する心理学の研究能力を高めることによって、教員や教育指導者および専門職業人を養成することを目的としています。こうした目的を達成するため、教育学・教職研究・心理学の3分野を設けています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミSSION・ポリシー）

国士舘大学および教育学専攻修士課程の教育研究上の目的を理解し、教育の実践に関わる諸分野にわたる専門的学識を身につけ、専門分野に関する創造的な研究能力を磨き、地域社会の教育と文化の発展に寄与し、国際社会の一員として貢献しようとする意欲を持った学生をとくに求めています。また、高度な専門的知識と、より実践的な指導力を身につけることを希望する現職教員ならびに現職経験者にも門戸を開いています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

教育学専攻修士課程は、人文科学専攻のようなコース制を採用せず、3分野ごとに次の様な科目を設け、カリキュラムを構成しています。「主要科目」は、教育学分野では、教育思想・教育史、比較教育文化論・教育制度論、教育社会学。教職研究分野では、教師論、教育臨床論、教育実践研究（国語・数学・理科・社会・保体・保育の各教科）。心理学分野では、計量行動学、発達心理学、教育心理学。「関連科目」は、教育学・教職研究の諸分野では、教育学研究法、日本ならびに西洋の教育史、教育メディア、授業研究、生涯教育など。心理学の諸分野では、生理、認知、人格、社会、健康、スポーツなど。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人文科学研究科修士課程のディプロマポリシーに従い、各分野では次のような学生に修士の学位を授与しています。教育学分野においては、教育に関わる原理的な知識を、教育におけるより実践的な分野に活かせる学生。教職研究分野においては、現職経験者も含め、より高度でかつ実践的な知識によって、教育研究の推進と教育実践の向上に資することのできる学生。心理学分野においては、人間の行動を科学的に理解しサポートする基礎的な研究能力を身につけ、教職現場等における諸問題に対応できる理論と実践力を備えた学生。

第二項 博士課程

教育研究上の目的

人文科学研究科博士課程は、国士舘大学の建学の精神を基礎として、歴史、文学・文化、地理・地域、教育、心理を主軸とした人文諸科学において、自立して研究活動を行う能力を習得している研究者、または高度に専門的な業務に従事するのに必要な研究能力を身につけている人材を養成することを目的としています。こうした目的を達成するため、人文科学専攻と教育学専攻の2専攻を設けています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

国士舘大学および人文科学研究科博士課程の教育研究上の目的を理解し、人文諸科学に対する旺盛なる研究心を有するとともに、時代状況を適切に把握して現代社会の要請に応えることをめざし、専門分野における高度な研究能力、およびその基礎となるべく豊かな学識を備えた自立した研究者または職業人を目指す強い意欲を持った学生をとくに求めています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

人文科学研究科博士課程は、教育研究上の目的を達成するため、「主要科目」「関連科目」を設置しています。「主要科目」は、在学中に作成する学位論文（博士論文）の研究指導を行う専修科目（演習 群）です。人文科学専攻に9科目、教育学専攻に8科目、それぞれ設けています。「関連科目」は、人文科学専攻にコース・研究分野別に設けている専門科目（講義科目）群で、教育学専攻の学生も履修できるようにしています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人文科学研究科博士課程は、自立した研究活動を行うことのできる研究者、または高度に専門的な業務に従事する研究能力を備えた人材を養成することを目的とし、所定の単位（20単位以上）を修得し、博士論文の審査および最終試験（公開口頭試問）の総合判定に合格した学生に「博士（人文科学）」の学位を授与しています。なお、博士論文を提出するにあたっては、博士候補者資格検定と事前審査の合格を条件としています。博士論文の審査基準は、人文諸科学のそれぞれの分野において新たな地平を開いて、研究水準の向上に貢献していることとしています。

一 人文科学専攻

教育研究上の目的

人文科学専攻博士課程は、国士舘大学の建学の精神を基礎として、学問の母体としての人文科学を探究し、自由な発想を空理空論でない緻密な実証の手順によって研究する方法を身につけ、自立した研究者または高度に専門的な業務に必要な研究能力を備えている人材を養成することを目的としています。こうした目的を達成するため、日本史・東洋史学、文学・文化論、地理・地域論の3コース、日本史（考古学を含む）、東洋史、日本文学、人文地理、自然地理の5分野を設けています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

国士舘大学および人文科学専攻博士課程の教育研究上の目的を理解し、3コースとも、それぞれの分野における研究を基盤としつつ学際的な研究を通じて、時代状況を適切に把握して現代社会の要請に応えることをめざし、高度に専門的な業務に従事できるような豊かな学識を備えた自立した研究者または職業人を目指す強い意欲を持った学生をとくに求めています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

人文科学専攻博士課程は、それぞれの学問分野において新たな地平を開いて、研究水準の向上に貢献できる研究能力を身につけさせることを目的として、3コース・6分野ごとに「主要科目」（演習科目）と「関連科目」（講義科目）を設けています。とりわけ、「主要科目」では博士学位請求論文の作成に向けて、学生の研究報告を重視する個別指導を徹底的に行っています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人文科学研究科博士課程のディプロマポリシーに従い、各コースでは次のような自立した研究者としての能力と豊かな学識を習得している学生に博士の学位を授与しています。日本史・東洋史コースでは、日本史学・中国史学とその周辺のアジアの歴史学を専門的に研究できる能力。文学・文化論コースでは、日本文学・中国文学とその周辺地域の文学・哲学・言語学を専門的に研究できる能力。地理・地域論コースでは、人文地理学・自然地理学・地誌学を専門的に研究できる能力。

二 教育学専攻

教育研究上の目的

教育学専攻博士課程は、国士舘大学の建学の精神を基礎として、人格形成の学問としての教育学の研究能力、初等・中等教育の教員に求められる高度の専門性とそれを活かせる実践的指導力、人間の意識と行動を科学的に理解する心理学の研究能力を高めることによって、現代社会の要請と実践的な課題に応える、自立した研究者を養成することを目的としています。こうした目的を達成するため、教育思想・教育史学・比較教育学・教職実践・教育臨床論・基礎心理学・心理学・応用心理学に関する科目を設けています。

三つのポリシー

① 入学者受入の方針（アドミSSION・ポリシー）

国士舘大学および教育学専攻博士課程の教育研究上の目的を理解し、それぞれの専門分野における創造的な研究能力を身につけ、地域社会の教育や文化の発展に寄与し、国際社会の一員として貢献することをめざし、高度に専門的な業務に従事できる豊かな学識を備えた自立した研究者または職業人を目指す強い意欲を持った学生をとくに求めています。

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

教育学専攻博士課程は、それぞれの学問分野において新たな地平を開いて、研究水準の向上に貢献できる研究能力を身につけさせること目的として、カリキュラムを構成しています。各分野にそれぞれ、修士課程の「主要科目」の専門性をさらに高めた、演習科目と講義科目を配置しています。とくに演習科目では、博士学位請求論文の作成に向けて、学生の研究報告を重視する個別指導を徹底的に行っています。

③ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人文科学研究科博士課程のディプロマポリシーに従い、各分野では次のような自立した研究者としての能力と豊かな学識を習得した学生に博士の学位を授与しています。教育学関係分野（教育思想・教育史学・比較教育学）では、教育に関わる諸学問の原理を研究できる能力。教職関係分野（教職実践・教育臨床論）では、教科ごとの教育実践を研究できる能力。心理学関係分野（基礎心理学・心理学・応用心理学）では、人間の行動を科学的に研究できる能力。

第三部

統計・現況

(一) 歴代三役と事務長

	昭 和 四 一	四 二	四 三	四 四	四 五	四 六	四 七	四 八	四 九	五 〇	五 一	五 二	五 三	五 四	五 五	五 六	五 七	五 八	五 九	六 〇	六 一	六 二	六 三	平 成 一
学 部 長	柴田徳次郎 (四三年まで総 長兼任)	宇野 哲人 (学部代表教授)	尾形 裕康 (四八年まで学 部代表教授)	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康	尾形 裕康
教務主任																								
学生主任																								
事 務 長	森 武次 (四九年まで主 任学生監)																							

	二 八	二 七	二 六	二 五	二 四	二 三	二 二	二 一	二 〇	一 九	一 八	一 七	一 六	一 五	一 四	一 三	一 二	一 一	一 〇	九	八	七	六	五	四	三	二
学 部 長	長谷川 均	石橋 崇雄																									
教務主任	村上 純一	細越 淳二	岡島 建																								
学生主任	中村 一夫	中野 紀明	中村 一夫																								
事 務 長																											

注 () 内は在任期間、数字は月または月・日を示す。

一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八		七	六	五	四		三	二
佐藤 義雄	橋本 太朗	毛利陽太郎		天野 隆雄								深川 長郎	四方 一弥					
	木阪 貴行			眞柴 弘宗								藤江 正通	原田 覺	(八) *藤江 正通	(七)			
中野 紀明	岩間 浩			梅原 保					島津 忍	木庭 清八			櫻本 喜徳	岡田 定雄				
佐々 博雄	須田 勉			保坂 智					阿部 昭				奥野 中彦	*奥野 中彦				
奥山 憲夫									石橋 崇雄								(四・二〇) 藤田 忠	(四・一九)
岡島 建				長谷川 均					野口 泰生				瀬戸 玲子	野口 泰生			長島 弘道	
藤森 馨				内村 嘉秀					(二・二三) 鷺野 正明	(二・二三)							(四・二〇) 巨勢 進	(四・一九)
村田 裕司	濱中 修	山本 昌一	福田 眞久	西條(小金)勉										伴 悦				

教育学専攻

(三) 現職教員一覧(平成二十八年五月現在)

村 上 純 一	細 越 淳 二	西 野 泰 広	助 川 晃 洋	桜 井 美 加	後 藤 貴 浩	栗 栖 淳	金 子 真 人	氏 名
教 授	教 授	教 授	教 授	教 授	教 授	教 授	教 授	身 分
平成八年 四月ゝ	平成一五年 四月ゝ	平成一四年 四月ゝ	平成二七年 四月ゝ	平成二四年 四月ゝ	平成二七年 四月ゝ	平成一一年 四月ゝ	平成二七年 四月ゝ	在 職 期 間
現教務主任 平成二〇年度 学外派遣研究員								備 考

羽 山 裕 子	郡 司 菜 津 美	武 藤 拓 也	堀 井 雅 道	鈴 木 裕 子	江 川 陽 介	氏 名
講 師	講 師	准 教 授	准 教 授	准 教 授	准 教 授	身 分
平成二六年 四月ゝ	平成二八年 四月ゝ	平成二十年 四月ゝ	平成二五年 四月ゝ	平成二十年 四月ゝ	平成二二年 四月ゝ	在 職 期 間
						備 考

倫理学専攻

氏名	身分	在職期間	備考
木阪貴行	教授	平成四年四月～	
塩谷政憲	教授	昭和五年四月～	
野津 悌	教授	平成一五年四月～	平成二二年度 学外派遣研究員
原田 覺	教授	平成二年四月～	
吉原裕一	講師	平成二四年四月～	

初等教育専攻

氏名	身分	在職期間	備考
小野瀬 倫也	教授	平成二三年四月～	
正田 良	教授	平成一七年四月～	
鈴木 江理子	教授	平成二二年四月～	

氏名	身分	在職期間	備考
菱刈晃夫	教授	平成一三年四月～	平成二八年度 学外派遣研究員
松田俊哉	教授	平成一〇年四月～	
山室和也	教授	平成一九年四月～	
河野 寛	准教授	平成二五年四月～	
佐々木 浩	准教授	平成二八年四月～	
志澤 彰	准教授	平成三年四月～	
千葉 昇	准教授	平成二一年四月～	
青木聡子	講師	平成二四年四月～	

考古・日本史学専攻

氏名	身分	在職期間	備考
秋山哲雄	教授	平成一九年四月～	平成二四年度 学外派遣研究員
勝田政治	教授	平成七年四月～	
佐々博雄	教授	昭和五一年四月～	
保坂智	教授	昭和六二年四月～	
眞保昌弘	准教授	平成二八年四月～	
仁藤智子	准教授	平成二六年四月～	

東洋史学専攻

氏名	身分	在職期間	備考
石橋崇雄	教授	昭和六一年四月～	
奥山憲夫	教授	平成元年四月～	
川又正智	教授	昭和五一年四月～	

地理・環境専攻

氏名	身分	在職期間	備考
津田資久	教授	平成一七年四月～	平成二三年度 学外派遣研究員
太田麻衣子	講師	平成二五年四月～	

氏名	身分	在職期間	備考
磯谷達宏	教授	平成一〇年四月～	
内田順文	教授	平成三年四月～	
岡島建	教授	平成五年四月～	
加藤幸治	教授	平成一三年四月～	平成二七年度 学外派遣研究員
長谷川均	教授	昭和六三年四月～	現学部長 平成二五年度 学外派遣研究員
宮地忠幸	准教授	平成二〇年四月～	

中国語・中国文学専攻

氏名	身分	在職期間	備考
藤田梨那	教授	平成一二年 四月～	
藤森 馨	教授	平成一〇年 四月～	
鷺野 正明	教授	昭和五八年 四月～	
松野 敏之	准教授	平成二三年 四月～	

日本文学・文化専攻

氏名	身分	在職期間	備考
田代博司	教授	平成元年 四月～	
田代 真	教授	平成一一年 四月～	平成二八年度 学外派遣研究員
中島 礼子	教授	昭和五七年 四月～	
中村 一夫	教授	平成一七年 四月～	現学生主任

氏名	身分	在職期間	備考
濱 中 修	教授	平成一二年 四月～	平成二一年度 学外派遣研究員
細 貝 宗 弘	教授	昭和五九年 四月～	
村 田 裕 司	教授	平成五年 四月～	
平 浩 一	准教授	平成二年 四月～	
松 野 彩 講 師		平成二七年 四月～	

(四) 現職職員一覧

氏名	身分	在職期間	備考
鳥飼利行	課長	平成二三年 七月～	
相田勉	課長補佐 庶務担当	平成四年 四月～ 平成一五年 三月 平成二年 一〇月～	
苦米地示路	課長補佐 教務担当	平成五年 四月～ 平成一四年 三月 平成二年 七月～	
田房妙子	学生係任	平成二五年 七月～	
福地みどり	学生係任	平成二年 四月～	
福田顕広	学生係	平成一九年 一〇月～	
松山みずき	学生係	平成二六年 四月～	
片柳太郎	学生係	平成二六年 四月～	

(五) 担当学生係一覧(平成十九年度)

平成24	平成23	平成22	平成21	平成20	平成19	年度
4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	学年
伊 福 相 相 敷 田 田 田	福 伊 相 相 田 敷 田 田	伊 福 相 相 敷 田 田 田	福 福 小 小 田 井 畑 畑	福 福 小 小 井 田 畑 畑	藤 福 小 小 田 井 畑 畑	教 育
伊 福 相 相 敷 田 田 田	福 伊 相 相 田 敷 田 田	伊 福 相 相 敷 田 田 田	福 福 小 小 田 井 畑 畑	福 福 小 小 井 田 畑 畑	藤 福 小 小 田 井 畑 畑	倫 理
佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	初 等
福 苜 藤 藤 米 地 地 田 田	苜 福 藤 藤 米 地 地 田 田	福 苜 藤 藤 米 地 地 田 田	山 山 藤 藤 口 口・ 福 福 地 地 田 田	前 山 藤 藤 田 口 田 田	山 前 筒 筒 口 田 井 井	考 古
福 苜 藤 藤 米 地 地 田 田	苜 福 藤 藤 米 地 地 田 田	福 苜 藤 藤 米 地 地 田 田	山 山 藤 藤 口 口・ 福 福 地 地 田 田	前 山 藤 藤 田 口 田 田	山 前 小 小 口 田 畑 畑	東 洋 史
福 苜 藤 藤 米 地 地 田 田	苜 福 藤 藤 米 地 地 田 田	福 苜 藤 藤 米 地 地 田 田	山 山 藤 藤 口 口 田 田	前 山 藤 藤 田 口 田 田	山 前 筒 筒 口 田 井 井	地 理
伊 福 山 山 敷 田 松 松	福 伊 山 山 田 敷 松 松	伊 福 山 山 敷 田 松 松	福 福 佐 佐 藤 藤・ 豊 豊 田 井 田 田	福 福 佐 佐 藤 藤・ 豊 豊 井 田 田 田	藤 福 佐 佐 藤 藤・ 豊 豊 田 井 田 田	中 文
伊 福 山 山 敷 田 松 松	福 伊 山 山 田 敷 松 松	伊 福 山 山 敷 田 松 松	福 福 佐 佐 藤 藤・ 豊 豊 田 井 田 田	福 福 佐 佐 藤 藤・ 豊 豊 井 田 田 田	藤 福 佐 佐 藤 藤・ 豊 豊 田 井 田 田	日 文

平成28	平成27	平成26	平成25	年 度
4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	学 年
福 松 松 福 田 山 山 田	松 福 相 相 山 田 田 田	伊 松 相 福 敷 山 田 田	福 伊 相 相 田 敷 田 田	教 育
福 松 松 福 田 山 山 田	松 福 相 相 山 田 田 田	伊 松 相 福 敷 山 田 田	福 伊 相 相 田 敷 田 田	倫 理
福 松 松 福 田 山 山 田	松 福 相 相 山 田 田 田	伊 松 相 福 敷 山 田 田	佐 佐 佐 佐 藤 藤 藤 藤	初 等
福 福 片 片 地 地 柳 柳	苦 福 田 田 米 地 地 房 房	福 苦 片 田 米 地 地 柳 房	苦 福 藤 藤 米 地 地 田 田	考 古
福 福 片 片 地 地 柳 柳	苦 福 田 田 米 地 地 房 房	福 苦 片 田 米 地 地 柳 房	苦 福 藤 藤 米 地 地 田 田	東 洋 史
福 福 片 片 地 地 柳 柳	苦 福 田 田 米 地 地 房 房	福 苦 片 田 米 地 地 柳 房	苦 福 藤 藤 米 地 地 田 田	地 理
田 田 田 田 房 房 房 房	松 福 片 片 山 田 柳 柳	伊 松 相 福 敷 山 田 田	福 伊 山 山 田 敷 松 松	中 文
田 田 田 田 房 房 房 房	松 福 片 片 山 田 柳 柳	伊 松 相 福 敷 山 田 田	福 伊 山 山 田 敷 松 松	日 文

(六) 学 生 数

1 入学生数

年度	学科	教 育				史学地理				文学科			合 計
	専攻	教 育 学	倫 理 学	初 等 教 育	計	国 史 学	東 洋 史 学	地 理 学	計	中 国 文 学	国 国 文 学 語	計	
昭和41		64	5		69	19	12	36	67	14	47	61	197
42		82	25		107	88	26	67	181	22	77	99	387
43		118	35		153	116	41	84	241	18	73	91	485
44		103	41	44	188	97	41	81	219	13	93	106	513
45		69	37	51	157	79	39	61	179	13	56	69	405
46		46	14	67	127	78	32	49	159	9	48	57	343
47		69	24	89	182	95	38	65	198	10	48	58	438
48		73	34	107	214	78	40	57	175	6	76	82	471
49		24	10	37	71	21	18	22	61	5	20	25	157
50		84	21	118	223	95	34	45	174	20	95	115	512
51		106	31	96	233	122	51	75	248	17	113	130	611
52		110	40	87	237	88	34	62	184	25	103	128	549
53		99	65	96	260	106	41	59	206	34	96	130	596
54		82	53	95	230	115	34	50	199	21	93	114	543
55		84	49	86	219	98	45	50	193	28	101	129	541
56		98	58	82	238	95	55	75	225	49	143	192	655
57		115	51	89	255	103	33	62	198	26	117	143	596
58		122	48	100	270	127	38	87	252	34	130	164	686
59		78	27	87	192	88	35	46	169	38	109	147	508
60		111	35	100	246	84	26	44	154	34	120	154	554
61		105	55	82	242	113	62	74	249	43	112	155	646
62		100	39	79	218	101	57	81	239	37	103	140	597
63		100	40	77	217	100	60	80	240	39	101	140	597
平成元		95	36	72	203	115	54	78	247	35	96	131	581
2		93	35	67	195	98	52	77	227	34	95	129	551
3		82	37	54	173	56	49	67	172	37	82	119	464

年度	学科 専攻	教 育				史学地理				文学科			合 計
		教 育 学	倫 理 学	初 等 教 育	計	国 史 学	東 洋 史 学	地 理 学	計	中 国 文 学	国 国 文 学 語	計	
4		66	40	53	159	93	52	80	225	40	92	132	516
5		37	34	52	123	105	52	28	215	32	72	104	442
6		63	34	46	143	76	42	72	190	33	80	113	446
7		62	38	47	147	79	49	73	201	38	86	124	472
8		63	39	50	152	79	47	79	205	39	89	128	485
9		58	36	50	144	90	52	62	204	34	82	116	464
10		63	38	51	152	92	50	77	219	36	84	120	491
11		57	33	48	138	75	44	73	192	30	86	116	446
12		77	36	45	158	76	43	72	191	36	86	122	471
13		54	36	51	141	86	50	74	210	33	81	114	465
14		59	38	50	147	85	61	71	217	40	83	123	487
15		56	37	52	145	100	57	82	239	36	100	136	520

年度	学科 専攻	教 育				史学地理				文学科			合 計
		教 育 学	倫 理 学	初 等 教 育	計	日 考 本 史 古 学	東 洋 史 学	地 理 ・ 環 境	計	中 国 文 学 ・ 中 国 語	文 日 本 文 学 ・ 文 化	計	
平成16		69	38	44	151	87	43	75	205	39	105	144	500
17		64	46	48	158	87	46	70	203	38	68	106	467
18		54	27	56	137	83	51	67	201	31	87	118	456
19		61	39	44	144	87	54	75	216	41	87	128	488
20		81	35	48	164	88	49	76	213	25	89	114	491
21		47	37	41	125	100	54	74	228	35	95	130	483
22		48	39	66	153	66	37	83	186	36	76	112	451
23		62	33	32	127	83	48	67	198	36	80	116	441
24		59	33	50	142	78	32	59	169	29	79	108	419
25		54	51	38	143	68	42	74	184	36	78	114	441
26		59	27	43	129	76	38	60	174	31	71	102	405
27		61	25	53	139	75	44	75	194	28	87	115	448
28		68	17	51	136	109	31	62	202	18	87	105	443

2 在籍学生数（5月1日現在）

年度	学年	教 育	倫 理	初 等	国 史	東洋史	地 理	中 文 (漢学)	国 国	在 籍 数	
										計	総 数
昭和 44	4	42	6		12	6	25	13	22	126	
	3	52	15		65	12	50	13	46	253	男女
	2	106	29		100	34	64	12	64	409	956
	1	108	45	45	94	38	79	13	97	519	351 1,307
45	4	56	16		61	13	47	12	43	248	
	3	94	27		77	25	53	12	59	347	男女
	2	81	37	44	76	24	64	11	76	413	1,009
	1	71	42	55	78	39	63	14	67	429	428 1,437
46	4	86	24		77	24	51	10	54	326	
	3	70	23	38	69	14	54	5	62	335	男女
	2	63	30	49	68	28	50	13	58	359	948
	1	72	23	74	82	39	50	10	53	403	475 1,423
47	4	66	24	34	66	18	63	5	61	337	
	3	56	19	46	60	22	42	7	54	306	男女
	2	52	15	68	76	29	43	8	42	333	878
	1	71	22	85	98	38	66	13	50	442	541 1,419
48	4	57	20	44	57	21	39	6	52	296	
	3	49	16	67	63	19	35	7	41	297	男女
	2	63	17	79	84	25	58	10	42	378	917
	1	86	40	118	107	39	74	7	81	547	601 1,518
49	4	47	16	68	64	19	36	7	38	295	
	3	60	16	68	74	23	52	8	37	338	男女
	2	74	29	98	78	31	66	6	66	448	761
	1	28	11	39	23	20	22	5	25	173	493 1,254
50	4	63	17	75	75	21	54	8	38	351	
	3	68	24	96	71	27	56	5	60	407	男女
	2	26	9	38	24	18	23	5	22	165	877
	1	84	22	113	96	36	49	21	98	519	565 1,442
51	4	69	24	99	71	30	60	5	59	417	
	3	21	8	37	21	18	17	3	24	149	男女
	2	77	21	108	88	29	46	19	82	470	1,028
	1	114	36	96	130	55	78	17	115	641	649 1,677
52	4	20	9	37	26	20	25	3	27	167	
	3	67	10	98	77	25	38	17	75	407	男女
	2	104	31	96	129	32	66	18	105	581	1,092
	1	118	43	90	90	49	75	25	100	590	653 1,745
53	4	68	11	97	79	26	38	17	80	416	
	3	97	24	90	103	27	65	17	97	520	男女
	2	101	46	88	90	38	56	25	99	543	1,363
	1	107	69	97	115	46	70	39	108	651	767 2,130
54	4	98	23	90	108	31	67	18	102	537	
	3	95	33	84	69	30	51	24	89	475	男女
	2	100	67	95	129	41	60	33	98	621	1,459
	1	84	57	94	120	36	53	21	99	564	738 2,197
55	4	93	33	87	77	31	51	26	93	491	
	3	89	55	94	101	36	49	25	86	535	男女
	2	88	56	95	116	34	45	23	96	553	1,444
	1	85	52	86	101	48	56	29	104	561	696 2,140

年度	学年	教 育	倫 理	初 等	国 史	東洋史	地 理	中 文	国 国	在 籍 数	
										計	総 数
56	4	94	61	98	114	36	51	32	102	588	男女 1,616 685 2,301
	3	82	47	92	99	28	32	21	83	484	
	2	87	52	86	99	44	56	28	97	549	
	1	101	58	82	97	59	82	52	149	680	
57	4	82	52	93	107	30	36	24	89	513	男女 1,582 660 2,242
	3	81	48	84	78	38	49	24	80	482	
	2	92	53	82	91	49	70	47	141	625	
	1	117	52	87	111	36	66	30	123	622	
58	4	81	48	85	85	40	51	26	86	502	男女 1,706 662 2,368
	3	89	48	75	83	45	61	37	129	567	
	2	112	54	90	107	32	67	33	121	616	
	1	123	47	100	127	39	86	33	128	683	
59	4	88	47	75	87	48	66	40	137	588	男女 1,729 583 2,312
	3	102	44	87	93	29	58	23	98	534	
	2	123	48	96	119	35	83	33	124	661	
	1	80	39	88	92	37	47	30	116	529	
60	4	101	44	88	101	37	65	24	105	565	男女 1,730 529 2,259
	3	110	39	95	105	31	75	30	111	596	
	2	84	40	88	97	34	52	29	115	539	
	1	111	35	100	85	27	44	36	121	559	
61	4	109	39	94	112	33	79	30	111	607	男女 1,793 502 2,295
	3	72	38	87	81	28	45	21	99	471	
	2	112	32	93	82	27	40	36	119	541	
	1	106	55	83	121	65	79	48	119	676	
62	4	74	38	86	83	29	51	23	106	490	男女 1,778 462 2,240
	3	99	30	91	60	21	34	31	113	476	
	2	101	54	79	131	65	79	46	110	665	
	1	101	39	80	103	58	82	37	106	606	
63	4	100	31	90	65	20	40	35	115	496	男女 1,791 506 2,297
	3	92	47	77	97	46	61	33	96	549	
	2	104	40	77	122	66	93	44	103	649	
	1	102	40	77	101	61	80	40	102	603	
平成 1	4	100	49	79	107	47	66	33	99	580	男女 1,822 523 2,345
	3	93	35	76	73	35	63	29	95	499	
	2	107	41	76	132	82	94	46	102	680	
	1	96	39	72	115	53	80	35	96	586	
2	4	100	33	82	91	37	71	33	106	553	男女 1,741 564 2,305
	3	89	35	72	98	58	72	37	92	553	
	2	112	43	73	129	63	83	38	106	647	
	1	93	35	67	98	52	77	35	95	552	
3	4	94	36	72	116	65	86	40	100	609	男女 1,635 597 2,232
	3	95	36	69	113	49	78	34	100	574	
	2	107	39	69	99	55	78	36	95	578	
	1	82	37	55	58	50	68	37	84	471	
4	4	101	38	68	122	58	105	38	106	636	男女 1,561 630 2,191
	3	91	33	68	90	45	72	34	83	516	
	2	98	41	51	64	56	70	39	99	518	
	1	66	41	56	93	53	80	40	92	521	

年度	学年	教 育	倫 理	初 等	国 史	東洋史	地 理	中 文	国 国	在 籍 数	
										計	総 数
5	4	98	39	73	95	51	91	36	96	579	男女 1,395 643 2,038
	3	87	35	51	55	44	65	36	89	462	
	2	70	45	55	99	60	82	45	95	551	
	1	37	35	52	105	54	59	32	72	446	
6	4	92	44	54	67	48	81	39	94	519	男女 1,278 655 1,933
	3	66	36	50	92	48	74	44	94	504	
	2	38	33	53	107	59	64	32	76	462	
	1	63	35	46	76	42	72	33	81	448	
7	4	67	36	51	98	50	83	46	96	527	男女 1,229 666 1,895
	3	37	25	53	101	56	51	31	74	428	
	2	65	38	44	80	44	79	33	84	467	
	1	62	38	48	79	49	73	38	86	473	
8	4	45	48	52	113	55	65	37	88	503	男女 1,108 701 1,869
	3	63	33	42	72	38	71	31	81	431	
	2	66	38	46	85	53	74	39	88	489	
	1	63	39	50	79	47	81	39	89	487	
9	4	65	40	43	75	41	78	32	81	455	男女 1,127 741 1,868
	3	64	32	43	78	50	67	34	85	453	
	2	61	38	50	83	46	85	45	94	502	
	1	58	36	48	89	52	61	34	80	458	
10	4	66	35	43	79	53	72	34	86	468	男女 1,097 792 1,889
	3	59	32	47	76	42	76	40	90	462	
	2	60	38	48	93	54	65	32	82	472	
	1	62	38	50	92	50	75	36	84	487	
11	4	61	39	47	83	46	82	41	91	490	男女 1,102 761 1,863
	3	56	29	47	79	46	54	27	79	417	
	2	68	43	51	99	57	74	40	79	511	
	1	57	33	48	75	44	73	30	85	445	
12	4	61	30	47	81	50	64	35	81	449	男女 1,108 751 1,859
	3	61	37	52	85	49	64	38	88	474	
	2	62	34	49	79	48	75	30	87	464	
	1	77	36	44	77	44	72	36	86	472	
13	4	63	40	52	90	54	70	40	93	502	男女 1,092 777 1,869
	3	55	26	46	66	38	62	27	84	404	
	2	77	37	48	85	47	72	37	97	500	
	1	54	36	51	85	50	74	33	80	463	
14	4	56	31	46	65	43	71	32	87	431	男女 1,109 721 1,830
	3	69	28	45	71	35	59	27	85	419	
	2	60	34	52	93	50	76	40	87	492	
	1	59	38	50	85	61	71	41	83	488	
15	4	69	29	45	75	42	66	31	85	442	男女 1,143 745 1,888
	3	48	29	47	76	40	63	32	71	406	
	2	65	34	57	89	66	76	45	88	520	
	1	56	38	51	100	57	82	36	100	520	
16	4	47	32	47	82	43	71	35	72	429	男女 1,173 737 1,910
	3	54	26	57	63	55	61	39	70	425	
	2	62	39	53	110	64	85	37	106	556	
	1	69	38	44	87	43	75	39	105	500	

年度	学年	教 育	倫 理	初 等	国 史	東洋史	地 理	中 文	国 国	在 籍 数	
										計	総 数
17	4	56	27	57	67	59	79	41	76	462	男女 1,240 701 1,941
	3	53	34	54	99	53	74	31	89	487	
	2	81	32	46	90	48	79	40	108	524	
	1	64	46	49	87	46	70	38	68	468	
18	4	52	39	56	107	65	83	35	95	532	男女 1,267 655 1,922
	3	74	26	46	75	38	62	26	93	440	
	2	67	45	55	88	48	76	45	71	495	
	1	54	26	56	83	51	67	31	87	455	
19	4	80	31	48	84	50	66	32	99	490	男女 1,253 614 1,867
	3	60	32	51	75	35	61	34	62	410	
	2	58	26	58	85	55	70	37	92	481	
	1	60	38	43	89	54	76	41	85	486	
20	4	64	37	52	82	51	68	35	73	462	男女 1,260 625 1,885
	3	52	16	56	69	42	52	31	81	399	
	2	65	43	48	93	59	89	38	95	530	
	1	81	35	48	88	50	77	27	88	494	
21	4	53	27	56	75	66	57	35	87	456	男女 1,248 657 1,905
	3	54	27	46	82	39	69	32	76	425	
	2	85	36	47	92	61	88	30	103	542	
	1	47	39	40	99	54	74	34	95	482	
22	4	58	30	45	97	59	83	35	86	493	男女 1,216 701 1,917
	3	72	22	47	80	45	70	24	89	449	
	2	55	41	42	107	51	84	35	103	518	
	1	48	38	66	67	42	82	37	77	457	
23	4	75	28	50	94	59	89	32	103	530	男女 1,159 729 1,888
	3	46	25	36	93	43	67	27	78	415	
	2	51	47	69	72	43	86	39	93	500	
	1	62	34	31	84	48	67	36	81	443	
24	4	49	31	38	103	51	89	37	89	487	男女 1,111 684 1,795
	3	47	31	63	60	30	62	27	79	399	
	2	61	43	30	92	55	80	37	90	488	
	1	60	34	49	78	32	60	29	79	421	
25	4	52	38	64	75	43	79	38	85	474	男女 1,105 672 1,777
	3	50	30	27	83	45	61	25	80	401	
	2	68	32	53	81	32	68	35	86	455	
	1	55	52	38	69	44	75	36	78	447	
26	4	57	36	34	89	54	78	38	92	478	男女 1,104 631 1,735
	3	59	25	46	71	29	53	26	70	379	
	2	58	46	45	74	37	84	34	85	463	
	1	59	31	43	76	42	60	31	73	415	
27	4	59	31	49	81	42	65	31	7	435	男女 1,139 584 1,723
	3	47	31	40	69	36	62	28	73	386	
	2	65	37	47	75	37	75	35	74	445	
	1	60	28	53	77	46	75	28	90	457	
28	4	49	35	42	76	49	78	35	80	444	男女 1,148 610 1,758
	3	58	29	39	70	33	57	24	66	376	
	2	65	28	55	77	44	86	37	91	483	
	1	68	19	51	111	35	64	18	89	455	

注) 昭和51年度に漢学から中国文学に専攻名を変更。

平成16年度入学生から国史学から考古・日本史学に、地理学から地理・環境に、中国文学から中国語・中国文学に、国語国文学から日本文学・文化に専攻名を変更。

3 卒業生数

年度	専攻 学科	教 育				史学地理				文学科			合 計
		教 育 学	倫 理 学	初 等 教 育	計	国 史 学	東 洋 史 学	地 理 学	計	中国 文学	国国 文学語	計	
昭和42										3	7	10	10
43										2	4	6	6
44		39	5		44	7	5	24	36	13	21	34	114
45		51	15		66	53	12	43	108	12	39	51	225
46		82	23		105	69	19	42 (1)	130	10	52	62	297
47		63	23	34	120	63	13	55	131	5	58	63	314
48		50 (1)	18	43	111	57	21	38	116	6	51	57	284
49		43	15	66	124	61	17	33	111	7	35	42	277
50		58	17	71	146	74	19	48	141	8	33	41	328
51		63	21	96	180	66	28	52	146	5	47	52	378
52		19	9	38	66	19	14	16	49	3	26	29	144
53		62	8	95	165	67	22	33	122	15	66	81	368
54		93	23	86	202	97	29	62	188	15	88	103	493
55		87	26	80	193	66	28	51	145	16	70	86	424
56		91	54	95	240	104	33	47	184	29	92	121	545
57		80	52	91	223	95	28	33	156	21	79	100	479
58		78	47	85	210	78	34	45	157	20	73	93	460
59		85	44	74	203	75	37	55	167	36	114	150	520
60		98	41	87	226	88	29	59	176	22	97	119	521
61		105	37	93	235	104	31	70	205	27	100	127	567
62		71	34	85	190	76	26	42	144	19	94	113	447
63		89	28	86	203	50	18	31	99	34	105	139	441
平成元		89	47	73	209	83	45	54	182	28	85	113	504
2		90	32	81	203	67	29	54	150	29	94	123	476
3		87	32		191	98	53	52	203	33	89	122	516
4		90	30	63	183	111	51	84	246	34	89	123	552
5		92	30	68	190	79	44	69	192	30	84	114	496

年度	学科 専攻	教 育				史学地理				文学科			合 計
		教 育 学	倫 理 学	初 等 教育	計	国 史 学	東 洋 史 学	地 理 学	計	中 国 文学	国 国 文 学 語	計	
平成 6		89	36	53	178	58	44	69	171	36	90	126	475
7		62	23	51	136	89	50	74	213	43	87	130	479
8		37	26	51	114	101	52	49	202	31	76	107	423
9		52	33	43	138	72	37	71	180	30	76	106	424
10		63	26	43	132	69	49	64	182	29	83	112	426
11		52	29	47	132	78	40	68	186	32	86	118	436
12		57	20	47	124	76	43	56	175	32	73	105	404
13		60	28	52	140	88	48	57	193	32	86	118	451
14		54	23	46	123	58	33	61	152	26	84	110	385
15		66	22	45	133	67	37	51	155	25	82	107	395
16		43	27	46	116	74	37	50	161	33	63	96	373
17		53	14	55	122	56	44	63	163	33	67	100	385

年度	学科 専攻	教 育				史学地理				文学科			合 計
		教 育 学	倫 理 学	初 等 教育	計	日 考 本 史 古 学	東 洋 史 学	地 理 ・ 環 境	計	中 国 文学 ・ 中国 語	文 日 本 文学 ・ 文化	計	
18		46	26	54	126	91	51	72	214	27	87	114	454
19		74	23	46	143	73	29	56	158	25	84	109	410
20		62	23	50	135	72	22	57	151	29	66	95	381
21		48	20	55	123	58	31	39	128	30	75	105	356
22		47	23	42	112	78	36	59	173	24	65	89	374
23		70	19	48	137	76	41	62	179	21	86	107	423
24		44	19	36	99	85	32	66	183	24	78	102	384
25		44	26	54	124	59	26	57	142	24	67	91	357
26		55	27	31	113	76	33	55	164	27	80	107	384
27		55	24	45	124	68	24	47	139	21	62	83	346

(七) 教員資格取得者数

年度	小 学 校		幼稚園	小 計	中 学 校				小 計
	1 種	2 種			社 会	社・保	保 体	国 語	
昭和44					48	6	3	30	87
45					122	4		41	167
46					162	5	3	52	222
47	34		32	66	148	9	18	60	235
48	44		43	87	109	6	9	38	162
49	69		66	135	117	8	8	46	179
50	71		70	141	122	10	8	31	171
51	96		83	179	174	8	11	46	239
52	38		35	73	47	4	5	24	80
53	95		76	171	131	19	4	65	219
54	86		50	136	188	33	7	77	305
55	80		56	136	45	21	2	24	94
56	94		65	159	192	45	5	国語 86 国保 1	329
57	90		74	164	182	34	4	80	301
58	84		76	160	149	22	4	76	251
59	86		74	160	156	31	2	97	286
60	87		66	153	188	31	1	77	297
61	93		58	151	175	37	4	88	304
62	85		50	135	114	37		46	197
63	84		53	139	80	35		46	161
平成 1	73		61	134	108	17	15	43	183
2	79		64	143	90	27	5	47	169
3	72		68	140	67	17	10	39	133
4	63		50	113	68	17	10	30	125
5	63		44	108	39	1	29	32	101
6	49		44	94	53	1	16	26	96
7	50		27	77	30	11	11	26	78
8	50		45	95	25		8	16	49
9	42		40	82	36		13	20	69
10	42		38	80	42		13	23	78
11	44		41	85	40		14	27	81
12	41		40	81	40		11	20	71
13	51		48	99	38		22	15	75
14	45		43	88	27		12	14	53
15	44		41	85	63		15	16	94
16	43		35	78	27	1	10	12	50
17	52		51	103	37	1	27	16	81
18	53		46	99	42		24	21	87
19	44		43	87	61		38	17	116
20	48		46	94	57		32	27	116
21	49		44	93	25		28	26	79
22	39		31	70	37		25	19	81
23	43		27	70	46		35	16	97
24	36		19	55	36		11	16	63
25	50		16	66	28		14	10	52
26	26		7	33	29		15	15	59
27	43		22	65	32		17	20	69

注 社・保、国・保は複数免許の取得者数。

年度	高等学 校						小 計	合 計				
	社 会	社・保	保 体	国 語	国・書	書 道						
昭和44	50	11		15	16		92	179				
45	122	3		22	18		165	367				
46	163	5		16	37	1	222	475				
47	145	10	5	36	22		218	519				
48	109	6	3	31	6		155	404				
49	116	8	4	21	20	1	170	484				
50	115	10	5	6	24	社書 5書道	165	477				
51	167	8	7	30	11	3	226	644				
52	46	4	4	16	9		79	232				
53	129	20	2	国語	国保	36		216	606			
				28	1							
54	185	34	2	国語	国保	39	社書	書道	302	743		
				40	1		1					
55	45	21	2	国語	国保	6			86	316		
				10	2							
56	199	45		国語	国保	31			330	818		
				54	1							
57	183	34	1	国語	国保	22			294	759		
				53	1							
58	149	22	2	46	24		244	655				
59	165	31	2	51	53		302	748				
60	188	31		47	31	1	298	748				
61	179	37	4	59	38		317	772				
62	115	37		25	27		204	536				
63	81	35		25	24	1	166	466				
平成 1	108	17	15	24	21		185	502				
2	96	27	5	26	21		175	487				
3	76	17	10	24	15		142	415				
4	66	17	11	18	12		124	362				
	地歴	公民	社会	地公	地保	公保	保体	国語	国書	書道	小 計	合 計
平成 5	43	5	2				30	28	14		122	331
6	38	15		1		2	16	24	9		105	294
7	45	12			1		11	26	6		101	256
8	37	4					9	26	2	3	81	225
9	40	13					13	28	6	6	106	257
10	46	9					13	34	4	4	110	268
11	35	5					14	37	5	5	101	267
12	43	5					11	30	3	4	96	248
13	53	12					22	30	3	4	124	298
14	32	12					12	25		2	83	224
15	74	17				1	15	28		6	141	320
16	42	11					10	19		2	84	212
17	41	19			1	1	27	29		1	119	303
年度	地 歴	公 民	保 体	国 語	書 道	小 計	養 護	合 計				
平成18	50	14	24	30	5	123		309				
19	65	34	38	22	3	162		365				
20	55	31	32	31	9	158		368				
21	27	8	28	28	5	96		268				
22	43	11	25	23	4	106		257				
23	57	11	35	19	6	128	7	302				
24	47	11	11	21	5	95	8	221				
25	34	13	14	10	4	75	17	210				
26	41	10	15	17	6	89	8	189				
27	39	9	17	23	9	97	11	242				

注 社・保、国・書、国保、地・公、地・保、公・保はいずれも複数免許の取得者数。

(八) 諸資格取得者数

年度	博 学 物 館 学 芸 員					学 校 図 書 館 校 司 書					学校図書館 司書教諭	社 会 教 育 主 事					測量士補
学科名	教	史	文	☆	計	教	史	文	☆	計		教	史	文	☆	計	地理学のみ
昭和44	13	5	2	0	20	11	9	7	47	74	39	22	5	0	0	27	0
45	18	28	0	1	47	11	9	0	2	22	24	37	27	7	7	78	1
46	7	19	2	0	28	0	3	11	37	51	14	55	19	6	6	86	0
47	21	14	0	0	35	13	1	3	32	49	35	39	18	0	0	57	0
48	14	7	0	0	21	17	3	0	31	51	19	25	11	0	0	36	3
49	4	16	2	0	22	16	9	0	30	55	不明	39	22	0	0	61	0
50	6	22	1	4	33	11	2	0	11	24	不明	59	36	0	0	95	1
51	1	48	1	3	53	7	8	1	5	21	65	29	49	3	3	84	1
52	2	13	1	9	25	1	5	3	5	14	24	10	18	0	0	28	0
53	18	23	0	1	42	10	8	15	0	33	49	38	21	0	0	59	2
54	10	55	4	14	83	14	5	19	7	45	72	71	56	6	6	139	2
55	12	30	5	2	49	5	8	26	5	44	58	45	31	13	13	102	11
56	7	29	1	0	37	19	8	3	0	30	64	39	29	8	8	84	6
57	4	40	1	1	46	7	3	7	0	17	53	28	32	0	0	60	7
58	35	7	0	2	44	7	5	12	2	26	54	31	23	7	7	68	22
59	3	23	6	5	37	12	0	33	1	46	74	52	18	14	14	98	15
60	7	61	1	0	69	16	8	26	0	50	90	73	19	0	0	92	7
61	3	34	7	1	45	7	5	29	0	41	64	39	10	0	0	49	5
62	0	44	3	3	50	1	8	23	0	32	27	44	2	5	5	56	6
63	0	28	0	0	28	0	7	21	0	28	35	47	3	2	2	54	12
平成1	0	46	1	1	48	2	9	22	1	34	64	68	1	1	1	71	10
2	1	23	0	0	24	0	6	15	0	21	50	39	2	0	0	41	17
3	2	45	0	0	47	6	4	16	0	26	20	26	3	0	0	29	15
4	0	39	2	0	41	3	8	19	0	30	7	8	2	0	0	10	26
5	3	52	5	1	61	1	4	17	0	22	18	22	22	0	0	24	28
6	1	49	1	1	52	2	4	20	0	26	不明	17	17	1	1	36	37
7	3	49	2	1	55	1	7	30	5	43	不明	7	7	0	0	14	37
8	2	41	1	2	46	2	16	18	1	37	5	7	0	2	0	9	23
9	2	33	4	3	42	3	15	13	0	31	27	20	2	0	2	24	33
10	0	39	1	0	40	1	6	19	0	26	17	4	0	0	0	4	30
11	37	18	2	0	57	2	3	27	2	34	17	15	0	0	0	15	26
12	0	33	0	0	33	4	17	22	4	47	32	23	3	0	1	27	16
13	0	42	0	1	43	3	11	34	2	50	45	22	7	0	0	29	16
14	1	33	5	5	44	1	14	28	1	44	34	11	1	0	0	12	18
15	1	33	2	3	39	2	15	26	1	44	44	17	0	0	0	17	9
16	0	48	1	0	49	1	20	13	0	34	35	13	1	0	2	16	16
17	0	35	0	3	38	4	15	16	0	35	35	3	0	2	1	6	9
18	0	44	2	0	46	4	9	22	1	36	44	4	1	0	0	5	
19	0	22	4	4	30	0	4	23	2	29	58	9	2	0	1	12	
20	0	31	0	0	31	0	5	12	0	17	71	16	1	0	0	17	
21	0	18	1	0	19	0	5	11	2	18	38	10	2	0	0	12	
22	0	40	2	0	42	1	6	7	2	16	37	17	2	1	0	20	
23	0	33	0	0	33	8	7	13	0	28	35	9	1	0	0	10	
24	0	32	2	0	34	0	5	18	0	23	23	3	0	0	0	3	
25	1	29	0	0	30	1	7	22	0	30	18	3	4	0	0	7	
26	1	30	0	0	31	3	9	24	0	36	13	7	2	0	0	9	
27	0	12	0	0	12	0	2	13	0	15	17	2	1	1	0	4	

注…☆は科目等履修生的人数

(九) 紀要目次

1 人文学会紀要（国士舘大学文学部人文学会）

第一号（昭和44年3月）

（論説）

尾形裕康
明治以前の社会教育
理性の限界

——道德の混乱に当面して——

村田正志
南朝関係 五条家文書の研究

大橋與一
ロシア平原開発過程におけるロシア

——スラヴ人の動向と森林・河川の影響——

高田真治
東洋に於ける政治哲学の二源流

——孟荀二子の所論を中心として——

岩井良雄
「我襴・香二・師可・毛我」考

——「か」の清濁に関連して——

（研究報告）

黒田省三
対馬古文書保存についての私見

黒板昌夫
対馬に於ける遺跡保存についての私見

村田正志
宗氏歴代画像目録
（学事彙報）

第二号（昭和45年3月）

（論説）

前野喜代治
吉田松陰留魂録の研究

木村伊勢雄
現代文明の危機と新しい宗教

——シュヴァイツァー、ラッセル、トインビー
の思想を中心にして——

藤木邦彦
奈良・平安朝における皇親賜姓について

曾我部静雄
上計吏と朝集使

富田芳郎
台湾の鎮郷集落型の成立と分布について

原田種成
貞観政要の研究補遺

大窪梅子
万葉の寄物抒情歌

——植物を主として——

（研究報告）（当文学部関係職員、本学年度刊行の著書報告を
対象、以下同断）

林 秀一

石川本太郎著『原始儒教の道德思想』

横山貞裕
曾我部静雄著『律令を中心とした日中関係史
の研究』

藤井秀夫

（学事彙報）
北方騎馬民族の足跡を探る

第三号（昭和46年3月）

（論説）

小林高記

少年院における処遇と矯正教育

馬場文翁

道徳教育の必要

森 純吾

教育権についての考察

黒田省三

中世対馬の知行形態と朝鮮貿易権

—「宗家判物写」の研究—

横山貞裕

唐代の馬政

山本正一

東京内湾特に東海地区における海苔養殖

市川本太郎

隋の大儒文中子の思想

春名好重

古代・中世の漢詩・和歌の懷紙

（研究報告）

小久保崇明

岩井良雄著『日本語法史』

—奈良・平安時代編—

酒井忠夫

多賀秋五郎編著『近世東アジア教育史研究』

野地潤家

西尾邦夫著『国語教育と話しことばの創造』

—劇の学習—

（別冊）

藤井秀夫

北方騎馬民族の足跡を探る（二）

（学事彙報）

第四号（昭和47年3月）

（論説）

尾形裕康

明治の学制と新島襄

—五年の「学制」を中心として—

大類 純

仏教における戦争観と平等観の倫理思想

小倉竹治

我国における 学校職業指導の発達過程

黒板昌夫

大和郡山城とその城下町試論

小岩井弘光

宋代就糧禁軍について

岩田孝三

板谷峠における上杉（米沢）藩グラシ—

（Glacis）の政治地理的研究

山崎道夫

崎門学派における近思録の尊重と若林強斎の

近思録十四目講義

（研究報告）

浅井得一

内田寛一著『近世農村の人口地理的研究』

市川本太郎

春名好重著『近衛家伝来国宝大手鑑解説』

竹内金治郎

若浜汐子（大窪梅子）著『万葉旅情』を読む

水原 一

今成元昭著『平家物語流伝考』

（学事彙報）

第五号（昭和48年3月）

（論説）

下地恵常

近代日本の教育における市民性の陶冶

渡辺寿伝治

共同性の構造

—特に成員性について—

森 純吾

幼児教育の問題

大川 清

東国国分寺造営時における造瓦組織の研究

―瓦磚文字を中心として―

浅沼 操

鎧潟周縁地域における田地割替慣行の地理学的研究

今成元昭

「聖」・「聖人」・「上人」の称について

―古代の仏教説話集から―

稲垣敏夫

ロシア語代名詞の分類

(研究報告)

仲 新

尾形裕康著『新版日本教育通史』

高橋昌郎

大久保利謙編『森有礼全集』

中川茂夫

大川清著『日本の古代瓦窯』

林 友春

多賀秋五郎著『近代中国教育史資料 清末編』

編』

佐藤定義

岩井良雄著『日本語法史 鎌倉時代編』

藤木邦彦

春名好重著『寛永の三筆』

(学事彙報)

第 六 号 (昭和49年3月)

(論説)

前田喜代治

横井小楠の学問と思想

木村伊勢雄

現代とルソーの宗教思想

岡本堅次

律令制初期の災害と政治

―慶雲期を中心として―

山本正一

明治初期諏訪湖開墾計画の歴史地理学的研究

鈴木由太郎

「焦氏易林」校注釈義

峯村三郎

再び韻鏡の内外転に就て

(研究報告)

石田加都雄

尾形裕康著『学制成立史の研究』

五十嵐正一

多賀秋五郎著『近代中国教育史資料 民国編上』

太田三郎

板垣直子著『夏目漱石―伝記と文字』

萩谷 朴

春名好重解説『野辺のみどり』

萩谷 朴

春名好重解説『野辺のみどり』

(学事彙報)

第 七 号 (昭和50年3月)

(論説)

松本良彦

価値観と論理的相対主義

小倉竹治

明治の哲学館事件

中山八郎

唐代伝奇小説「虬髯客伝」における史実と虚構

構

大橋與一

北氷洋におけるロシア人の探検航海

西尾邦夫

なさけ考

(研究報告)

藤井貞文

大久保利謙著『岩倉具視』

大村興道

多賀秋五郎著『近代中国教育史資料 民国編中』

横山貞裕

光島督著『聖武天皇と正倉院御物』

竹内常行

富田芳郎著『台湾地形発達史の研究』

岩田孝三

大橋與一著『帝政ロシアのシベリア開発と東立進出過程』

三浦康広

春名好重著『書の話』『日本書道史』

(学事彙報)

第八号 (昭和51年3月)

(論説)

小林高記

出席停止とその周辺の考察

大類 純

現代中国思想から観たフォイエールバッハ哲学批判

木下三郎

理科教育の目標についての二・三の考察(主として水栽培の問題との関連について)

藤木邦彦

平安時代における近陵・近墓の被葬者について

横山貞裕

魏と邪馬台国との関係について

山本正一

岩手県沢内村湯田町畑村の集落再編移転

市川本太郎

日本律令の刑罰と中国思想

板垣直子

安部公房の文学

(研究報告)

小野一成

尾形裕康著『こけむしろ』

尾形裕康博士業績目録・随想

米原正義

村田正志編『出雲国造家文書』

吉田 寅

島根県教育委員会編『出雲意字六社文書』
多賀秋五郎著『近代中国教育史資料 民国編下』

寺岡龍含

市川本太郎著『孟子之綜合的研究』

佐藤定義

岩井良雄著『日本語法史江戸時代編』

井村君江

板垣直子著『文学概論』

(学事彙報)

第九号 (昭和52年3月)

(論説)

渡辺寿伝治

共同性の構造

佐々博雄

熊本国権党と朝鮮における新聞事業

中山八郎

唐代伝奇小説「虬髯客伝」における史実と虚構(二)

大崎 晃

成立発展期の北洋母船式捕鯨

山崎道夫

若林強斎の近思録十四目講義

大窪梅子

玉藻考

大照 完

子どもの形式的推論の可能性について

(研究報告)

森 郁夫

大川清著『下野古代黨業遺跡』

山崎純一

多賀秋五郎著『近代中国教育史資料 人民中国編』

(学事彙報)

第十号 (昭和53年3月)

(論説)

前野喜代治 本居宣長

—その教育的側面—

松本良彦

現在の日本における哲学的論理学

大志万準治

人間学序説

—総合的人間学をめざして—

戸田有二

地方官衙跡考

小岩井弘光

北宋末・南宋の就糧禁軍について

—宋代兵制史研究の一環として—

山本正一

集落移転再編

許勢常安

上海中国書局印行と清議報記載の「佳人之奇遇」を比較して

—特にその名訳と誤植訂正— 第二編

(研究報告)

小林健三

前野喜代治著『佐久間象山再考』

—その人と思と—

高橋昌郎

大久保利謙著『明六社考』

上坂信男

今井卓爾博士著『物語文学史の研究全三冊』

の紹介をかねて

国東文麿

今成元昭編『宗教と文学—仏教文学の世界』

(学事彙報)

第十一号 (昭和54年3月)

(論説)

天野隆雄

女子教育に対する一考察

—性役割の習得をめぐる—

渡辺寿伝治

共同性の構造

村田正志

相楽家蔵結城文書の概要及び解説

小岩井弘光

南宋の軍資庫について

浅井得一

昭和二〇年人口調査の分析

巨勢進

『誌経』国風篇における叙事詩的詩篇の考察

山本昌一

別れた妻に送る手紙ノート

(研究報告)

渡部学

尾形裕康博士著『近代日本における千字文型教科書の研究』

—とくに「累系千字文型」概念の成立をめぐる—

辻彦三郎

春名好重著『書道』及び『和紙百話』

山田昭全

今成元昭著『仏教文学の世界』を読む

(学事彙報)

第十二号 (昭和55年3月)

(論説)

尾形裕康

明治初期等教育の試業

大類 純

フォーヘル博士の講ずる東洋学研究に対する

ライデン大学への貢献(上)

池田睦彦

日本女子体操競技界の動向と問題点

佐々博雄

清仏戦争と上海東洋学館の創立

中山八郎

唐寅の生い立ち

大崎 晃

明治期における神奈川県足柄郡上郡寄村弥勒

寺区共有林野利用の諸形態

廣野行甫

十翼制作の基本的姿勢について

(研究報告)

細貝保夫

春名好重著『光悦』

山本信吉

村田正志著『相楽家蔵結城文書の概要及び解説』

説

鎌田 正

巨勢進著『元田東野』を読む

(学事彙報)

第十三号(昭和56年3月)

(論説)

神辺靖光

明治初期における藩立中学校

大類 純

フォーヘル博士の講ずる東洋学研究に対する

ライデン大学の貢献(下)

大照 完

小学校図形教育の歴史的考察

―その一、明治大正期―

多賀宗隼

彈偽褒真抄について

藤田 忠

中国古代の祭祀

―「禋于六宗」について―

草野正名

図書館思想の文化的漂流とアレクサンドリア

図書館

磯辺武雄

―文化主義による社会的考察を基調にして―

J・S・ブルーナーの教授理論に関する一考察

察

―教育方法の問題提起を中心として―

(研究報告)

江上 綏

春名好重著『古筆大辞典』

小倉竹治

吉野正男著『幼児の遊びと児童の学習』

―「保育と授業の関連を考える」―

岩沢愿彦

村田正志著『古文書鑑―株式と筆蹟』

村田正志

多賀宗隼著『慈円の研究』

(学事彙報)

第十四号(昭和57年3月)

(論説)

小塚三郎

学区問題の研究視点

永島輝雄

ハルトマンの凝集理論

谷比呂子

わらべうた考

―主として音域・節奏について―

佐藤三郎

明治時代前期における中国人による日本研究書について

小岩井弘光

北宋剰員制管見

大崎 晃

—宋代兵制史研究の一環として—
静岡県焼津における産業資本形成期の水産金融

志賀一郎

湛甘泉の「詩」について

春名好重

藤原兼実の書

(研究報告)

藤木邦彦

岡本堅次著『浮浪と盗賊』

藤木邦彦

戸田有二編『福島県安達町油王田遺跡発掘調査報告書』

(学事彙報)

第十五号 (昭和58年3月)

(論説)

四方一泓

中学校教則大綱と東京府中学校規則
—教則・教科用図書表の成立経緯を中心として—

渡辺寿伝治

共同性の構造 (四)

木下三郎

理科教育の内容についての二・三の考察
移民会社と地方政党

佐々博雄

—熊本国権党の植民事業を中心として—

藤田 忠

田峻考 (t' ien tsün)
焼津における鯉漁業の資本形成過程と漁撈組織

大崎 晃

—大戦前における或る経営事例についての考察—

酒井森之介

草野正名

酒井森之介

草野正名

(研究報告)

多賀宗隼

春名好重解説『陽明墨宝』

今江広道

村田正志校訂『花園天皇久宸記』第一卷

北村文治

大川清著『栃木県宇都宮市水道山瓦屋』『下野古代文字瓦譜』

野古代文字瓦譜

戸田有二篇

『迎畑遺跡発掘調査報告』『玉貫古窯跡発掘調査報告』『大森腰遺跡発掘調査報告書』『稲荷森遺跡発掘調査報告書』

報告書

『稲荷森遺跡発掘調査報告書』

報告書

『稲荷森遺跡発掘調査報告書』

岡本堅次

国士館大学文学部国史研究室『頸城郡上板倉郷越後国桶海村後藤家文書目録』

倉郷越後国桶海村後藤家文書目録

(学事彙報)

第十六号 (昭和59年3月)

(論説)

土持法一

第一次米国教育使節団の成立経緯について

―占領期におけるアメリカの対日教育政策の研究(その一)―

松本良彦

歴史的転換期の倫理

―カントの平和論を顧みつつ―

小倉竹治

井上円了

―人とその教育思想―

大川 清

造東大寺司造瓦所の実態

前田勝太郎

清代の広東における土客対抗について

長島 弘

農村の生活環境整備と集落

―茨城県における田園都市建設事業を事例として―

鷺野正明

寿序における帰有光の詩解釈

―引詩による称誉と載道の両立―

佐々木克衛

『ささめごと』の作品としての位相について

―初案本と再治本をめぐって―

磯辺武雄

教育過程としてのコミュニケーション・システムに関する考察

(研究報告)

米原正義

村田正志著作集 第一卷『増補南北朝史論』

第二卷『続南北朝史論』

(学事彙報)

第十七号(昭和60年3月)

(論説)

天野隆雄

女子生徒の友情

長峰 毅

レーガン大統領の教育政策の展開

藤江正通

顔とペルソナ、そして自画像

―Rembrandt への道―

中野紀明

障害児の体育(その一)

北村文治

記紀のカバネ史料批判

佐藤 学

明代南京における鋪戸の役とその改革

―「行」をめぐる諸問題―

大崎 晃

静岡県焼津における産業資本形成期の鰹漁業

漁撈組織

―大戦前の或る経営事例からの考察―

杉森正弥

水滸伝の周辺

―一九八四年夏に―

川合道雄

梁川をめぐる人人

―「回覧集」を中心に―

(研究報告)

中佐古勇

草野正名編著『最新図書館学辞典』を中心に

して

山根幸夫

佐藤三郎著『近代日中交渉史の研究』

(学事彙報)

第十八号（昭和61年3月）

（論説）

神辺靖光 藩学から明治の中学校への連続性に関する考

察

多賀秋五郎 白川琴水の生涯とその教育思想

大類 純 中国現代修正主義の表象「三つの世界」論の

帰結

北村季夫 語彙指導の諸問題

—実践への提言—

前田勝太郎 広東の辛亥革命

長島弘道 農村資源の管理に関する予備的考察

鷺野正明 黄景仁とその詩

—月の詩を中心にして—

川合道雄 梁川をめぐる人人（二）

—「回覧集」を中心に—

（史料紹介）

村田正志 後崇光院御筆九十首抄模本の出現

（研究報告）

加賀栄治 志賀一朗博士著『湛甘泉と王陽明の関係』を

読んで

（学事彙報）

第十九号（昭和62年3月）

（論説）

小塚三郎 青年学校の成立経緯

四方一弥 官立大阪中学校「教授要旨」に関する一考察

永島輝雄 弁証法の起源

梅原 保 理科教育における教科書の役割と活用法

戸田有二 古代石背地方古期屋瓦考

藤田 忠 『春秋』に於ける禘祭・禘祭

—「左伝」の解釈を中心として—

川合道雄 梁川をめぐる人人（三）

—「回覧集」を中心に—

草野正名 「図書館の自由に関する宣言」採択の頃

—埼玉県立図書館を中心にしての考察—

野口泰生 Salt Spray: Its Directional Stress on Plants on

the Island of Oahu, Hawaii

（研究報告）

永沢幸七 天野隆雄著『女子生徒の教育』

四方一弥 黄尊三者 さねとうけいしゅう佐藤三郎訳

『清国人日本留学日記』

（学事彙報）

第二十号（昭和63年3月）

（論説）

高橋次義

旧制大学における女子入学に関する一研究

(学事彙報)
(編集後記)

藤江正通

—入学資格の分析を中心として—
永井荷風稿「小説作法」をめぐる

(文学部教科課程英訳一覧表)

佐々博雄

—文学回想ととも—
教育勅語成立期における在野思想の一考察

第二十一号(平成元年3月)

(論説)

て—

太田晃舜

インドシナにおける土地所有変遷過程の政治的地理的考察

天野隆雄

性意識と女子教育

—特に農地改革からのアプローチ—

大類 純

—大学生の意識を中心に見た—
革新的リアリズムの創造

志賀一朗

湛甘泉と「論語」について

梅原 保

—小林多喜二論—
これからの理科教育が目指すもの

細貝保夫

四体心経の筆者

阿部 昭

近世における民衆の休日慣行とその論理

磯辺武雄

松江藩の郷校について

藤田 忠

漢代“零祭”についての一考察

—新史料「郷校取調巡郷日記十五」(桃文之助)を中心として—

廣野行甫

論語における「學」の字について

石橋崇雄

「戸部成語」(『清文備考』所収)満州語索引(A-G)

西尾邦夫

叙事詩から悲劇へ

—『六部成語』総合索引への一環として—

佐藤義雄

Observation of Evaporation by
Unconventional Methods in Hawaii: Small

岡田定雄

発育、発達期の児童のスポーツ競技について

(研究報告)

Cans and Piche Evaporimeters.

折原茂樹

—全国少年少女リレー競技大会—
子供の時間評価の発達

白川部達夫

阿部昭著『近世村落の構造と農家経営』

—Second Estimation Point 法の予備的検討—

(学事彙報)

(文学部創設二十周年記念祝賀会報告の記)

第二十二号 (平成2年3月)

廣野行甫 指導者の要件

—巻頭言—

(論説)

田村 茂

学童集団疎開に関する史料紹介

—箱根温泉旅館施設組合の会議録—

高橋次義

国立公文書館・東京都公文書館所蔵文書にみる戦前国士館の歴史(一)

—所蔵状況及び中学校・専門学校の歴史—

永島輝雄

N・ハルトマンの新・形而上学について

中野紀明

調整力の開発に関する基礎研究

北村文治

古代国郡制創始小考

小岩井弘光

宋代の老兵について

大崎 晃

大戦後における焼津鰹漁業経営体の変容と昭和漁業株式会社

和漁業株式会社

鷺野正明

埴有光の「文」理論と古文の修辭法

—『文章指南』よりみた—

山本昌一

秋江『黒髪』ノート

戸田一雄

明治期の図書館員の養成について

(研究報告)

宮坂 覚

川合道雄著『綱島梁川とその周辺』

宮口侗勉

『益子町史 第五卷 窯業編』

(学事彙報)

第二十三号 (平成3年3月)

(論説)

井原正純

明治初期、初等教育機関の施策と動向

—とくに東北三県(青森・岩手・宮城)を中心に—

心に—

小宮山潔子

経験と教育

—経験への準備教育としての Eltern Briefe を例に—

例に—

阿部 昭

中小河川流域の歴史的景観と近世の開発

—近世絵図により復原法を用いて—

奥山憲夫

明代軍士の行糧について

内村嘉秀

訓釈・王弼「老子指略」(一)

西條 勉

播磨国風土記のトポノミー(附資料)

—文字とことばと土地の名—

藤江正通

『山中入饒舌』随聞

長谷川均

サンゴ礁地形判読のための LANDSAT カラー合成画像の検討

合成画像の検討

岩間 浩

海外在住日本人中学生への異文化影響

—その単一文化性克服の要因—

佐藤義雄

Probleme des Föderalismus im

Bildungswesen der Bundesrepublik

Deutschland

—Strukturbericht der Bundesregierung—

(研究報告)

佐藤 信

北村文治著『大化改新の基礎的研究』

(学事彙報)

第二十五号 (平成5年3月)

(論説)

四方一弥

中学校教則大綱期における学校図書に関する一考察
 —中学校教則大綱準拠中学校規則を中心として—

梅原 保

学校教育における創造性の育成と理科教育

奥野中彦

奥羽征討と鎌倉幕府の確立

奥山憲夫

明末における軍の給与支給上の弊害について

巨勢 進

鄂倫春族について(二)

—主としてその現状—

細貝宗弘

新出の大澤家聞書

瀬戸玲子

産業大分類別就業者構成比の変化

—一九六五—一九八五年の関東地方を中心に
 三角ダイアグラムを利用した地図作成による
 考察—

谷田部康幸

美術の鑑賞とその望ましいありかた

木阪貴行

実践理性と業的感情

前田耕司

オーストラリアにおける言語的・文化的多様

性の方向と多文化教育の展望

(個人研究業績一覧表)

(学事彙報)

第二十六号 (平成6年3月)

(論説)

天野隆雄

敗戦直後の総合制
 —富山県下の高校における—

阿部 昭

享保の日光社参における公儀御用の編成

藤田 忠

明帝の礼制改革について

—“三朝の礼”の成立過程—

西尾邦夫

語り物から劇の世界へ

磯辺武雄

新史料・松江藩儒桃節山『日誌(南学)』について

—解題と本文史料—

内田順文

比喩的認識と場所イメージ

志澤 彰

児童の歌唱能力に関する一考察

島津 忍

新しい学力観と『数学的な考え方』に関する一考察

湯川次義

女性への大学の門戸開放に関する史的考察

—大正期における大学首脳の高高等教育意見と

開放経過―

(研究報告)

(個人研究業績一覧表)

(学事彙報)

第二十七号(平成7年3月)

(論説)

天野隆雄

木庭清八

佐々博雄

小岩井弘光

鷺野正明

山本昌一

野口泰生

中野紀明

富山県下の高校における七・三教育

自治的活動の育成と学校教育

―特別活動の観点から―

日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について

―熊本国権党系集団の動向を中心として―

宋代哲宋・徽宗兩朝における廂軍の推移について

「貞女」の発見

―婦有光の「貞女論」と節婦・烈婦伝―

秋江『黒髪』ノート(二)

気象官署所在都市の温暖化と気温の永年変化

における最暖・最寒値

学校体育における「スポーツ教育の一貫性」

を考える

―スポーツ不得意者との関係

佐藤義雄

ドイツの統一と学校制度の変化
―教育調査報告―

(個人研究業績一覧表)

(学事彙報)

第二十八号(平成8年3月)

(論説)

眞柴弘宗

奥野中彦

西條 勉

長谷川均

石橋崇雄

松田俊哉

岡田定雄

折原茂樹

(個人研究業績一覧表)

(学事彙報)

異本即身成仏義について

棟梁制武士団の成立と展開

倭の五王と古代王権の系譜学

―天皇の系譜と物語について―

分光反射測定のスランゴ礁環境調査への応用

六部「成語類」(『同文彙集』所収)

満州語索引(兵部・刑部・工部)

―『六部成語』総合索引への一環として―

ウィーン幻想派

―その背景と5人の画家―

防衛体力に関する研究

―質問紙法による分析―

時間評価と歩行テンポについて

別冊第一号（平成元年3月）

（論説）

四方一潑

教育令期中学校の概念及び学科目の定律経緯
に関する一考察

—『文部省日誌』を中心として—

北村季夫

作文指導小論

—人間性を育てる指導をめざして—

大川 清

益子の汽車土瓶

—滝沢窯出土品を中心として—

石橋崇雄

『han i araha manja gisun i buleku bithe』（御

製清文鑑）』考

—特にその語彙解釈中の出典をめぐって—

太田晃舜

海洋境界帯南海の性格

—島嶼の実態と海の領有化—

巨勢 進

天山南路の伝承と文物（一）

磯辺武雄

学制前における松江藩の教育近代化について

藤江正通

美学談議の逸脱

（編集後記）

別冊第二号（平成2年3月）

（論説）

藤田 忠

漢・高祖の“靈星祠”について

木庭清八

特別活動の一考察

磯辺武雄

—特別活動の歴史的経過を通して—
新史料「儒学校日記」（桃山節）について

佐々博雄

国民自由党の結成と九州国権派の動向
—帝国議会開設期における政界合同をめぐつて—

藤江正通

慈雲尊者讃

折原茂樹

時間評価能力と表象能力について
—子どもと大人の比較—

第二十九号（平成8年10月）

（論説）

四方一潑

中学校教則大綱期における中学校・高等女学校・師範学校教授要旨に関する一考察

—群馬県中学校との関係において

井原政純

旧神奈川県郷学校と寄場組合村との関連について

磯辺武雄

松江藩儒桃白鹿『要記第三』について

—解題・本文史料—

小宮山潔子

「臨床の知」と保育学

—保育の知とは何か—

阿部 昭

日光領における寛政改革期の農村支配と民衆運動

藤田 忠

前漢時代の巫者について

―七巫を手掛りとして―

内村嘉秀

中林梧竹の書翰

―風神の美について―

西尾邦夫

愛と死の道行

―近松の女、梅川と小女郎―

瀬戸玲子

台地の灌漑用水路と1965年～1990年

の農業土地利用の変化

―山梨県徳島堰、群馬県大正用水・群馬用

水、栃木県那須用水地域について―

原田 覺

シャーキヤチヨクデン著『如意(の)妙高

〔山〕』和訳(Ⅰ)

(個人研究業績一覧表)

(学事彙報)

(文学部組織および新旧カリキュラムの英語呼称)

第三十号(平成9年10月)

(論説)

湯川次義

一九二〇年代の帝国議会における女子高等教育

育論議

―請願を中心として―

岩間 浩

新教育連盟の源流を訪ねて

―神智学教育組合と新教育連盟―

須田 勉

「寺院併合令」と東国の諸寺

奥山憲夫

洪武朝の絹・銅銭等の賜給について

河内利治

『広芸舟双掛』〈骨〉字術語考

福田眞久

言語本質観

岡島 建

―言語次元説の提唱―

島津 忍

近代日本の内陸水運に関する研究の動向と課題

木阪貴行

算数科における児童の学習意欲と問題解決能力に関する研究

責任論序説

―道德主体の限界と可能性―

学校の個人情報と作文教育

―自殺した生徒に関する作文開示問題を事例として―

村上純一

(研究報告)

(学事彙報)

(個人研究業績一覧表)

第三十一号(平成10年10月)

(論説)

井原政純

鹿児島藩の学制改革と静岡藩からの影響

―(一) 静岡藩のお貸人を中心に―

佐々博雄

(史料紹介) 外務省所蔵の内務省文書について

—『社会主義者沿革及現況』『社会主義者沿革第一（第一版）』『社会主義者沿革第二（第一版）』を中心に——

戸田有二
百済漢城時代及び熊津時代の寺院跡と屋瓦
後漢時代の巫者について

藤田 忠
中林梧竹の書論

—書作理念と『書話』再構成の構想—

西尾邦夫

近松のドラマツルギー

藤江正通

（研究ノート）柳田国男研究への序章

内田順文

中部地方における都市のイメージについて

—観光パンフレットを用いた場所イメージの

定量的分析の試み—

長島弘道

首都圏における堆肥の生産と利用

志澤 彰

文部省唱歌による「海のうた メドレー」

梅原 保

理科教育の日米比較研究（2）

—小学校理科教科書を中心として—

折原茂樹

時間展望と時間不安・TypeA・生活テンポに

ついて

—心理的時間と精神健康—

（学事彙報）

（個人研究業績一覧表）

第三十二号（平成11年12月）

（論説）

天野隆雄

登校拒否に関する一考察

—学校に行けない子どもへの対処法を中心に—

磯辺武雄

学制公布期の公学校に関する一考察

阿部 昭

日光山領における国産国益政策の展開

須田 勉

—日光御殿役所の幕末の動きを中心に—

小岩井弘光

『宋史』列女伝の記載について

藤森 馨

—朱娥伝を中心として—

『新儀式』『伊勢大神遷宮事』条成立に関する

覚書

「煤煙」の成立まで—序説

山本昌一

衛星画像からみた中国ホルチン沙地の風成地形

長谷川均

長野県中信高原・霧ヶ峰の気候環境

—第二次大戦中の山岳測候所資料と最近の現

野口泰生

地観測から—

絵画制作考「序論」

体育授業における評価活用法の考察

松田俊哉

内なる他者と理性

中野紀明

（学事彙報）

木阪貴行

（学事彙報）

(個人研究業績一覧表)

第三十三号 (平成12年12月)

(論説)

奥野中彦

中世国家軍制の形成

戸田有二

百済瓦窯考

— 泗泚時代を中心として —

奥山憲夫

洪武朝の月糧について

福家俊幸

『紫式部日記』公任

藤田梨那

郭沫若と朝鮮

— 「狼群中一隻白羊」を中心に —

磯谷達宏

暖温帯域の常緑広葉自然林における種組成の地域性

— ギャップ・ダイナミクスに対応した群落複合の比較から —

認知地図にもとづく「伊豆」の範囲について

内田順文

三宅 清

小学校国語科教材の国語学的分析

— 「大造じいさんとがん」の場合 —

小幡勝彦

最近6年間の本学学生の体力と「新体力テスト」について

原田 覺

チベット仏教史年表 (西暦1027～1086年)

栗栖 淳

デュルケイムの教育論についての一考察

— 「感情」sentimentへの言及を中心として

佐藤義雄

旧東ドイツの地方都市における教育行政

(研究報告)

(学事彙報)

(個人研究業績一覧表)

第三十四号 (平成13年12月)

(論説)

勝田政治

大久保利通と台湾出兵

鷺野正明

『文章指南』は帰有光の著作に非ず

目野由希

— 呂祖謙『古文関鍵』との比較から —

岡島 建

明治「史伝」と鷗外「史伝」

— 明治20～30年代を中心に —

長島弘道

近代の商工地図とその利用

石橋崇雄

— 神奈川県の例を中心に —

志澤 彰

日本における堆肥の供給と需要の動向

長島弘道

『音漢清文鑑』(巻2) 満州語索引

石橋崇雄

— 君類・擢用類・考選類・詞訟類 —

志澤 彰

ハンガリーの「音楽小学校」の音楽教育

松田俊哉

— 日本・オーストリア・ドイツの音楽教育と比較して —

比較して —

松田俊哉

絵画制作考 I・モノクローム

1・19世紀以前のモノクローム絵画

(1) 西洋絵画

木阪貴行 「私」の形式的なかたち

―「構想力」による「超越論的」な「形象的
総合」について―(1)

鈴木康明

死別の悲しみへの援助

村上純一

近年の情動研究の成果と書きことばの教育

―生活綴方教育の意義をとらえ返すための基
礎研究―

(学事彙報)

(個人研究業績一覧表)

第三十五号(平成14年12月)

(論説)

保坂 智

近世初期の義民

小岩井弘光

南宋潭州飛虎軍成立をめぐる

内村嘉秀

中林梧竹の書論

―「心藝」論について―

田代 真

変身の誘惑

―ポール・ボウルズにおける変身のセクシャ
リティー―

内田順文

映画作品のなかの場所

―小津安二郎『東京物語』を読む―

長谷川均

国士舘大学地理学教室におけるGIS教室に
ついて

玉木一徳

インドネシアのパンチャシラ・コーポラティ
ズム

菱刈晃夫

―スハルト開発政治体制の遺訓―
ルターにおける苦悩と人間形成

岡田定雄

―「臨床教育学」の古典として―

発育期(小学生)の全国競技大会の調査研究
について

折原茂樹

―子供の発期の形態、体力と記録の関係―

予想時間評価に関する一基礎的研究

―文章課題を用いて―

(書評)

(学事彙報)

(個人研究業績一覧表)

第三十六号(平成15年12月)

(論説)

三宅 清

終止形に接続する「なり」の意味用法

―上代と中古との相違について―

桑山浩然

室町時代における將軍第行幸の研究

―永徳元年の足利義満第行幸―

藤田 忠

巫蠱の事件について

―「前漢の巫者」の補訂―

山本昌一 「煤煙ノート」(二)

目野由希 露伴「史伝」の戦中戦後

―松下英麿の軌跡―

藤田梨那 郭沫若の「天狗」論

磯谷達宏 植生景觀の概念と人里における植生景觀研究の意義

の意義

野口泰生 都心と郊外との気温差として表現された東京のヒートアイランド現象：寒冬・暖冬、冷

夏・暑夏年の比較

夏・暑夏年の比較

戸田有二 百済における鎧瓦の三技法について

松田俊哉 絵画制作考 I・モノクローム(2)

島津 忍 算数科の授業における学習まよめの重要性に

関する研究

野津 悌 『ニコマコス倫理学』における倫理学の意義

―アリストテレス倫理学研究のための序説―

細越淳二 運動技能水準下位児に対する教師の関わりにつ

いての事例的分析

栗栖 淳 デュルケイムの教育論についての一考察

―大学の意義への言及を中心として―

第三十七号(平成17年3月)

(論説)

磯辺武雄

中島礼子

目野由希

藤森 馨

加藤幸治

岡島 建

川又正智

石橋崇雄

須田 勉

菱刈晃夫

松田俊哉

岩間 浩

学制期学校役員に関する一考察

国木田独歩における女性表象と女性に関する

言説

「少年史伝叢書」叢書構成について

―「史伝」概念の生成―

地域学習と学校図書館

―学校図書館における地域の調べ学習の具体

的事例―

仙台市の情報サービス業における「地元企

業」

近代都市大垣の発達と河川水運の利用

馬の家畜化をめぐる研究動向

『攘紅旗幟』光緒34(一九〇八)年付け檔案

について

―清朝史を再構築するための清末期基礎研究

の一環として―

多賀城様式瓦の成立とその意義

基礎づけ主義の教育思想再考

―教師にできないこと、できること―

絵画制作考 I・モノクローム

スイス新教育運動の展開

(書評)

(学事彙報)

(個人研究業績一覧表)

原田 覺

—J・ピアジェ等スイス心理学者・教育学者
と新教育連盟—
チベットの仏教史年表（西暦一〇八七—一一四
六年）

鈴木康明

死別の悲しみへの援助Ⅱ
—死別体験者のためのセルフヘルプグループ
の原理と課題—

（学事彙報）

（個人研究業績一覧表）

第三十八号（平成17年12月）

（論説）

津田資久

鷺野正明

王肅「論秘書表」の基礎的研究

「寒花」と「如蘭」

—帰有光の文学と「花」—

中島礼子

国木田独歩における民友社的なものをめぐ
って

—〈家庭〉〈夫婦〉の視座から—

中村一夫

内田順文

中山家本源氏物語の表現
食材と食習慣の違いからみた日本国内の地域
性について

長島弘道

JAS法による有機農産物認証制度の現状と
課題

勝田政治

大久保利通とビスマルク

正田 良

菱刈晃夫 教職指向性に関する質問紙の開発

小宮山潔子

政策問題としての保育総合施設

木阪貴行

私の形式的な「形」（5）

原田 覺

チベット仏教史年表（西暦一一四七—一二〇
六年）

細越淳二

大学生が抱く体育授業のイメージについての
研究

（学事彙報）

第三十九号（平成十九年三月）

（論説）

奥山憲夫

元朝の馬羊牛賜与

野口泰生

北西太平洋の海面水温変動… ENSOおよび

戸田友二

高緯度循環指数との関連

志澤 彰

百済の鎧瓦製作技法についてⅢ—鎧瓦製作技

菱刈晃夫

法からみた百済泗泚時代造瓦集団の—

野津 悌

J. オケゲムのミサ「カプト」の校訂につい

て

センス・オブ・ワンダーを育む特別活動—「生

きる力」再生のために—

ブラトン著『メネクセノス』考—「優れた弁

論家

agathos rethor」に（こ）

原田 覺

チベット仏教史年表（西暦1207～1266年）

（共同研究）

長谷川均・後藤智哉・藤田泰文 国士舘大学地理学教室

におけるリモートセンシング教育について—その2—

（学事彙報）

第四十号（平成二十年三月）

（論説）

阿部 昭

旗本宇津家知行所仕法の請負について—報徳仕法の歴史的評価の方法をめぐって—

田代 真

文学と映画の関係についての比較文学・文化論的考察—文学作品の映画化についての理論的、方法的検討—

磯谷達宏

日本の植生帯に関する近年の研究—人文科学の関連領域としての展望—

山室和也

小学校段階における文法指導のあり方について—小学校段階の文法指導はどのように位置づけられてきたか—

原田 覺

チベット仏教史年表（西暦1267～1322

6年）

村上純一

T・H・マーシャルにおける、シテイズンシップ、帰属意識と社会的包摂—「忠誠心」と「社会遺産」の概念を軸にした

『シテイズンシップと社会階級』の再解釈の試み—

（学事彙報）

第四十一号（平成二十一年三月）

（論説）

内村嘉秀

田代 真

中林梧竹の書論—「無法而有法」の書法論—「見ること」の構造—「見ることの誘惑」の主題への比較文学的アプローチのための予備的考察—

玉木一徳

戦後日本外交のFour Stages and Eight-tuple Three Principles—四つのステージ／八つの三方針・原則—

菱刈晃夫

梅原 保

情動知能の育みと道徳教育
新しい理科の方向性と基本的な科学概念の形成—小学校理科における確かな学力の向上を目指して—

木阪貴行

Die Möglichkeit der metaphysisch bestimmenden Urteilskraft

原田 覺

チベット仏教史年表（西暦1327～1386年）

武藤拓也

社会科における教科目標論の動揺と「法教育」

鈴木裕子

「健康相談」と「健康相談活動」の術語の沿革と使い分けについての一考察―養護教諭の行う相談の名称をめぐる―

（学事彙報）

第四十二号（平成二十二年三月）

（論説）

田代 真

柳町光男『カミュなんて知らない』における「不在」の構造

藤田梨奈

台湾作家司馬桑敦の韓国叙述―「高麗狼」と50年代―

石橋崇雄

『御製人臣敬心録』―「植黨論」―
小学校に於ける「総合的学習」のカリキュラムデザイン―その実践的展望―

千葉 昇

安藤秀俊

科学実験活動の自信に関する構造方程式モデリング―千葉市科学館のスタッフ調査をもとに―

木阪貴行

道徳法則と文化的諸価値の間に成立する人格の普遍性と文化相対性―異文化のもとにある

原田 覺

諸人格の相互理解と公共性―
チベット仏教史年表（西暦1387～1446年）

Junichi Murakami... Youth Identity under

the Fluidisation of Labour from mid 1990s onward in Japan

（学事彙報）

第四十三号（平成二十三年三月）

（論説）

奥山憲夫

内村嘉秀

濱中 修

江川陽介

元成宗朝の鈔賜与
中林梧竹の書論―書の美について―
巴の神話学―『源平盛衰記』を中心に―
陸上短距離走、長距離走、水泳競技選手のア
キレス腱の力学的特性の比較

山室和也

戦後文法教育史における古田擴の文法教育論
の位置づけについて―実践指導の立場からの
文法教育論―

（シンポジウム…景観を支えるもの）

木阪貴行

鷺野正明

磯谷達宏

景観とは何か
漢詩の風景
科学の諸分野で景観概念はどのように使われているか？

(教育研究・報告)

臼井嘉一

国士館大学文学部の教員養成教育と「教育実践演習」

千葉昇

「教育実践演習」の実践的課題―6つのカテゴリーとリーダーチャート―

木阪貴行

学部における共通感覚と「FD」―きめ細かい授業評価・ポートフォリオ・教職実践演習―

(学事彙報)

第四十四号(平成二十四年三月)

(論説)

小野瀬倫也

理科教育学における教授・学習論の変遷と今日の課題

阿部昭

二宮尊徳自家再建期の経営について―『全集』収載史料の読み直し―

岡島建

明治期の河川交通政策に関する歴史地理学的考察

松野敏之

元朝の学習カリキュラムをめぐる―『程氏家塾読書分年日程』執筆考―

(史料翻訳)

原田 覺

チベット仏教史年表(西暦1447～1506年)

藤田 忠

北京大学蔵西漢竹書『趙正書』について

(シンポジウム)

田代 真

アニメーション映画における景観と俯瞰―宮崎駿のアニメを中心に―

川又正智

境界世界の一事例―悪魔教徒・悪魔崇拝者と呼ばれるヤズィーデイ(ヤズィード教徒)紹介―

介―

秋山哲雄

日本中世の開発―「景観」から「俯瞰」へ―

(教育研究・報告)

内田順文

国士館大学文学部における「FD」に関する教員アンケート」の結果と分析

(学事彙報)

第四十五号(平成二十五年三月)

(論説)

青木聡子

幼稚園児をもつ夫婦の協同育児が主観的幸福感に及ぼす影響…育児の計画における連携・調整に着目して

片山紀子

法令遵守の視点からみた体罰に関する一考察現象と実在(上)―『純粹理性批判』書き換えを巡って―

えを巡って―

津田智久

劉備出自考

鷺野正明

明代徐禎卿の江南時代―文微明との交遊と洞庭唱和詩―

平 浩一 一九三五年前後の文学賞と作家の行方―龍胆

寺雄と太宰治をめぐる―

(シンポジウム…愛・からだ・卒業論文)

野津 悌 ソクラテスと2つの愛

菱刈晃夫 現代における教師の役割とは―「からだで感じるモラリティ」の教育をめぐる―

卒論を読む愉しみ、あるいは、教育の醍醐味

武藤拓也

(教育研究・報告)

江川陽介 1年次生へのオムニバス授業導入の意義と課題―教育学専攻専門科目「人間と教育」FDアンケート結果の分析―

フレッシュマンキャンプに関するアンケートの結果と分析―考古・日本史学専攻におけるFDへの取り組みの一事例―

秋山哲雄

中村一夫 新入生の現状と導入教育の一考察―日本文学・文化専攻のFDへの取り組み―

(学事彙報)

第四十六号 (平成二十六年三月)

(論説)

桜井美加

大学生メンターが経験する中学校におけるメンタリング―中学生の心理的ウェルビーイングへの影響―

河野 寛 動脈壁の柔軟性と諸肉体運動

奥山憲夫 明・宣徳期における武臣の「自陳」

宮地忠幸 山村農業の変容とその存立メカニズム

藤田梨那 郭沫若新体詩創作の歴史的意義―「風景」の発見と口語詩の試み―

濱中 修 横笛伝承考―法華寺・天野別所―

(シンポジウム…文学部で学ぶということ―国士館大学の場合―)

石橋崇雄 国士館大学文学部と《漢学》の伝統―「東洋道徳教本」と「樹人」から―

江川陽介 文学部でスポーツを学ぶ！ スポーツで学ぶ？

青木聡子 文学部初等教育専攻での学びとその魅力

(教育研究・報告)

(学事彙報)

第四十七号 (平成二十七年三月)

(論説)

堀井雅道

「いじめ防止対策推進法」の立法意義と課題―いじめに関する法政策の形成過程―

Faculty Development (FD) を考える：地理・環境専攻の取り組みと定期試験の「持ち込み」問題

千葉 昇

教育構造化論の新展開―教材の構造から学習材の構造化へ―

太田麻衣子

曹沫像の変遷―賢人から刺客へ―

濱中 修

建礼門院妙音菩薩考

(シンポジウム

日本の「姿」・「かたち」―目にみえるものと見えないもの―)

藤森 馨

日本人と神社

内田順文

小京都に見る日本の風景のイメージ

玉木一徳

戦後日本外交の五つの三原則―アジア太平洋とユーラシア―

(教育研究・報告)

藤森 馨 学校司書と総合的学習の時間

木阪貴行

FDを巡る雑感と若干の報告

川又正智

奥山憲夫 津田資久 太田麻衣子 東洋史学におけるFDのこころみ

松野敏之

国際大学交流セミナー ―中国語・中国文学専攻のFDへの取り組み―

(学事彙報)

第四十八号 (平成二十八年三月)

(論説)

羽山裕子 アメリカ合衆国における Response to Intervention 導入期の論点に関する一考察

―2003年Response to Intervention

シンポジウムでの議論に焦点を当てて―

木阪貴行

功利と義務と

菱刈晃夫

教育基礎と教育実践とのあいだ―教職の理論と実践を結ぶもの―

内田順文

国士館大学文学部地理・環境専攻における入試成績と入学後の成績との関連

藤田梨那

郭沫若の漢詩素養と創作

松野 彩

「うつほ物語」相撲節の虚構―左大将家での準備の場面を中心に―

仁藤智子

平安初期における后位の変質過程をめぐって―王権内の序列化とその可視化―

(シンポジウム

吉原裕一 武士道を成り立たせるもの

鈴木江理子

多文化化する日本の現在

宮地忠幸

日本の農村における地域づくりの新たな潮流

(特別寄稿)

安藤梨乃

(学事彙報)

弦楽四十奏版「国士館館歌」

(十) 文学部年表

昭和40年9月	文学部・法学部設置の認可を申請する
昭和41年12月	私立大学審議会が、文学部・法学部の設置に関して実地視察を行う
昭和41年1月	文学部の設置が認可される（教育学科・文学科・史学地理学科）
昭和41年1月	文学部校舎が落成する（世田谷校舎10号館）
昭和41年3月	教員免許状授与の資格が認定される（国語・社会・保健体育・書道）
昭和41年4月	文学部・法学部が開設される（文学部代表は宇野哲人教授）
昭和41年4月	鶴川校地に分校を開設する（政経学部Ⅰ部・文学部・法学部の一般教育課程）
昭和42年4月	史学地理学科国史学専攻に考古学コースが設置される
昭和43年1月	世田谷校地に松陰寮（男子）が完成
昭和43年3月	文学部三年編入学生の編入学生の漢学専攻3人、国語国文学専攻7人が卒業する
昭和44年2月	国士館大学人文学会、および国士館大学漢學會発足
昭和44年3月	教員免許状授与の資格が認定される（小学校教諭1級・幼稚園教諭1級）
昭和44年3月	『人文学会紀要』創刊
昭和48年1月	聴講生に対して教員免許状授与の資格が認定される（小学校、中学校、幼稚園各1級）
昭和48年4月	文学部教育学科、初等教育専攻が増設される（定員20人）また、教育学専攻・倫理学専攻の入学定員を変更する（各30人↓20人）
昭和48年12月	柴田徳次郎が逝去し、柴田梵天が理事長に就任する
昭和49年4月	国士館大学教員組合が結成される
昭和49年4月	各学部にも学部長制度が実施される
昭和49年4月	文学部長に尾形裕康教授が就任
昭和51年3月	推薦入試制度が導入される
昭和51年12月	初等教育会誌「すくすく」創刊
昭和51年4月	文学部「漢学専攻」を「中国文学専攻」と改称する
昭和52年4月	文学部長に峯村三郎教授が就任
昭和52年10月	初等教育学専攻が鶴川校地に移転開講
昭和53年4月	国士館大学漢學會『漢學紀要』創刊
昭和53年11月	「学園祭」を「楓門祭」に改称して開催される（テーマは『伝統と創造』）
昭和53年11月	「鶴川祭」が「鶴川楓門祭」に改称される
昭和53年4月	文学部長に春名好重教授が就任

昭和53年4月	国士館大学国文学会が発足する
昭和54年3月	国士館大学地理学会『国士館大学地理学会誌』創刊
昭和54年12月	国士館大学国文学会『国文学論叢』創刊
昭和55年4月	文学部長に春名好重教授が就任
昭和57年4月	文学部長に西尾邦夫教授が就任
昭和58年4月	国士館大学教育学会が発足する
7月	安高武常務理事、学内で暗殺される（享年58歳）
昭和59年12月	国士館大学教育学会『教育学論叢』創刊
昭和59年4月	文学部長に大類純教授が就任
昭和60年2月	柴田梵天、総長等を辞任し、錦引紳郎理事長（学長等兼任）、清水成之副理事長が就任
昭和60年10月	多賀秋五郎博士が学士院賞を受賞
昭和61年5月	選挙に基づく初めての学長に松島博教授が就任
昭和61年10月	「国士館将来計画検討委員会」が設置される（委員長は坂井正郎教授）
昭和62年10月	文学部創設二十周年式典が開催される
昭和62年10月	「国士館大学創設二十周年記念論集」刊行
昭和62年4月	「文学部短中期構想に関する検討委員会」が発足する（委員長は佐々木克衛教授）
昭和63年1月	「国士館大学文学部 学生・教員意識調査結果報告」作成
5月	第一回父母懇談会が開催される
平成元年4月	文学部長に廣野行甫教授が就任
平成2年3月	教職課程について再課程認定される
平成3年12月	文学部臨時定員増が認可される（平成4年度から平成11年度まで）。倫理学専攻10人、国史学専攻20人、東洋史学専攻10人、地理学専攻20人、中国文学専攻10人、国語国文学専攻20人
平成4年4月	多摩校舎（体育学部）開校
11月	鶴川メイプルホールが竣工
平成5年3月	『国士館史学』創刊
平成6年2月	文学部長に山本昌一教授が就任
平成7年10月	大学入試にセンター入試を採用する（初等教育・国史学・地理学・国語国文）
平成7年1月	文学部長に長島弘道教授が就任
7月	「国士館自己点検・評価委員会」が発足する（委員長には理事長が就任）
平成8年2月	10号館改修に伴い、教員の研究室が6号館2階に、事務室が8号館1階に移転する
4月	10号館の改修が終了
	教養部の解体に伴い、文学部に14人の教員が分属される

平成8年10月	文学部創設三十周年記念文庫設立される（鶴川14号館図書室）
平成9年3月	文学部創設三十周年式典が開催される
平成9年4月	『国士館哲学』創刊
平成10年4月	旧教養部所属教員の文学部専攻配属がきまる
平成10年4月	文学部長に奥野中彦教授が就任
平成11年2月	西原春夫理事長就任
平成11年6月	鶴川12号館研究室が開設され、情報コンセントが設置される
平成11年2月	鶴川校舎の町名地番が変更される（町田市広袴一丁目1番地1）
平成11年3月	文学部の臨定枠90人確保が承認される
平成11年4月	交換留学生の派遣、受入が開始される
平成11年9月	文学部ホームページが開設される
平成12年2月	大学入試センター試験の全専攻参入を承認する
平成12年3月	『初等教育論集』創刊
平成12年4月	文学部長に阿部 昭教授就任
平成13年4月	首都圏西部大学単位互換協定導入を承認する
平成13年7月	大学院人文科学研究科修士課程が開設される
平成14年4月	文学部学生による授業評価を実施する
平成14年4月	短期大学教員が文学部専攻に配属される
平成14年8月	セメスター制が導入される
平成15年9月	鶴川文学部事務室が9号館1階に移転する
平成15年4月	世田谷文学部事務室が5号館1階に移転する
平成16年4月	大学院人文科学研究科博士課程が開設される
平成17年5月	文学部長に磯辺武雄教授就任
平成17年7月	新入生から専攻名称が変更される（考古・日本史学専攻、地理・環境専攻、中国語・中国文学専攻、日本文学・文化専攻）
平成18年4月	文学部学生が東京教師養成塾入塾
平成18年6月	世田谷・梅ヶ丘キャンパス整備の基本方針が決定される
平成18年11月	学生による授業評価が全学的に導入される
平成20年4月	文学部長に藤田 忠教授就任
平成20年4月	『国士館東洋史学』創刊
平成20年4月	文学部創設四十周年式典が開催される
平成20年4月	『国士館大学文学部創設四十周年記念誌』刊行
平成20年4月	世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎が竣工され、文学部一年・二年次生および初等教育専攻三年・四年次生が移転する。文学部教育学科教育学専攻に、養護

平成22年4月	教諭課程が認定される。
平成23年3月	文学部長に枝村亮一教授就任
平成25年4月	『国士館人文学』一号(通算四三号)発刊(文学部人文学会)
平成26年4月	世田谷キャンパスメイプルセンチュリーホール開設
平成28年4月	文学部長に石橋崇雄教授就任
	文学部長に長谷川均教授就任

(土) 大学院年表

昭和62年11月	大学院設置促進委員会設置（委員長 志賀一朗教授）
昭和63年2月	学長・理事長に大学院設置の要望書提出
平成2年12月	国士舘将来計画第2次大綱（文学部平成7年～8年を目途として準備を進める）
平成5年3月	大学院設置促進委員会答申
4月	大学院設置準備委員会設置（委員長 奥野中彦教授）
平成7年9月	「大学院人文科学研究科の設置に関する計画の概要について」教授会承認
平成8年3月	「大学院人文科学研究科の設置に関する計画の概要について」（平成7年9月29日）教授会承認
平成8年10月	学長への大学院設置の再申請
平成9年6月	理事長、教務担当理事に大学院設置の要請
平成11年10月	学長に「文学部大学院人文科学研究科設置の要請」を提出
平成12年6月	理事懇談会において人文科学研究科の設置が承認される
12月	人文科学研究科設置認可申請書を文部省に提出
平成13年4月	人文科学研究科の設置が認可される
平成15年1月	人文科学研究科開設（修士課程） 初代委員長に小岩井弘光教授が就任
4月	人文科学研究科委員長候補者選出に関する内規制定
4月	人文科学研究科に博士課程を開設
4月	史学系8大学単位互換協定施行
4月	大学院地理学分野の単位互換協定施行
平成16年4月	人文科学研究科委員長に長島弘道教授が就任
平成16年6月	大学院考古学分野の単位互換協定施行
12月	人文科学研究科担当教員の資格審査に関する内規制定
平成18年4月	大学院の在り方検討委員会「大学院の在り方について」答申 人文科学研究科委員長に保坂智教授が就任

平成20年4月	人文科学研究科委員長に西野泰広教授が就任
平成22年4月	人文科学研究科長候補者選出に関する内規改正
平成23年4月	人文科学研究科長に勝田政治教授が就任
平成23年3月	人文科学研究科博士課程に学位「博士（人文科学）」第1号交付
平成26年4月	人文科学研究科長に鷺野正明教授が就任
平成28年4月	人文科学研究科 現在の単位互換協定校（史学系11大学、地理学分野6大学、考古学分野3大学）

国士館大学文学部創設五十周年記念事業実行委員一覧

村上純一（教務主任）

細越淳二（教育学専攻）

栗栖 淳（教育学専攻）

吉原裕一（倫理学専攻）

志澤 彰（初等教育専攻）

秋山哲雄（考古・日本史学専攻）

川又正智（東洋史学専攻）

内田順文（地理・環境専攻）

松野敏之（中国語・中国文学専攻）

平 浩一（日本文学・文化専攻）

編集後記

平成二十七（二〇一五）年十月に第一回「文学部創設五十周年記念事業実行委員会」を開いて以降、各分野において、記念事業の準備を進めてきた。『国士館大学文学部創設五十周年記念誌』の刊行も、その一つである。

五十周年記念誌は、平成十八年からの十年間の展開をたどることを主な内容としている。巻頭には、大澤英雄理事長・佐藤圭一学長・長谷川均学部長からの祝辞をかざる事ができた。概括的な回顧については、「創設期の文学部」もふまえ、「文学部四十周年からの十年」として、初等教育専攻においてまた学生主任として、長く文学部を支えてくださった中野紀明先生に執筆していただいた。「学部・学科・専攻の現状」や「統計・現況」については、先生方や事務職員のみなさまから御協力をいただいた。また、『国士館大学文学部創設四十年記念誌』も参考にさせていただいた。（株）リョーワ印刷の木内保氏の尽力によるところも大きい。あつく御礼を申し上げます。次第である。

（栗栖淳 秋山哲雄）

国士舘大学文学部創設五十年記念誌

発行日 平成二十八年十月二十九日

発行 国士舘大学文学部

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷四丁目二八番一号

電話番号 ○三(五四八一) 三三三二一

発行者 国士舘大学文学部・同創設五十周年記念事業実行委員会

委員長 長谷川 均

印刷 株式会社 リョーワ印刷

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚三丁目五五番八号

電話番号 ○三(三三七八) 四一八〇

